災いの姫君

TEAR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
災いの姫君

【Ｎコード】
Ｎ６４５２Ｓ

【作者名】
ＴＥＡＲ

【あらすじ】
広い世界ヴァストグランド。
そこにいたのは、性格も外見も正反対の二人の少女。
一人は美しい姫君、一人は天才女剣士。
姫君は世界を壊すために。女剣士は父の死の真相を知るために。
全く違う二人は執拗に、『力』を求め続ける。
世界の運命を変えるほどの『力』を求め続けた彼女たちは、
旅路の末に何を求めるのか……！

登場人物紹介　（随時更新）

そろそろ人物が増えて来たので、キャラクター紹介をしたいと思います。
登場人物が増えるたびに随時更新していきますので、この人誰？なんて思ったときに見て見て下さい。また、今書かれてある人物も物語の進行によって加筆していきますのでよろしくお願いいたします。

〜リーナスの家族〜

＊＊リーナス＊＊　（本名　リーナス・アルファ・ミスラーネ）
十七歳。

主人公。翠の髪と赤紫色の瞳を持つ少女。ラーナリアン王国親衛隊隊員。食べることが何よりも好き。
六歳の頃にラーナリアン王国からダングル帝国へと移り住んだが、本人はラーナリアン王国での記憶を一切失っている。
母も父も、ラーナリアン王国での大貴族のため、身分的にはかなり上位である。
剣術の腕は確かで、女子としては希に見る身体能力の高さであるが、本人はそれを自覚していない。
人の感情を察知する能力に長けているので、空気を読むことに関しては失敗することが無い。

＊＊エスライ＊＊　（本名　エスライ・アルファ・ミスラーネ）

リーナスの父。故人。ラーナリアン王国公認の諜報員であり、ダ

ングル帝国へは任務のため移住した。
ダングル王国では宰相ゼスト・ルーガスとして手腕をふるい、実質的に、ダングルの統治者であった。
穏和な政策で、人々からの支持は厚い。
リーナスの剣術の師であり、その腕は神懸かり的とも故郷では言われていた。
ダングルに移住してからは、政務のため家に帰ってくることは少なかった。

＊＊ヨーリヤ＊＊　（本名　ヨーリヤ・アルファ・ミスラーネ）

リーナスの母。元々はラーナリアン王国の大貴族の令嬢だったが、継母と反発して家を飛び出す。
その後エスライと出会い結婚した。
リーナスに関しては、深い愛情を持っているが、リーナスにとてはそれが鬱陶しく思うこともある。
諦めたりなどはしない、強い意志を持っているので、リーナスの良い手本になっている。
貴族という身分にとらわれたりしない人柄のため、貴族内では一匹狼だった。平民の友人はたくさんいる。

＊＊ヘスター＊＊

リーナスの家庭教師。故人。銀に限りなく近い金髪に碧眼を持つ。
かなりモテていたので、近所のお姉様方にこぞってアピールされていたがいつも一瞬で断っていた。
リーナスの良き理解者であり、リーナスは最大限の信頼を置いていた。
正体は、エスライの精霊。光の精霊である。
リーナスの傍を離れるなと命令されていたので、いつもリーナス

の隣にいた。

〜ラーナリアン王国親衛隊〜

＊＊ダグネス＊＊

ラーナリアン王国親衛隊隊長。ぼさっとした髪が印象的だが、意外と精悍な顔つきである。
リーナスの父エスライと知り合いであり、エスライを尊敬していた。
副長のエルとは、身分や階級などを無視した深い信頼関係で結ばれている。

＊＊エル＊＊　（本名　エルヴァンダル・ローラス）

親衛隊副隊長。黒髪に目だけが異様に鋭いが、顔だちは整っている。
親衛隊の中では若いほうに入るが、みんなからは一目置かれている。
まじめな性格で、ダグネスがやらない細々としてことをきちんとこなしているので気苦労も絶えない。
いつも仏頂面だが、人の気持ちには敏感なようで、細かい気遣いもきちんと出来る。

＊＊カームリ＊＊　十五歳。

親衛隊隊員。緩くウェーブのかかった金髪に、薄い碧色の瞳。
穏やかな見た目のかわいらしい少女だが、見かけによらず強引な性格で、リーナスはたじたじ。

親衛隊の治療師であり、その腕は確かである。
ピンク色が大好きで、リーナスとの相部屋は一面ピンク色である。
双子の兄がいる。

＊＊フィリアス＊＊　　十五歳。

親衛隊員。短く切った金髪に、悪戯っぽい碧色の瞳。カームリとよく似ている。
背は意外と小さい。
見た目は軽く、何も考えてないよう。
かなりのシスコンだが、それを自分で認めている。
リーナスとは喧嘩友達。顔を合わせれば喧嘩ばかりしてカームリに止められている。

〜無所属〜

＊＊イージュ＊＊　　十七歳。

紫の髪と瞳を持つ美少女。小さい頃に罪を犯しラーナリアン王城の隣にある高い塔に軟禁されている。
神懸かり的な魔術の才能を持っているため、魔術のおかげで今まで生き延びている。
ずばずばと物を言う性格なので冷たい人だと思われがち。
『世界を壊す』ために魔術を極めている。

＊＊ミディア＊＊

イージュの闇の精霊。黒い長い髪に真紅の瞳を持つ、闇の精霊の典型的な例である。
イージュが一番始めに契約した精霊でもあるので、気心が知れた

仲。
それがゆえに喧嘩をすることはしょっちゅう。ただミディアはイージュのことを主従の関係を抜きにしても大切に思っている。

＊＊リート＊＊

いきなりリーナスの前に現れた青年。紺色の長い髪を後ろに一つにまとめている。細い瞳は青色。
今にも倒れそうなくらい顔色が悪い。
どうやら、リートという名前は本名ではないらしい。詳しいことはよく分からない。

００　プロローグ　～姫君～（前書き）

私の初めて書くファンタジーです。毎週一回くらいは更新しようと思っています。

拙い文章ですが、楽しんでいただければ幸いです。

00　プロローグ　～姫君～

――ある静かな満月の晩。
少女が一人、月夜の中にたたずんでいた。
そこは、広い世界、ヴァストグランドの西に位置するラーナリアン王国。その中央に建つラーナリアン王城にある塔の最上階である。
彼女は昔から、古く、高いこの塔の主であり、塔は彼女の領域である。許可なく立ち入ったものは、何人たりとも許されない。表向き人は住んでいないとされている、この塔だが、随分前からそれが王城に住むものと彼女との暗黙の了解となっていた。

塔の最上階のこの部屋に、彼女は一人きりで住んでいた。
正確には、幽閉されている。その昔、罪を犯した罰として。
両親は、何てことをしたのだ。とまだ幼かった彼女を責めたが、十七になった今でも彼女はそれを悔いたことは一度もなかった。
自分の邪魔をしたものは排除する。それは彼女の絶対の考え方であり、信念を曲げずに行動したその果ての罪であった。

六歳のころに両親に幽閉されてから、十一年間。
公には、大罪を犯した彼女の存在は死んだことになっているだろうし、死んだことになっていない方がおかしいというものだ。
『両親は自分を殺したいのだ』から。彼女は六歳にしてそれを悟った。
幽閉されてからの十一年間、一度も食べ物や飲み物、着る物など、それらの類のものを渡されたことはなかった。
凡人なら数日とかからずに死んでしまう環境に置かれた彼女だったが、吉か凶か、彼女には神懸かり的な魔術の才があった。それは

六歳にして大の大人を圧倒する大きな力であったが、それとともに『災い』にも成りうる力であった。
彼女は、生きるため、罪を犯した元凶とも言える魔術を無我夢中で駆使し、そのおかげで今日まで無事生き延びている。

そんな彼女の部屋は、足の踏み場もないほどの古ぼけた本、本、本。その合間に申し訳なさそうに天蓋（てんがい）つきの大きなベッドとクローゼットがあるが、それらは厚くほこりがかかっており、あまり使われていないように感じる。
誰が見てもお世辞には綺麗とは言い難い部屋だが、彼女がいるなら別である。
神秘的な紫色の髪は、腰まで届くくらい長く、まっすぐ滝のように流れ落ちている。ぱっちりとした切れ長の瞳も同じく紫色。長くカールした紫色のまつげがそれを縁取る。
目鼻立ちも整いすぎるほど整っているうえ、肌は純白の雪のように白く、彼女の人間離れした美貌を最大限に引き出していた。
総じて、身震いがするくらいの絶世の美女である。神というものが、もしいるというなら、彼女がその神自身なのではないかと錯覚するほどの凄まじい美貌なのだ。
彼女がいるだけで散らかった彼女の部屋もどんなパーティー会場にも負けず劣らない。

そして今、彼女は、ゆったりとした、純白の絹のローブをほっそりとした体にまとい、白く、なめらかな手でバルコニーの手すりを掴み、月を見上げていた。
白い両手ともに、入れ墨のようなものが手の平、手の甲にあり、彼女には不釣り合いな禍々しいオーラを放っている。
その紫の瞳は、一点の揺るぎも、曇りもない。そこにあるのは、ただ、強い意志のみであった。

「世界は、脆くなった。なのになぜ……」
彼女は淡く光る満月を見つめながら、突然、呆然と漏らした。その透き通った声はあまり大声ではなかったが、凛と辺りに響き渡り、すぐに泡のように消えた。
そのとき、静かに冷たい風が吹き、彼女の豊かな紫の髪を揺らした。
その風は、彼女の肌とよく似た色の満月を一瞬にして黒雲に隠してしまう。
彼女は形の良い眉をぐっと寄せ、満月から目をそらし東の方角に目を向けた。
「――西の守護者が窮地に陥りかけている……。これは何を意味するの……？」
少し憂いを帯びたその問いに、答えるものは静寂だけだった。

しばらくして、彼女は、華奢な首を小さく振ってため息をつき、しずしずと音もなくバルコニーをあとにした。
「……こんなんじゃ、世界を壊せないじゃない」
いらだちのこもったそんな言葉をあとに残して。

００　プロローグ　～姫君～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

01　～惜別～　前編（前書き）

一週間、経っていませんが、本編第一話目です。
姫君の出番はかなり少ないです。二行ほどしかありません。
今回は『天才女剣士』と、その周囲から零れていく日常のお話です。

01　〜惜別〜　前編

姫君の住むラーナリアン王国の隣国である、東国ダングルの南に位置する辺境の町で、すべては始まった。

辺りの喧騒が、今日ばかりは、疲れ切ったヘスターの耳に心地よく響く。

ヘスターは、少し先をちょこまかと走る少女を見失わないよう、注意しながら早足で混雑した市場通りを歩いていた。

あの少女の名はリーナス。ヘスターが忠義を尽くす主、エスライの愛娘である。今年十七歳になったばかりだ。

あごの線で切りそろえられたつやつやと光り輝く翠色の髪。大きく、利発そうに動く瞳は、主君のそれとは違う、赤みがかった紫色だ。

六歳のころからの先生と生徒の仲だということを無視しても、元気で明るく、世間一般で、かわいいと認めて貰える少女だと、ヘスターは思う。

――少々、食い意地が張りすぎているのと、剣術が女にしては化け物みたいにうまいことが難点だが。

市場通りは、この町では、メインストリートに当たる。町中の店はほとんどこの通りに集まっているといっても過言ではない。作物や料理を売る屋台から、服屋、洗髪屋、農具屋、武器屋……　などなど、この通りに来ればこの町で手に入るものがほぼ手に入る。

ここらに住む人々は何かあればここに来るので、いつもここはかなりの混雑ぶりだ。

そこに来る人々は、ほとんどが、つぎはぎだらけの服、くすんだ髪の色。その中で小綺麗な格好をしているヘスター達は、周囲から浮いている存在だ。

ダングルの人々は総じて貧しい。ここでは北にある山から吹き下ろしてくる冷たい風のせいで植物があまり育たないのだ。

そうなると人々は危険は承知の上で鉱山資源に頼らざるを負えない。鉱山は毎日安定した収入が入るわけではないので、必然的に生活は切り詰められる。

ここでは、鉱山で働いて事故にあい、親を亡くした子ども達も多い。市場通りがあるここは他と比べれば裕福な方だが、やはりそういう子どもはどうしても目につく。

ここは比較的ダングル国内でも豊かな方だ。だから主エスライもここに拠点を置いたのだろう。

主の故郷ラーナリアンは豊かだ。ラーナリアンに戻った時にその豊かさに溺れてしまわないように。それをリーナスに教えるためにここに住んでいる。

当のリーナスは、突然ある店の前で立ち止まり、食い入るように食べ物を凝視していた。口元から、今にもだらりとよだれがこぼれ落ちそうだ。

（まったく……　リーナスは体は成長しても、心は子どもですね……）

今の状態を、リーナスの母、ヨーリヤが見たらどう思うだろうか。ヨーリヤは元々、隣国であり敵国である、ラーナリアン王国の貴族の一人娘で、家を飛び出したとはいえ、礼儀にはうるさい。まぁ、それも娘を思っているからなのだろうが。

そんなヨーリヤを、リーナスは極力さけているようだ。幸い、このところ仕立屋の仕事が忙しいらしく、リーナスやヘスターと顔を合わせる時間は少ない。

今日も、忙しくて昼ご飯が作れないヨーリヤの代わりに、市場で昼ご飯を買いに来たというわけだ。

「おぉい！　ヘスターさぁん！　こっちこっち！」
リーナスが、ヘスターが近づいたのに気づき、体全体を使って手をふり、ヘスターを呼ぶ。先ほどの剣術の稽古で見せた、真剣な形相とは、似ても似つかぬ、顔全体に広がる笑みに、ぎゅっと心をわしづかみにされた。

――もうすぐヘスターは、リーナスと『サヨナラ』しなければいけないのだ。

リーナスは、自分に歩み寄るヘスターから深い悲しみを察知して、顔をこわばらせた。
リーナスは、物心ついたころから、人の気持ちに人一倍敏感なのだ。人が悲しんでいるのを感じると、胸をきゅっとひねられるような感覚に襲われる。
いつも必要以上に明るく振る舞うのは、そんな顔をする人たちを見たくないから。剣術を練習するのは、悲しくて泣いているような人を悪者から守るためである。
最初は、そんな名目で始めた剣術だったが、今はもう純粋に楽しんでいる。剣を一心不乱に動かせば、嫌なことも忘れられるし、その出来が良かったらヘスターや、たまに帰ってきた父エスライにも褒めて貰ええるる。
褒められて伸びるタイプのリーナスには、褒められることは大切なのだ。
いつもニコニコとしており、何かあれば褒めてくれるヘスター。なのだが……。それが、このところは一切ない。一切、だ。

「ヘスターさん……」
思わずつぶやいてしまった。このところ、いつもそうだ。時間があればぼーっとしていて、心ここにあらず。何回も話しかけて、答

えが返ってくるのは一回だけ。とか、そんなこともよくある。
何が不安なのだか、リーナスには分からないが、もう少し他人に気を使っても良いと思う。
このまま『褒められパワー』（リーナス命名）が足りないままでは伸びるものも伸びない。
といっても、ヘスターの心の闇を取り除かないことには、何も解決しないだろう。これは、ただのリーナスの感で、根拠があるわけではないのだが、ヘスターの悩みには、リーナス自身が関係しているような気がする。本当にただの感だが。
「遅いですよ〜！」
不安でつぶされそうになる胸を何とか押し殺して、無理矢理笑顔を作る。
「すみません」
と、ヘスターは、そんなリーナスの気持ちを知ってか知らずか、苦笑しながら頭を掻いた。
ヘスターは、外見からするとまだ二十代だと錯覚する美男子だ。
本当は、父エスライの竹馬の友といっていたから、そんなことはあり得ない。
銀に限りなく近い金髪は長く肩に掛かる程度であり、したがって、手入れをするのが面倒くさくいつもショートカットのリーナスより格段に長い。切れ長の瞳は澄みきった空のような碧。背は高いが、一見して女性だと間違いそうに華奢であり、育ちの良さが一目で分かる外見である。
自分でも思うが、悲しいことにリーナスよりヘスターの方が格段に女らしいと思う。これまでヘスターが女と間違われそうになったことはリーナスが髪を切りすぎて男に間違われたことと同じぐらいある。
近所のお姉様方が放っておかない美しい顔だちであるにも関わらず、ヘスターは今まで誰一人興味がないようだった。ヘスターと過ごしてきた十一年間、ヘスターにアタックして玉砕した哀れなお姉

様方は数知れず。決まってリーナスはそのお姉様方を慰める役目だ。自分達が原因で悲しまれるのは、自分は悪くないと知っていても後味が悪い。
しかも、人が一生懸命慰めているというのに、この朴念仁は素知らぬ振りで本など読んでやがる。
心が海のように深〜い人は、ヘスターのあの行動も、『人それぞれ個性がある』で済まされるのだろう。
あいにく、リーナスはそこまで深くはない。まぁ、普通人より、少しは深いとは思う。
大泣きするお姉様方を慰めるこっちの身にもなれ、といいたいところだ。お姉様方の中には人がせっかく慰めているのにもかかわらずリーナスに向かって逆上する、たちの悪い奴もいて本当に大変なのだ。

リーナスは、そんなことを思い出しながらさっきまで見ていたサンドイッチを指さしていった。
「これ、食べましょうよ」
高いので白のパンは使えず、小麦色だが、レタスと思われる野菜と、厚い肉がこぼれ落ちそうにはみ出ていて、それでも十分においしそうだ。
「分かりました」とうなずいて、ヘスターがお金を出し、四人分買った。
二人で食べるのに四人分なのは、小食なヘスターに比べて、リーナスが三人分くらいはぺろっと食べてしまうからだ。
（母さんはきっとまた一人で食べるんだろうな……）
忙しい母ヨーリヤは、このところ仕事が一段落した後に自分の分だけ作って食べるため、今日も二人きりでの食事だ。
そこで、頭の回転が普通人より一回りほど遅いリーナスの頭が閃いた。

（ヘスターさんの悩み、外でピクニックをしながら聞こう！　そうすればうるさくいう母さんもいないし、気分転換になってあっさり話してくれるかも）
にっこり、極上の営業スマイルでヘスターに向かっていう。
「ヘスターさん、天気もいいから今日は外で食べません？」
「おっ！　それも良いですねぇ」
ヘスターは、今度は一回で、にっこりとほほえんだ。

リーナスは無理をして笑っているヘスターの顔を見て、心に誓う。
（逃げられませんよ、ヘスターさん。――あなたの悲しみ、教えて下さい）

リーナスがそんな決意を新たにしているその時、西の姫君は、静かに動き出した。
あたかも、水面にさざ波が広がるように。誰にも知られぬままで。

01　～惜別～　前編（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます。
まだまだこの調子で『天才女剣士』ことリーナス目線が続くと思われます。
姫君は？というかたも、（いらっしゃるかは分かりませんが）このまましばらくおつきあい下さると嬉しいです。

０２　～惜別～　後編（前書き）

今回、姫君の出番は皆無です。すみません。

02　～惜別～　後編

「うわぁ！！　すごい……！　ヘスターさん、よくこんな場所知ってましたね」

思わず感嘆の声を漏らしたリーナスに、ヘスターは言葉を返す訳でもなく、ただそこから見るミニチュアの町を眺めていた。

『外で食べるなら、良い所を知っています。着いて来て下さい』と言われ、やってきたのは町全体を良く見渡せる高台だった。行く道中、町の一角にあるとは思えない急な斜面をえっちらほっちら登った。

普段、剣術の稽古で体を動かしているとしても、慣れない筋肉を使うのはきつい。目の前をすいすい登るヘスターを妬ましく思ったことも、この景色を見れば吹っ飛んでしまう。

それにしても、丁度ヘスターが来た頃から十一年間知っているこの町にこんな所があったというのは驚きで、それだけに感動も一塩だった。

しばらくして、ヘスターにもう一度声をかけようとして横目で見ると、そこにいたのは、いつものにこにこほほえむヘスターではなかった。

「へ、ヘスターさん……？　もしかして……　泣いてるんですか？」

おそるおそる話しかけると、ヘスターは頬に伝う涙はそのままに、照れ笑いのようなものを端正な顔立ちに浮かべた。

「……すいませんね。感動しちゃって。私ももう年ですかねぇ……」

そう言ったヘスターだが、彼の顔には、時が経過したあとが一つも見られなかった。

リーナスが六歳の頃からの仲だが、容姿などはその時からほぼ変わっていない。

不思議と言えば不思議なのだが、リーナスは一回もそれを気にしたことがないし、周りの人も気にするそぶりは見せなかった。見た目はそのまま。見かけが変わらないまま年月を過ごす。なんてことはあるのだろうか……？

あるとしたらそれは……。きっと……。

「さっ！　お昼にしましょうか」

ヘスターが涙をぬぐい、湿っぽくなった雰囲気を吹き飛ばすように明るく言って草むらに座り込む。

そこでリーナスの考えは中断された。二つのことを同時にやることはリーナスにとって不可能に等しいので、考えはすっぱり捨てて、ヘスターの横に慌てて座る。お尻に当たった草がチクチクして結構痛い。

「どうぞ、リーナスの分です」

ヘスターが袋をごそごそとやって先ほどのサンドイッチを取り出した。登ってくる途中に崩れることもなく、サンドイッチは先ほどの姿を保っていた。

さっきまでは間違いなくおいしそうに見たのだが、今はそれほど魅力を感じなかった。

自分の分を受け取ったが食べる気がしなくて膝の上に置く。

それはひとえにヘスターのせいである。

今まで一度も泣いている所を見せたことがない、大人（しかも先生）にいきなり泣かれたのだ、かなり焦る。

それに、先ほど泣いたのは、感動なんかではなく、このところの深い悲しみと関係があると、リーナスは思った。だからこそ怖いのだ。きっと、良くないことが起こる。リーナスはこんな気配にも聡い。

ここでちらりと横目でヘスターを伺うと、やはりサンドイッチには手をつけていない。魂を抜かれたような表情で町を見ている。い

や、町ではない。もっと遠くを見ている。悲しみの気配と共に。
そんなヘスターを見て、ここでやっと決心が着いた。ふぅっと息を吸ってはく。近くの草がリーナスの息に当たってさわさわと揺れる。何回も何回も吸ってはいてを繰り返してようやく口に出来た。
「……ヘスターさん」
真剣な思いを声に込める。いつもは二度、三度と言わないと返事をしないヘスターだが今回ばかりはきちんとリーナスの方を向いてくれた。
「どうしました？」
極めて明るく、ヘスターが問う。
（今だ！　がんばれあたし！！）
もう一度息を大きく吸って口にする。
「あの、このごろヘスターさん、いっつも悲しそうじゃないですか。なんでかなぁって思って……」
最後の言葉にいくにつれてどんどん声が小さくなっていく。決心したのはいいが、やはり怖くて物怖じしてしまう自分。　そんなリーナスの話でも、ヘスターはどこか淋しい微笑を浮かべて聞いてくれた。

一拍置いて、大きなため息をヘスターがついた。
「しょうがありません……。丁度、ここらへんが潮時なのですね。リーナス。良く聞いて下さい。
居眠りなんて、言語道断ですよ。　――これがおそらく私の最後の授業になるでしょうから」
その言葉とともに放たれた深い、深い悲しみ。
それにリーナスの体は自然と固くなった。今まで、誰からも感じたことのない大きな悲しみの気配。
（最後の授業……？　何言ってるの、ヘスターさん……）
リーナスの頭は『最後の授業』で思考停止中だ。

（まさか、いなくなったりしないよね？）
不安。耐え難いほどの不安。あの唇からリーナスにとってどんな残酷な言葉が紡ぎ出されるのか。
それを自分はどんな表情で聞けば良いのだろう。こんな時の対処の仕方なんて、誰も教えてくれなかった。リーナスには、分からない。
「何から話しましょうか……」
そう言ったヘスターの顔は、難題をぶつけられた子供のようにくしゃりとゆがんでいた。
もしかしたら、また泣きそうなのかもしれない。
けれどヘスターは泣くこともなく、ただその顔でそのまま黙り込んでしまい、リーナスも一緒に不安が渦巻く胸を抱えたまま、口をつぐんだ。

しばらく経ってから、ヘスターがゆっくりと、言葉を吟味するように声を発した。
「私は――――精霊です」
リーナスの心に、驚きが現れて消え、こんどは納得が生まれていく。
「前にも、授業で話しましたよね？　精霊とは……。大地の源、『ソフィナ』が具現化したもの。
私は、あなたのお父上、エスライ様と契約した精霊です。今はこうして、人の姿をとっていますが、これは仮初めの姿。本当は、実体のない、幽霊のようなものです。
この姿を保っていられるのは、エスライ様の魔力のたまものですので、エスライ様がいなければ、私は、『人』として生きてゆくことは出来ません」
もともと会った時から、『人』ではないものみたいだと思ってい

た。
　ヘスターからの授業を聞いて、精霊が実在するならヘスターさんみたいな人かなぁと、無意識に思っていた。だから、今更驚かない。隠れているのが見え見えで驚かされるようなものだ。
　あまり驚かないリーナスを見て、ヘスターは意外というように目を丸くした。それと共に『悲しみ』が少し薄れ、『驚き』の気配がふわっと漂った。
「驚かないんですね」
「――ちゃんと驚きましたよ。ただ、納得しちゃったんです」
　答えると、ヘスターは微かにほほえんだ。
「リーナスには、やはり分かってしまいましたか」
　言うと、どこか遠くを見るような顔をする。
「すみません。あなたを……。苦しませてしまったみたいで」
　そう言って、ヘスターは、リーナスをじっと見据える。
　その、明るい碧の瞳の奥の、暗い悲しみ。リーナスは思わず目の中に吸い込まれてしまうような錯覚に陥った。
　目を逸らそうとしてもヘスターの瞳の魔力のようなものにはあらがえずに、ただ固まってヘスターを見ていることしか出来ない。
　ヘスターの心の中では大きな葛藤が起こっているのが良く分かった。瞳が揺れ、色々な感情が見え隠れしている。悲しみ、驚き、絶望、希望、愛情、友情……。
　リーナスがまだ感じたことのない様々な感情達。どれほどの時間、ヘスターがエスライと共に生きてきたのか。それを垣間見たような気がする。自分がどれほど努力しても入ることは出来ない。そんな聖域を。
　ふっと、ごちゃごちゃした感情が消え、見たのは『愛情』、ただそれのみだった。

　ヘスターは一息吸ってから、重々しく告げた。

「……エスライ様と、私の命は、残りほんのわずかです」
そのとたん、心臓を鈍器でなぐられるような感覚に、リーナスは襲われた。
全身から血の気が引き、一気に体温が低くなったような気がする。
理解したくなかったけど、理解してしまった。悲しみは偽ることは出来ない。この悲しみは間違いなく本物だ。

――ヘスターも、エスライも死ぬ。死んでしまう。

ヘスターは、『死ぬ』ことが怖くないのだろうか。リーナスは怖くてたまらない。
死んだ先には、黄泉の国があるという。黄泉の国とは、確かに良い所かもしれない。けれど、もう生きる人々と関わることが出来ないなどリーナスに耐えきれない。だから、『死ぬ』ことが怖くてたまらない。いつまでも、愛する人々と一緒に生きていたい。
けれど、リーナスと違ってヘスターは、生きることに執着していないように見る。精霊と契約者は、ほぼ同一の感情を持つという。ヘスターがそうだとすれば、父エスライもそうだということだ。
妻と娘を置いて逝くことに未練はないのだろうか。分身であるヘスターの瞳からは、未練など一切ない。問い詰めてみたい。けれどもそれが無理であることもすぐに分かる。
未練はないが、『愛情』はひしひしと感じる。自分達は、これ以上ないほど愛されている。だからこそ、未練の情を見せないのだろう。未練など残して、愛する人たちの元から去りたくないから。
未練なく愛する人々の元から去らなければ、残された人々が前を向いて生きることが出来なくなる。

――でも、分からない。なぜ、幸せはすぐ消える？去り逝く人と共に。なぜ神はそんな決まりを作った？

「ヘスターさんも……。　父さんも、死ぬ……？　なんでですか？」

苦労して声を絞り出した。蚊の鳴くような小さな声だったけれども。

ヘスターは泣き笑いのような表情を浮かべて笑った。

「私にも分からないのです。――すみません、リーナス。もう私には時間が残されていません」

そう言って視線を落とす。

そこにあったのは、光の粒子となって消えてゆくヘスターの手。

思わずその大きな手を包み込むようにして握った。

大きな手。リーナスとは違う、剣術の天才とは思えないほどなめらかな手。

最初はあんなに剣を握っているのになぜまめが出来ないのだろうと、疑問を持ったが今なら分かる。

精霊は怪我をすることも、主が死なない限り死ぬこともない。全部ヘスターが教えてくれたことだ。

今更分かっても遅いというのに。もっと早く気づいてあげなければいけなかったのに。

（遅い……？　でも、あたしはもうヘスターさんが『人』ではないことを知っていた。

本当は、知ることではなく、受け入れることが大切だったんだ）

悔しい。今更だけど。もう変えられないことが分かっていても。

もっと早く、早く受け入れていれば、こんな急すぎる別れなど、なかったはずだ。

ヘスターは、泣き笑いのような表情を浮かべたまま語る。

「私は、人としての生を終えますが、大地の源、『ソフィナ』に変わってリーナスを見守っていますから。……安心して下さい」
どんどんヘスターの手が光の粒子となり消えていく。リーナスではつなぎ止められない。
エスライでなければ、エスライではなければ意味がない。この時ほど、自分を無力に思ったことはなかった。
止められない消滅。それは、砂が崩れていく様子と酷似していた。
――精霊は、契約者が死ぬと自身も死ぬ。精霊の体は大地の源『ソフィナ』と代わり、世界に放たれる。これも、ヘスターから教わったことだった。
「ヘスターさん、教えて下さいよ。お願いです。なんで死んじゃうんですか……？
残して逝かないで下さい」
「それは、私にもよく分かりません。ただ、死を回避することはもはや不可能です」
きっぱりと言い切るヘスター。
そんなヘスターの顔を見て、リーナスはこれ以上聞くのをやめた。
ヘスターの瞳には、悲しみの中に覚悟したような強い光が灯っている。

（ヘスターさんは覚悟している。あたしが覚悟決めなきゃ……）
『最後に決めるのは自分だ。それまでどんなに助けてもらっても、最後くらいは自分の力で、自分の意志で決めなさい』
エスライの言葉、この間会った時に言われた言葉。きっと、エスライはそんなつもりで言った訳ではないと思う。けれど、その言葉は今のリーナスに確かに欠けているものだった。
その時、瞳からみるみるうちに水が盛り上がり、乾いた地面にしみこんでいった。

最初はそれが何か、理解することが出来なかった。
（あたし……　泣いているんだ）
泣いたのは久しぶりで、こんな感覚を忘れてしまっていた。
（残して逝かないで……）
泣きやもうとしても止まらない涙。残して逝く方よりも、残される方が辛い。
家に帰って来てから、また仕事に戻るエスライを見送るたびに思っていたこの感情。
いつも送る側のヘスターが今回は送られる。

――もう二度と帰らない。もう会えない。もう一緒に笑うこともない。
でも、それが現実。受け入れなければいけない。起こるべくして起こったことなのだから。

そんな言葉を心の中で繰り返した。
受け入れられたのだろうか。何回も同じ言葉を繰り返しているうちに、涙が止まった。
ヘスターはその間、ただ黙って抱きしめてくれた。
精霊は、契約者とほぼ同じ人格を持つ。今抱きしめてくれているのはヘスターなのに、小さい頃エスライに抱きしめてもらった時のような感覚に陥った。
なぜ、大地の源ソフィナから生まれたヘスターがこんなにも暖かいのだろう。この暖かさがもうすぐ消えてしまう。
悲しい。けれどもう泣かない。泣いてもヘスターを困らせるだけだ。
だからリーナスは笑う。心のそこから笑う。今までの恩返しだ。
「ありがとうございました。ヘスターさん」

（あぁ、あたしって弱いな）
どうしても、いつもの通りに笑うことが出来ない。けれども、ヘスターには笑顔に込められた気持ちは伝わったと思うし、それを信じる。誰よりもそばにいてくれたのは、ヘスターなのだから。
その証拠のように、ヘスターは慌てて一緒に笑った。その笑顔は、リーナスのそれとは違う。心からの笑みだった。
重荷が一気に消えて身軽になったように、瞳の奥に残っていた悲しみがすべて、消えていった。

ふいに、ヘスターの腕の感覚が無くなった。
慌ててヘスターの胸から顔を放すと、もう体全体が光の粒子と変わっていた。
（……きれい）
思わずそう思ってしまうほど、幻想的だった。体全体がヘスターの髪の色のような光に包まれる。
消える間際だというのに、ヘスターは微かに笑っていた。
――訪れる死を、静かに受け入れるように。
「お別れです。リーナス。あなたと過ごした日々、とても幸せでした」
もう下半身が消えて無くなってきている。光の粒子が二人の周囲を取り囲んだ。
「リーナス。エスライ様の言葉だと思って聞いて下さい。
あなたの剣術の才は男性をも凌駕するものです。
どうか、その力を善のために使って下さい。――そして、幸せになって下さいよ？
私と、エスライ様の、最期の願いです」
そう言って、リーナスの頭をくしゃりと撫でた。その瞬間に、腕全体が光となって消える。
「リーナス……。さようなら。私はいつでも、あなたを見守ってい

ます」
耳元で、ヘスターが身をかがめて優しくささやいた。
その時、ヘスターの体を構成していた粒子達が、花びらが散るように風に吹かれていった。ヘスターの体がすっと消えてゆく。先ほどまで人がいたとは考えられない。
幻想的な光の粒子達は空に舞い上がり、消えてゆく。ゆっくりと、舞を踊るように。
そんな中、ひときわ大きい粒子がリーナスの元へと舞い戻り、背中から体の中に吸い込まれるようにして、消えていった。

その時、
――私達はここにいますよ。
そんな声が、リーナスの耳には聞こえてきたような気がした。

涙はもう出ない。もう泣かないと決めたから。ヘスターとエスライが言った通り、幸せになるために。

（見てて下さい。あたし、やり遂げますから）

エスライ達はなぜ死んでしまったのか。故意によるものなのか。だとしたらその人物は誰なのか。
絶対に、その謎を解いてみせる。
二人がもし生きていたら、『復讐にとらわれるな』と言うかもしれない。
でもこれは復讐ではない。リーナスのやり方での、本当の『別れ』のために必要なのだ。

それが完了した時、本当の意味でリーナスは幸せになれる。

（そう、あたしは信じる。最後は自分で決めなさい。だよね？）

そうして、リーナスは立ち上がり高台から歩み去った。

残されたサンドイッチが、新たな決意を胸にしたリーナスを、静かに見送っていた。

02　～惜別～　後編（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

03　～出発～

リーナスはただ一人、町を歩いていた。母ヨーリヤにこのことを知らせなければいけない。
ヨーリヤが、どんな顔をして悲報を聞くのか。自分はどうすれば余りショックを与えずに伝えることができるのか。それを考えながら。
お昼を少し過ぎたようなこの時間はきっと家に帰って少し遅いお昼ご飯を食べているところだと思う。
話をするのにちょうど良い時間帯だ。
リーナスは、いつもヘスターと二人で帰っていた家へ、一人足を向けた。

家はいつもの通りに建っていた。十一年前から何も変わらない、ただの日常の風景。
ただ違うのは、その中に住む人の数だけ。じきにこんな家にも慣れてしまうのだと思うと、少し寂しい。
でも、立ち直るためには、それが必要不可欠なのだ。
自分にそう言い聞かせ、リーナスは少しもの悲しい気分でドアを開けた。
「ただいま」
少し大きい声で叫ぶ。けれども、返事が返ってくることはない。
（母さん、どこか行ってるのかな？）
少し不安になり、早足で家の中を探し回ると、自分の部屋にヨーリヤはいた。
明るい茶色のショートカットに、リーナスととても良く似た赤紫色の瞳。少しつり上がっている大きな瞳は、意志の強さを明確に示していた。
そんなヨーリヤは、ばたばたと部屋の中を駆け回って荷物をまと

めていた。まるで今から夜逃げでもするように、衣類などを大きめのトートバックに詰めている。
「母さん？」
そっと声をかけると、ヨーリヤはリーナスに今更ながら気づいたようだった。
「お帰りなさい」
振り返って少しやつれたように見える笑顔でリーナスを迎えた。
瞳の奥に揺れる、深い悲しみの色。リーナスと同じように、ヨーリヤはエスライのこと、ヘスターのことを知っているようだった。伝えてくれる人がいるはずはない。なぜだろう。
リーナスの疑問に答えるように、ヨーリヤは口を開いた。少し大きめの固い声で言う。
「リーナス。そこに座ってちょうだい」
指を指したソファーにリーナスが座ると、ヨーリヤもまた、リーナスの隣に座った。
そうして、リーナスの手を優しく握る。剣ばかり持っているせいで、女の子らしからぬごつごつした固い手を。
手を握ったまま、ヨーリヤは顔を毅然と上げ、リーナスを見つめた。
「リーナス。あなたも、最期を看取ってくれたのね」
瞳には、今にも泣きそうな自分の姿が映っていた。もう泣かないと決めたはずだ。
（あたしの馬鹿！　しっかりしなさい！）
心の中で弱い自分を叱咤しつつ、尋ねる。
「あなた『も』？」
ヨーリヤは小さくうなずく。
「父さん……エスライの精霊は一人ではないから。ヘスターさんの代わりの精霊をよこしてくれたのよ。
あなたと同じ。私もその精霊の最期を看取ったわ」
そう語るヨーリヤは、辛いはずなのに凛としていた。瞳に映るリ

ーナスの姿とは違って。
（やっぱりあたしは母さんの娘なんだ……）
くよくよ悩んだりしない。辛くても未来を見すえて生きる。ヨーリヤの娘で良かった。ふだんは苦手な母親だったが、今ばかりはそう思わずにはいられなかった。
「あなたが知りたいことは、たくさんあると思う。それに答えることは今はできない。
やることが、すべて終わってからすべてを話す。約束するわ。だから、今は母さんの言うことを良く聞いて、疑問があっても何も言わずに従ってちょうだい。いい？」
ヨーリヤの自信に満ちた言いように、ただうなずくしかなかった。
「リーナスの部屋からも目に付く衣類は持ってきたわ。外に、持って行きたいものはある？」
ヨーリヤが立ち上がって部屋の真ん中に置いてあったバックをリーナスに見せた。
なぜ、そんなことをしなければいけないのか。早速疑問に思ったが、それを苦労して飲み込んだ。ヨーリヤとの約束を忘れた訳ではない。
バックの中身はリーナスのお気に入りのものばかりで、ほかに持って行きたいものは、剣だけだった。
今年の誕生日に父エスライが買ってきてくれた剣で、余計な装飾が付いていないところが一番のお気に入りポイントである。意外と切れ味は鋭く、誕生日に剣をさわったら少し血が出てしまった。
それを見て、ヨーリヤはいい顔をしなかったが、今自分の部屋からその剣を持ってきても、嫌な顔をしたりしなかった。
（父さんとヘスターさんの形見だもの）
ヘスターとは時々この剣で練習試合をした。最初はどうしても勝てなかったのだが、この頃は百回に一回ぐらいは勝てるようになってきたのだ。
もう一回試合をしたかったと思ったが、そのことを考えても辛く

なるだけなので強制的に考えを頭の中から抹消する。
「母さん、あたしの方は準備完了だよ」
そう声をかけてヨーリヤを見ながらゆっくりうなずく。これから何が起こるか分からない。けれど、ヨーリヤの考えることだから、悪いようにはしないだろう。いつもはその大きすぎる愛情に反発するけど、今はただヨーリヤに従おうと思った。

「リーナス。今から母さんの実家に行くわ」
ヨーリヤがきっぱりと言い放つ。瞳には、いつの間にか悲しみが薄れ、かすかに、本当にかすかにではあるが希望が見え始めていた。
何を言われても驚かないはずのリーナスだったが、思わず口をあんぐりと開けてしまった。
「大丈夫。すべてが終わったら、またここに帰ってこられるわ」
そんなリーナスを見て、ヨーリヤは苦笑のようなものを口元に浮かべて言った。
すべてが終わったら。それは、いつになるのだろうか。すべて。とは何のことなのだろう。これから何か大きなことを、やらなければいけないのだろうか。
本音を言うと、行きたくない。このままここで、いつも通りに過ごしていきたい。
いつも通り……？　違う。エスライとヘスターがいなくなった今、また元通りになることは不可能だ。　どんなにもがいても変えられない現実というものを今突きつけられたような気がする。
（あたしは今どうしたら良い？）
エスライだったら、ヘスターだったら。何て考えてしまう自分は、まだ『自分自身で決められる』人にはなれていない。
（あたし……。　あたしはっ……！）
「母さん、そこに行ったら自分を変えることができると思う……？」
勢いそのままに口に出した。『疑問があっても何も言わずに』と

言われたのを言ってしまってから思い出す。
けれどもヨーリヤは注意したりせずに、大きくうなずいてくれた。
「えぇ、リーナスなら、きっと」
「じゃあ行く」
短く、でも声は大きく伝えると、ヨーリヤは苦笑して、
「決定権はあなたにはないのよ」
と言った。
（そうだけど、あたしの心の決定権はあたしのものだよ）
そう口から出かかったが声には出さなかった。

ヨーリヤは、部屋の真ん中にバックとともに置いてあった一枚の大きな紙を取り出した。
一辺がリーナスの身長ほどあり、かなり古いものであるとともに、大きな魔力の波動を感じた。
魔術に関しては疎いリーナスがそれを感じるくらいだから、魔術が使えるヨーリヤは、きっとこれ以上の力を感じているのだろう。
リーナスの髪よりももっと濃い緑色の魔法陣が描かれていて、それが波打ちながら淡く光っていた。
「これは『転移』の魔法陣。私が呪文を唱えて『転移』を発動させるから。
そうすればここからラーナリアン王国の母さんの実家に帰れるわよ。
さぁリーナス、荷物を持ってここに乗ってちょうだい。大丈夫、痛くはないから」
呼吸を整えてから、ヨーリヤが言う通りにおそるおそる魔法陣に乗る。
その一瞬、ぴりっとする感覚が体全体に走ったが、本当に一瞬だったので、痛くはなかった。
部屋に立っているというのにそれとともに違う場所にもいるよう

な感覚に襲われる。
ヨーリヤも遅れて魔法陣に乗り、ぎゅっとリーナスの手を握った。少し汗ばんだようなヨーリヤの手の感覚。
「絶対に、離さないでね」
その声音は、どうも何かに焦っているようだった。証拠に、先ほどまで自信に溢れていたヨーリヤの体全体を、焦りの感情がぐるぐると渦巻いている。
「大丈夫だよ、母さん。あたしは大丈夫だから。どこにも行かないよ」
そう強く言ってヨーリヤの手を同じく、強く握る。ヨーリヤも、一拍おいて強く握り返してくれた。
それとともに、少し焦りの感情が薄れた。
「行くわよ……」
「うん」
もう一度、ヨーリヤの手を強く握る。
「我が理に存在するもの達よ。古き主から去り、我が元に集い給え。
汝は我が力。我が力達よ。今こそ我が命に答えよ！　マジックゲート！！」

ヨーリヤの詠唱が終わると、魔法陣が、耐え難いほどの輝きを放ち始めた。たまらず目を閉じると、風が舞い上がり、リーナスの頬に打ち付けた。
魔術とは、普通ではあり得ないことが起こるというのを了解済みだったので、風が吹いた時は何も感じなかったが、次の瞬間はさすがに驚いた。
一瞬で光が消え、目を開けると、次の瞬間には真っ暗やみの世界。
ただ、自分とヨーリヤとの二人を乗せた魔法陣だけが真っ暗やみの世界に浮かんでいた。

意識を集中させると、その中を上へ上へと上っていることに気づいた。
身体が上下左右に伸びては縮んでいるような感覚になりながらも、一心にヨーリヤのことだけを考え、手を握る。
急上昇しながらも、風は相変わらず吹き続けている。肩にかけているバックの中身が吹き飛ばされないか気になるところだが、そんな余裕はなかった。
痛い……。身体の自由がきかない。身体全体が大声で悲鳴を言っているような幻覚も聞こえてくる。
ミシミシ。ボキボキ。
いや、幻覚ではなく現実だった。身体の関節が今までにないくらい鳴っている。
このままでは骨が折れる。本気で心配になってきた。最初は上下左右に引っ張られるような感覚のみだったのに関わらず、今はかなりの圧力が身体全体にかかっている。

耐えられなくなり、ふいに気を失いそうになった時、いきなり緑色の光が溢れ、景色が変わった。
テーブル、いす、ソファー、ベット。場所は違えど、良く知っている家具達。やっと目的地に着いた。
ヨーリヤの実家だ。ふっと、力が抜け、握っていたヨーリヤの手がすり抜けていく。
体が傾いでそのまま意識を失う。
「リーナス！？」
ヨーリヤの声だけが、薄れ行く意識の中で聞こえていた。

03　～出発～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

04　～告白～

目が覚めた。
ゆっくりと開けた瞳に真っ先に映ったのは母ヨーリヤの心配そうな顔。いつもは芯の強そうなその瞳も今はなぜか元気がなかった。
「良かった……」
ささやくような小さい声をヨーリヤが漏らす。
（ここは……？）
ベットに寝かされているのは分かった。
（ここ……どこ？　何でこんなに綺麗な部屋にあたしが……。――――！）
不意に、頭の中に今までの記憶が濁流のようになだれ込んできた。
もう愛する人たちはいない。そんな日常が訪れてしまったのだ。
けれど、心はもう決まっている。もう泣かない。それに、リーナスにはやらなければいけないことがあるのだ。そのためにヨーリヤについてきた。
（んじゃ、ここは母さんの家？）
気を失う直前にも見た気がするが、良く覚えていない。
体を起こして辺りを見渡すと、この部屋がかなり広いことが良く分かる。かなり豪華なことも。
ここが王宮の一室だと言っても通りそうだ。
床には、複雑な文様が書かれたふかふかの絨毯が隙間なく敷き詰められている。かなり複雑な文様なので、家紋なのかもしれない。絨毯の色はリーナスやヨーリヤの瞳と同じような赤紫だった。
広い部屋なのに、置いてあるものはあまりにも少なく、タンス、テーブル、いす、ベットのみだった。
こういった豪華な部屋を他に見たことがないので良く分からないが、本当はこんなに財力がある人間なら絵画などを置くのではないのだろうか。

ヨーリヤの実家というから、ここはヨーリヤの血族の誰かの部屋なのだろう。
（うん。あたしの趣味とぴったり）
あんまりごたごた装飾があるのは大嫌いだ。この部屋の絨毯は気に入らないがまぁ合格点などと一人で思っていると、ヨーリヤがそっと肩に触れた。
「大丈夫？　リーナス。あなた丸一日寝てたのよ」
「丸一日も！？」
丸一日寝ていた奴には似合わない、大きな声を出したリーナスに、ヨーリヤはほっとしたようで、大きな安堵のため息をついた。
「えぇ。まぁ、もう大丈夫でしょうね」
苦笑しつつ答える。
そこでリーナスの脳裏にあの約束が浮かんだ。
「母さん。いつか、話してくれるって言ったよね？」
ヨーリヤはリーナスの意図に気づいたようだった。
少し顔を曇らせる。
「今までのことを話せと言うのね……。　『全て』が終わったわけではないけど、この機会を逃したらずっと話せないかもしれない……。　良いわ、話しましょう」
ヨーリヤはそう言ってリーナスに布団を掛けて自分はその大きなベットの端に腰掛ける。
こちら側からはヨーリヤの顔は見えない。けれど、その後ろ姿からはいつも通りの強い意志が再び盛り返すのを感じた。

ヨーリヤも、リーナスのように『愛する者の死』を受け入れたのかもしれない。

「では、ヨーリヤの昔話が始まりますよ」
ぴんと張った糸のような張りのある声で、ヨーリヤは語り始める。
「まず、私とエスライ。二人の生い立ちから話しましょう。
私はこのラーナリアン王国の貴族であるフェージメント家の一人娘よ。
ご存じのように、家を飛び出してダングル帝国へと向かったのだけど、これはまた後の機会に話すことにしましょうか」
ここでふぅっとヨーリヤがため息をついた。
（疲れたの！？　まだ早いけど……）
その瞬間漂ったのは悲しみ。
「幼い頃に病弱だったお母様が亡くなり、私はお父様とメイド達と過ごしていたの。
周りのメイド達が良くしてくれたから、お母様が亡くなったとはいえ、その生活はそこそこ楽しいものだったわ。けれど、すぐにその生活は消え去った。
お父様が、継母と結婚したのよ。継母は、お父様のお金目的でこの家に嫁いだのが、小さい私でも分かるほど見え見えだった。
後から知ったのだけど、お父様は、その結婚に反対だったみたいね。けれど継母の両親に脅されて仕方なく結婚したらしいわ。
継母は、お父様にはいい顔をして、私やメイド達には辛く当たった。
私が一番辛い仕打ちをされたみたいね。けれど、私に関わったメイド達も負けず劣らず辛い仕打ちをされた。
その中でも、継母が連れてきたメイド達の私付きのメイド達への嫌がらせがひどくて……。
私の見知ったメイド達はどんどんいなくなっていったわ。気づいたら私の知っているメイド達は一人残らずいなくなり、継母が連れてきたメイドに変わっていた。
最初は『裏切られた』なんて憤っていたけど、私も大人になった

から、からくりが読めるわ。
メイド達は、自分の意志で辞めたのではなく、継母に強制的に辞めさせられたのね。
私やお父様に不自然に思われないように。ゆっくりと、間隔を開けて。
ひとりぼっちの私は、そのまま家にいるしかなかった。外に出て行きたかったけど、出たらどうなると思う？　あの頃の私は世間しらずの貴族の娘よ。生きていけるはずがないもの。
孤独のまま、エスライと会うまで生きていたわ」
そういうヨーリヤの背中からは普段のヨーリヤには似合わない『負』の感情が渦巻いていた。
そんなヨーリヤは初めてなので少し、とまどってしまう。

「次はエスライの生い立ちを話しましょう。
エスライは、私とは違い、貧しい農民の子だった。家族構成は、父、母、妹とエスライの四人家族。
両親は昔、軍に所属していたわ。父親は兵士、母親は魔術師。二人は、ある地方の警備の仕事で同じ隊に所属したらしいの。
けれど、ある日エスライの父上は警備の仕事の途中に、腕に傷を負って引退を余儀なくされて。そこで母上は一生この人に添い遂げて助け合おうと思った。そして結婚した。そうエスライは言っていたわね。
二人は、子どもも二人生まれて、幸せな生活を送っていた。エスライは剣を握れなくなった父の無念の思いから、剣術を父から習っていたし、母親の魔術の才も受け継いでいた。
強くなって当たり前の環境に置かれていたのね。剣術の腕も、魔術の腕も、未熟ではあるけど、そこらの年上の子どもにも、絶対に負けないくらいに上達していった」

そこで、ヨーリヤはいったん口を切った。そして言葉を重々しく紡ぎ出す。

「けれど、その幸せはすぐに終わりを告げたわ」

「エスライの住む村を魔物の大群が襲撃したのよ。その頃、エスライは妹と少し離れた花畑で遊んでいた。魔物が来るなんて知らなかった二人は、かなり長い間遊んでいたらしいわね。

いつも夕暮れになったら迎えに来る母親がいつまで経っても来ない。その時になってエスライは異変に気づいた。

焦りながら妹を連れ立って村へ帰ると、村は地獄と化していた。両親はどこにいるのかも分からない。

ただ、見知った人々が息絶えた光景が幼い二人を迎えたの。

エスライは、妹だけは守ろうと、剣を構えながら、両親を捜した。もうとっくに日は暮れて視界がかなり悪くなっても、エスライは捜し続けた。大きな村と言うわけではないんだけど、一つ一つの家が孤立しているから、時間がかかったみたいね。

妹さんは、最初は迷惑を掛けまいと泣かないでいられたんだけど、途中で優しくしてくれたおばあさんが亡くなっているのを見て思わず泣いてしまった。

泣き声は人のいない村に不気味に響いた。そうエスライは言っていた。とても、悔しげな顔でね」

そういうヨーリヤも顔は分からないがm悔しげな感情が伝わってきていた。

「泣き声を聞きつけた魔物は、妹を襲った。

どんなに訓練を受けたエスライでも、恐怖に負けてしまって一歩間に合わなかった。恐怖の呪縛から解けて剣を抜いた時には、魔物の鋭い牙は妹さんを捕らえていたの。
妹さんは、腹を噛まれその時には息も絶え絶えの状態だった。
それですっかり頭に血が上ったエスライは、がむしゃらに剣を斬りつけた。
その時、魔物の咆吼を聞いた両親が救出に来てくれて、なんとかエスライだけは助かった。
妹さんは、その後二度と目を開けることはなかったけれど。

妹は俺の身代わりになったんだ。

エスライは、この話をした時、うわごとのように何回も、何回もつぶやいていたわ。
それだけ、自分の目の前で妹さんが死んだことがショックだったのね。
いつも鍛錬していた剣術がなんの役にも立たなかったのもショックだったと思う」

それは、リーナスにも覚えがある。ヘスターが光の粒子になって消えてしまう時。
どんなに自分を無力に感じたか。どんなに悔しかったか。

「エスライは、その後襲撃で廃墟寸前になった村を後にし、傭兵になった。
結局、魔物達はなにが目的で襲撃したのか分からず終いになって

しまった。
村を襲撃した魔物達はその後駆けつけた隣町の警備隊が討伐したみたい。
その頃は、まだ十六歳だったエスライは、妹を死に追いやった自分が許せなかった。傭兵稼業に明け暮れ、来る日も来る日も魔物を倒し、生きていた。
その頃のエスライは、さぞかし暗い瞳をしていたのでしょうね……。

そんな時だった。エスライはある町で、一人の老人と会ったの。
老人は、大貴族と名高いミスラーネ家の当主であったわ。
ミスラーネ家当主は、後継者であった一人息子に死なれ、護衛士、兼後継者を捜していた。貴族社会は暗殺などが頻繁の起こる危険な場所で、貴族を後継者とすることはどうしても避けたいと言っていたらしいわ。
エスライは彼の頼みを断った。けれど老人が何度も何度も頼むものだから、エスライは結局折れて引き受けることにした。エスライのどこが良かったのでしょうね。妻の私が言うのもあれだけど、貴族の後継者にまだ十六の傭兵よ。もっと気品があるような人もいたでしょうに」

こんな話の最中だというのにリーナスは少し笑ってしまった。
ヨーリヤからも押し殺した笑い声が聞こえてくる。

「ごめんなさい。話を戻しましょうか。エスライの両親は飛び上がって喜んだらしいわ。貴族の後継者として息子がなるのだから。今までのどん底の生活から抜け出して頂点と言っても良い生活が出来るのよ。

喜ばない親なんていないでしょう？
でも、それがエスライの孤独を深めていくことに繋がったの。自分はいなくなっても良い存在だと思いこんだエスライは、貴族として生きるため、私の住む王都へ向かった。

数年が経ち、老人は天寿を全うした。エスライが事実上の、ミスラーネ家当主となって貴族としての第一歩を踏み出したわ。
けれどもエスライは当主としてただその枠に収まっているわけではなかった。
王族を警備する、兵達の頂点、親衛隊に入隊したの。働く兵士の憧れよ。そこに就任するということはかなりの名誉なの。だって王から直々に入隊式もやってもらえるのですもの。
入隊したエスライは愕然としたわ。そこは貴族の落ち零れの巣窟だった。親衛隊など名程度の剣もろくに握ったことのないような人ばかりだった。そんな所でも、エスライは日々訓練に明け暮れた。
妹さんを守れなかった自分を心から消すように。どんな人も守れるような人になれるように……」

「もちろん、エスライは驚くべき早さで隊長となったわ」
そこでヨーリヤは、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。
「なぜだか、分かる？」
分からなかったので素直に首を横に振る。

ヨーリヤが笑みを浮かべたまま語る。
「エスライはね、諜報活動にも通じていた。それが王にも評価されたのよ。

あなたの父、エスライ・ミスラーネは諜報員。つまり、この国公認のスパイだったの」

０４　～告白～（後書き）

読んで下さってどうもありがとうございます。

05　〜衝撃〜

ヨーリヤの衝撃の一言にしばらく頭が真っ白になった。なにせ許容量が少ない。

数分後、やっと思考を取り戻したリーナスは、ごちゃごちゃの頭の中を整理する。

（えーと、まずラーナリアン王国公認ということは……。

つまり今まであたし達が住んでいたダングル帝国視点から見たら敵なわけで、反逆者なわけか。って）

「えぇぇぇぇぇぇ！？」

思わず大声で叫ぶと、ヨーリヤが迷惑そうな顔で耳を塞いだ。体をこちらに向きなおし、かなり不機嫌な顔で無言の抗議をする。眉の間に三本、深くしわが刻まれており、かなり怒っていそうだ。

それが目に入ったが、きちんと無視して大音量でそのまま気の済むまで叫んだ。じゃないとリーナスの頭には入ってこない。

しばらくしてリーナスがわめき終わると、ヨーリヤはそのままの不機嫌な顔でぼそっとつぶやいた。

「野獣か」

ヨーリヤは小さな声で言ったつもりだろうけど、リーナスには全部聞こえた。思わずくってかかる。

「ひっど！　母さんの娘なんだから母さんだって野獣だからね！」

「あら、あなたは特別変異じゃないの？」

さらりと言ってのけるヨーリヤ。涼しげな顔で、母親といえども腹が立ってくる。

（それでも母親か！？）

とまた叫び出しそうになったがそのほかに聞きたいことがあったのだった。言葉を急いで飲み込んで頭を冷却。

「違いますっ！　……それより母さん。父さんが諜報員ってことはあたし達はダングルでは反逆者じゃん」
「えぇ」
ヨーリヤが顔色一つ動かさずに答える。
「え？　そんなあっさり？」
「そうよ、その通りだもの。他に何を言えばいいのよ」
「……う」
言葉に詰まったリーナスを見てヨーリヤは再度語り出す。
「まぁ、確かにダングルでは反逆者だけど、今までダングルの民に直接悪いことをしたわけではないわよ。
エスライの一番の任務は『ダングルとの戦いを避ける』だもの。
それに、エスライの表の顔はダングル帝国宰相ゼスト・ルーガスよ」

ゼスト・ルーガス。リーナスも何度も聞いたことのある名前だった。
リーナスが小さい頃、平民にもかかわらずいきなり宰相に抜擢された異色の人物で、最初は皆警戒していたのだが、彼はかなりの切れ者であった。
緊張状態が続いていたラーナリアンとの国交もある程度は回復し、不作で飢えにあえいでいた農民達を国庫で援助したりなど、その政策は今や皇帝よりも指示されている。
というより、皇帝が今まで民衆に喜ばれる政治などしたことがなかったらしい。その頃のダングルの挨拶は一言目には皇帝の悪口だったそうだ。
エスライがその人に化けていたわけなのか。それなら一年に二、三回しか帰ってこれないわけが分かった。
それにしても、エスライが死んでしまったので、ダングルは元の悪政に戻るだろう。可哀想に。

ヨーリヤが尋ねた。
「どうして、家を抜け出してラーナリアンへ来たのか分かる？」
いくら激務とはいえ、病気にかかったり、大怪我を負ったら知らせてくるだろう。遠く離れていても大切な家族なのだから。
それがないということは……。一番考えたくなかったこと。考えまいと努力していたこと。

「……父さんは、誰かに『殺された』んだよね？」
我ながらすばらしいと思う。震えずにしっかりとした声で言うことが出来た。
けれど、今の自分は顔が歪んでいると思う。泣かないって決めたくせに……。
（泣きそう……）
ヨーリヤは、大きく頷いた。リーナスの泣きそうな様子をきっと察知したが見てみない振りをしてくれるらしい。こういうことをしてくれるようなところが母親なんだなぁと改めて実感する。
「エスライは大抵の毒は効かないから、きっと剣や魔法で破れたのね。
けれど、エスライは強いわ。きっと、多勢に無勢だったのでしょう」
リーナスと同じように悔しげに顔を歪めてヨーリヤは言う。
どんなに悔しかっただろう。多勢に無勢など、騎士らしくない。剣を持つものは正々堂々としてなくてはいけないのだ。それが剣術の基本だ。卑怯なまねをすれば剣は応えてくれない。犬死するだけだ。卑怯な、多勢に無勢な闘いで負けるなど、歴戦の剣士であったエスライの最期にはふさわしくない。
エスライの無念の思いを想像するだけで悔しさと悲しさが溢れてくる。思わず唇を噛んだ。
そんなリーナスをなだめるようにヨーリヤは静かに言う。

「私個人としては、復讐したい。けれど、エスライが言ってたの。
『この仕事は危険と隣合わせの仕事だ。俺が死ぬ時。それはすなわち、大きな激動の時代に入ることを
意味する。どうかラーナリアンを守ってくれ』　ってね」
「激動の時代……」
思わずぽつりとつぶやいた。その時代を前にして死んだエスライは最期に何を思ったのだろうか。
残していく自分達に何を伝えたかったのだろう。自分がそこにいられないもどかしさだろうか。今更考えても意味のないことだったが考えずにはいられない。その中で死んでしまった人の面影を感じたい。
リーナスは首を振って考えを打ち消した。考えることもたまには必要だが、今は必要無いはずだ。
ヨーリヤがまた静かな声で語り出す。その声音には懐かしむような響きがあった。
「リーナス。私はあるパーティでエスライと出会い、結婚したわ。
それからはエスライの妻として、ダングルにも行った。
でも今、私はリーナスの母よ。私も親に反抗する子どもだったからよく分かる。
たまには私の言うことも聞いてちょうだい。けれど、自分がこうと決めたこと、何があっても変えない　と決めたこと、それは最後まで貫きなさい。私からの、お願い」
ヨーリヤが真剣な表情で語ったことはリーナスの心の中にしみこんでいった。
いつも強い母親。それの源はここなのだろう。いつも自分の考えを貫くから強い。見習いたい。そんな大きな望みが体中を駆け巡る。
次の瞬間には声に出してしまった。
「……あたし、母さんみたいになりたい！　いや、あたし母さんみたいになるから」
ヨーリヤが目を見張った。その後照れくささを隠すようにそっぽ

を向く。
「ありがとう」
次の瞬間にはまた振り向いて笑顔で言葉を投げかけた。その瞳には、今まで一度も見ることがなかった『涙』が浮かんでいた。

「リーナス。あなたはこれからどうしたい？　このままここにいるわけにはいかないのよ」
ヨーリヤが困り顔で言った。その瞳にはまだ涙の後が見える。それと共にお決まりとなった『希望』が見える。
「……あたしは父さんが死んだ理由が知りたい」
決意の気持ちを込める。一字一句、かみしめるように。これからの決意の気持ちを込めて。
「母さんは止めない。けれど、そのためにどうすれば良いか、分かるの？」
淋しい微笑を浮かべたヨーリヤ。
「分かんない。でも、やってみなきゃ。だってこのままにしておきたくない。
父さんやヘスターさんはいつもあたしのために尽くしてくれた。理由を突き止めることがあたしにとって二人への恩返しであって、本当の意味であたしの幸せになるから」
そんなリーナスを見て、ヨーリヤが小さな微笑みを浮かべた。
「なら、親衛隊に入隊すれば良いわ」
頭の中に疑問符が何個も浮ぶ。
「しんえいたいって何？」
ヨーリヤは苦笑する。
「この国の王族を警護する最高機関よ。剣術、魔術、どちらかが優

れていなければ入ることは出来ないの。中にはどちらも優れている人もいるけど」
「なんで今それが？」
「エスライはダングルに行く前はそこの隊長だったの。それに今の隊長はエスライの弟分だから、聞けば何か教えてくれるかもしれないわ」
エスライが所属していた親衛隊。それに思いを馳せる。そこに入れば、きっとエスライの面影を知ることが出来るだろう。根拠はないがそんな気がする。
いつだってリーナスの直感は正しいのだ。今回もそれに従うことにしてみよう。けれど……。
「親衛隊ってどちらかが優れていないとだめなんでしょ？　それじゃあたしは……」
嬉しかった気持ちがどんどん沈んで、どん底に蹴落とされる。
（やっぱり、あたしは剣術の腕もまだまだだもん……）
悔しい。悔しい。悔しい。すぐそこに道があるのに一歩が踏み出せない。何も出来ない。悔しい。悔しい。自分だって恩返しがしたい。未熟だけど、それでもがんばる。
（だから神様、あたしを助けて下さい。父さんとヘスターさんのためにも。お願いします）
思わず目をつぶって祈る。今なら何でもする。だから……。
「何言ってるのよ。リーナス。あなたなら大丈夫よ」
その時、神様への祈りが間違ってヨーリヤに届いてしまったのか、ヨーリヤがリーナスの肩をばしっと叩いた。そして肩をゆさゆさと揺さぶる。
あんな細い体のどこからこんな力が湧いて出るのだろう？　と不思議な位の馬鹿力で、リーナスはまた意識が飛びそうになるのをかろうじてこらえた。
「あなたは今までなんのために練習してきたと思ってんのよ。エスライはこうなることを予想してたの。

あなたの性格上、あたしの仕事を継ぐなんてやらないと思ったのかしらね」
やっと離してくれたヨーリヤは驚くほど強い視線でリーナスを見ていた。正確には瞳を。
思わずぞくぞくするほどの視線。それとともにリーナスへの大きな愛情が感じられる。
「……あなたなら入れる。エスライの剣術を間近で見ていた私にはよく分かる。あなたの剣術はエスライ　のものを取り入れて、自分のものにしているわ。後はそこから自分だけの技を磨き出すことが必要だ　と思う。私は剣術には疎いけど、見てるだけなら誰よりもエスライの剣術を見てきた。
あなたの剣術はエスライと同等のところまで到達してしまったわ。この年でよ。そんなあなたが入れな　いなんて、そんな馬鹿なことがあるわけないでしょう？　自分に自信を持ちなさい、リーナス」
「……母さん」
「それで、行く気はあるの？　ないの？」
ヨーリヤがまだ鋭い視線でこちらを見ている。
「あ、ある！」
その視線に負けて叫んでしまった。でもそれで良い。リーナスはそこに行きたいのだから。ただ決心が付かなかっただけだ。
それで良いと言うようにヨーリヤが大きく頷いた。
「それじゃ、明日にでも出発しますか？」
「あ、あした！？　早くない？」
問い返すと、ヨーリヤは先ほどの鋭い視線が嘘のように柔らかく微笑んだ。
「早く結果が欲しくない？」
「……それはそうだけど」
「じゃあ決まりね。んじゃ、さっそくご飯でも食べに行きましょうか」
「ご飯！？　ここで作れないの？」

「あら、言ってなかったっけ？　ここは十一年間、誰にも使われてないの。
継母が嫌で嫌でたまらなかった私が作らせた離れなの。この部屋は保存の魔術をかけてるから
ほこりとかもなかったけど、他はもうだめね」
ヨーリヤが残念そうに肩を落とした。
「もったいない……」
「……そうね。それはそうだけど、あの頃は本当に、それしか方法がなかったのよ。
――そんな話はもういいわ。行きますか！」
ヨーリヤがすっと立ち上がり、歩き出す。その後ろ姿を追って、リーナスも遅れまいと後ろに続いた。

０５　～衝撃～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

06　～夢～

ヨーリヤが『離れ』と呼ぶ建物を出ると、すぐに本館があると思っていたリーナスだったが、見事に予想を裏切られた。離れと本館までの距離は少なくとも一キロはありそうだ。

本館はここから離れた小高い丘の上にそびえ立っていた。純白のお城のような建物で、異彩を放っている。離れからでも（一キロ離れていても）良く見えるほど大きいのだ。

はっきり言って趣味が悪いと思う。太陽に反射して、なにやらぎらぎらしたものが光っていて眩しい。　最初にあの、城まがいのものを作らせたのは誰なのだろう？　何度も言うが、悪趣味にもほどがある。

反対に離れは、大きいが落ち着いた雰囲気に仕上げられている。本館とは違い一階建てでうっすらとしたクリーム色の壁がリーナスの好みで好ポイントだ。本館のようなぎらぎらは一切ないのも良い。たぶん、ヨーリヤの趣味を反映させたのだろう。

それにしても、本館も離れもかなり大きい。そこらの建物の五倍は軽く超してしまっている。

ヨーリヤの家は貴族だと言っていたが、かなり力があるらしい。父エスライのも大貴族の養子に入ったということだから、もしかしたらリーナスは事実上、二つの大貴族の血筋を引いていることになる。

まぁ、リーナスは血筋なんてものに興味はないが。血筋のおかげで本館みたいなところに住むなんて絶対に嫌だ。

それからしばらく歩いて町の大通りに出たリーナスは、初めて見

るラーナリアン王国の豊かさに息を飲んだ。
正確には、初めて見るわけではない。リーナスが六歳の頃にダングル帝国へ向かったから、六歳までの記憶があるはずなのだが、頭の中のどこを探っても、何故かそんなものは存在しないのである。
今はそれがかえって好都合だ。ラーナリアン王国の美しさをより堪能することが出来る。
何よりまず驚いたのは道行く人々の豊かさである。ラーナリアンのここだけなのかもしないが、人々の中で、何日もお風呂に入っていないような人はまずいない。髪の毛もぼうぼうの人もいなければ、つぎはぎだらけの服の人もいない。全ての人が皆小綺麗な格好をしている。故郷ダングルではまずありえないことだった。
ダングルでは、北の山から吹き下ろしてくる冷たい風の影響であまり作物が育たない。そのため人々は鉱産資源に頼っているのだが、それにしても作物のように安定してとれるわけではなく運次第なので、必然的に生活は切り詰められる。
みんな一様につぎだらけの服を着ているし、お風呂など毎日入れる人のほうが珍しい。一週間入ってない、なんてのはざらだ。
故郷の村ではダングルの南に位置するので他の地域より豊かで、恵まれていると思ったものだが、ラーナリアンが、こんなに豊かだなど思いもしなかった。
ダングルと違い、人々は皆明るい、陽気な顔をしている。ダングルでは、仏頂面が多いのだ。
ラーナリアンでは、誰もが今日の寝床にも困らず、食事にもありつける。
幸せなことではないだろうか。ラーナリアンの人はこれを当たり前だと思っているような気がする。でもこれが未来永劫続くというわけではないのだ。社会は日々変わって行くもの。それを、この人たちに覚えていて欲しい。リーナスは心からそう思った。
次に驚いたのは髪の色である。ダングルではお風呂に入るという習慣があまり根付いていないので髪が汚れていて古ぼけたような色

になっているが、ラーナリアンの人々は皆一様に鮮やかな色とりどりの髪の色をしていた。
ダングルではリーナスのこの緑の髪も綺麗だと褒められたものだが、この中にいればどうってことがないことが良く分かる。
赤、金、青、緑、黒、茶など、人の数だけ色がある。同じ赤でも、オレンジ色に近いような鮮やかな赤もあれば、血の色のようにくすんだ色もある。髪の一部だけ違う色だと言う人も、多くはないが確かにいた。こうやって道行く人々の髪を見ているだけで暇がつぶせそうだ。
次はやはり人の多さである。大通りを出て、近くの市場に着くと、朝だということもあってさらに人が増えた。その多いこと、多いこと。故郷の村三つ分ぐらいは優に超えていそうだ。
市場もやはり故郷の市場の何倍も活気がある。言語は世界共通なので、しゃべっていることは理解出来る。ここら辺で売っているのは食べ物だけらしい。ラーナリアンは農業に従事する人が多いということだから、店に売り出される品物の数も多い。
みずみずしい果実や、大きな野菜。ダングルではまず見なかったものだ。というより、果物なんて、高くてあまり食べたことがない。お金の通貨も同じだが、ラーナリアンでは、ダングルの五分の一ぐらいの値段で売っている。
思わず立ち止まって眺めてしまいそうになるが、ヨーリヤがすいすいと歩いて行くものだから、リーナスはついて行くだけで精一杯である。
かなりの数の人にぶつかり、そのたびに謝りながら、華奢なヨーリヤを失わないように早足で追いかける。
ヨーリヤがいきなり立ち止まった。そこはヨーリヤの行きつけの店のようで、オーナーらしい女の人（髪の色は鮮やかな黄色だった）と話が弾んでいた。
その中に入って行って席に着く。どうやらご飯を食べるところのようだ。これもダングルにはないシステムだ。基本的に自炊だった

ので、こんなところがあるのが驚きだ。
盛り上がるヨーリヤとオーナー（らしき人）。リーナスがその会話に入れるわけもなく、ただ運ばれてきた料理をもくもくと食べていた。野菜がメインのようで、レタスのような野菜のサラダや、初めて見る白い野菜の煮付けものなど、初めて食べる料理もたくさんあっておいしかった。ダングルとは違う繊細な味。
食べ終わってしまってからもヨーリヤの話は終わらず、ただげんなりとしながら黙って外を眺めていた。それはそれで意外と楽しかったので良しとしよう。

その後、やっと話も終わって店を出たヨーリヤに、親衛隊に入るならこれも必要だと言われ、レザーアーマーやら、応急薬やらを近くの店で大量に買い込んだ。
薬屋は、とにかく陰気くさい店で、リーナスは早く帰りたかったのだが、そこでもまた知り合いと会ったようで、立ち話に花が咲いていた。貴族のくせに知り合いが多い。まぁ、知り合いが多いことは悪いことではないが、リーナスがいることを忘れないで欲しい。リーナスが声をかけないと、一生しゃべり続けそうだ。

どこの店でも大量に出費をしたが、どこからそんな大金が出てくるのか不思議で仕方無かったが聞くと『秘密よ』と言われてしまった。
ダングルにいた時も、他のダングル人と比べて格段に良い生活をしていたが、そのお金は、本当にどこから来ているのだろうか。ヨーリヤの七不思議の一つである。といても、まだこれ一つしか不思議はないが。

帰り道で、今日の夜や明日の朝のご飯も買い込んだ二人が家（といっても離れ）に帰ったのはもうお昼すぎだった。余計なことをしなければ、もっと早くに帰れたのかもしれないが、ヨーリヤの長話が響いた。　さっそく荷造りを始めた二人だったが、リーナスは親衛隊がどのようなところが分からないため、ヨーリヤに頼まれたことしか出来ない。それでも、いつの間にか鞄の中身は瞬く間にぎゅうぎゅうになっていった。

荷造りが終わるといつの間にか日が落ちていた。時間がたつのが早いと思ったのは集中していたからだろうか。

二人で無言のまま今日買った夕ご飯を食べ、早々にベットに入った。ちなみに、ベットが一つしかないので二人でだ。

ベットに入ってもやはり落ち着かない。明日が人生の大きな分かれ目だという気がする。もしこれで親衛隊に入ることが出来なかったら……。

考えてしまうとますます落ち着かない。本当の幸せも掴めなくなってしまうし、今は亡き人への恩返しも出来なくなる。

（う～～～！　とにかく今は寝るんだ！　リーナス！）

心の中で自己暗示をかけてぎゅっと目をつぶる。隣のヨーリヤのすぅすぅという寝息が聞こえてきた。

その音を聞きながら、リーナスもまた、眠りについていった。

――夢を見た。リーナスは満月の光の中、一本の街道に立ち尽くしていた。

そこには一本の街道しかなく、両脇には緑溢れる草原が広がっている。草原の他には何も見えない。ただ緑が広がっているだけだ。早起きをした朝のような、少しひんやりとした感覚と静寂が心地良

い。
上を見上げると大きな満月がリーナスを照らしている。満月は刃のような銀色で、どこか冷たいような印象をリーナスに与えた。
視線を戻し、違和感を感じて良く目をこらすと、この街道に立っているのはリーナスだけではないことが分かった。
背丈から見て、女性と思われる華奢な後ろ姿が百メートル先くらいに見える。髪の色は紫色で、腰の辺りまでまっすぐ滝のように流れている。服はゆったりとした月の色と良く似た銀色のローブ。さわりと風が吹き、草原がさわさわと音を立て、ローブがはためく。月の銀の光もあって、どこか神々しさを感じさせる。後ろ姿だけでも十分に美しいと断言出来るほど、その女性（少女といったほうが正しいかもしれない）は気品に溢れていた。
少女は今、大量の悲しみをその美しい体にまとわせていた。重く、心に響くような深い悲しみ。
遠く離れているのにここまで届くような、リーナスが味わったことのない大きな悲しみだ。
それと共に大きな『絶望』も。
――その時、これから先に、少女が何をしようとするのか、分かってしまった。
深い悲しみと絶望。これを知ってしまった人間は二つに分かれる。一つは、その悲しみを乗り越えて精一杯生きる人たち。
そうして、もう一つは、その悲しみを乗り越えることが出来ずに、自ら命を絶つ人たち――。
故郷ダングルで、働き手である夫を亡くした妻。そんな人を何人も見てきた。その中でも、その後命を絶った人々は、皆少女のように深い悲しみと絶望に溢れていた。
（このままだと、あの人もやばい……！　止めなきゃっ！）
リーナスは慌てて少女に駆け寄ろうとしたが、どんなに走っても、走ってもリーナスと少女の距離は縮むことがない。がむしゃらに走るリーナスを尻目に、少女は静かに歩き始める。その姿も、絵にな

っている。
「待って！」
大声で叫ぶも、少女には届いていないようだ。振り返ることもなく、そのままのペースで歩き去ってしまう。
（――なんとしてでもあの人を止めなきゃっ！）
そんな気持ちが焦るほどあるのにその気持ちとは逆に、少女は歩いて、リーナスの視界からどんどん消えていってしまう。走ってるのではないかと思うほど、スピードが異常に早かった。
リーナスも負けじと大きく地面を蹴って走る。もはやトップスピードに乗り、全力疾走となっていた。
それでも、少女は視界から消えてしまう。
「だめ！　待って！」
最後に大きく叫んだ時、リーナスの視界から　少女は、消えた。

今、自分に出来ることを精一杯やった。けれど無理だった。今はどうあがいても変えられないことだった。
分かってる。けれども、あの少女がどうしても他人のように思えないのだ。その昔、そこかで会ったような、かけがえのない存在だったような、そんな気がするのだ。
（あの人を助けたかった……）
というか、助けなければいけない。そんな気がしたのだ。それが、リーナスの使命だったような。
心が重苦しい。あの時自分はどうしたら良かったのだろう。そもそも、あの少女は誰だったのだろう？　ふと疑問が浮かんだ。
――その時、満月の光がいきなり強くなり、視界が白で覆われていった。思わずぎゅっと目をつぶる。

そして、目が覚めた。

少し重苦しい気分を目覚めと共に振り払う。
（大丈夫、あれは夢）
自分にしっかりと言い聞かせる。今日は大切な日。失敗なんてものは許されない。
もし今日がだめだったら、親衛隊に入れなかったら、リーナスは一生恩返しが出来ないで死んでしまう。
リーナスはそんな気持ちを自分に言い聞かせながら、ヨーリヤとともに身支度をして離れを出た。

空を見上げると、今日は快晴。
登ったばかりの太陽がこれからの大きな分かれ道に立つリーナスと、それを見守るヨーリヤを照らしていた。

――二人を祝福するように。

06　～夢～（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

07　～試験～

リーナスとヨーリヤは、離れから三十分ほどかけて、王城に着いた。

ラーナリアン王国をもっと知りたいというリーナスの要望から歩きで行くことにした。馬車という選択肢もあったのだが、ヨーリヤが馬車に酔うということで却下された。何でも、このところ乗っていないので馬車酔いがひどくなる予感がする……。らしい。

歩き疲れた二人の前にそびえ立つ王城は、まばゆいばかりの白と、頂点に掲げてある紫の国旗のコントラストがとても綺麗で思わず声を失ってしまった。

ただ綺麗な訳ではなく、威風堂々としている様子にも目を奪われる。長年の風雨にも耐えてきた城には、やはり国王の威厳というものが感じられる。この城を作った時のラーナリアン王国は絶頂期であったのだろう。

頂点に掲げてある紫の国旗は、良く見ると、月と夕暮れを示しているらしい。銀色の月が紫色の空にぽつんと浮かんでおり、その月の下には、二つの剣が交わって描かれている。どこかもの悲しいのとともに、誇りのようなものも感じられる国旗だ。

そのままぼーと突っ立っていたリーナスがはっと我に返ると、他にも王城見物の人たちが、ぽかんと我を忘れて王城を見上げていた。

（はっきり言ってアホ面……）

しかし先ほどまでその中の一員だったのだと思うと何とも言えない気分になる。ふと隣を見ると、元は貴族の一員であったヨーリヤは、別段驚いた様子もなく、「久しぶりねぇ」と、目を細めた。そのまなざしには、懐かしむ色は見えても、今の生活を悔いている色はなかった。

王城の中に入っていく人々は、魔術師らしきローブの人や、鎧を着た騎士の人、さらには、ドレスアップした貴族など、どの人も気品溢れる容姿だった。

ダングルでは、貴族や王族の髪の色は金色らしいが、ラーナリアンではそのようなことはないらしい。今まで中に入っていった貴族の髪の色は皆別々だった。ただ、どの人も手入れには人一倍時間をかけていそうだ。一般人の倍以上、つやつやと光り輝いている。

家を飛び出したとはいえ、貴族であったヨーリヤはともかく、今まで一回も気品など身につけたことがない自分が入ってもいいのだろうか。思わず尻込みしてしまうが、ヨーリヤにさりげなく促され、緊張しながら門へと歩きだした。

門には、十人の鎧を着込んだ騎士がいて、王城を警備していた。逃げ出したくなるほど威圧的な雰囲気を醸し出す騎士たちは、意外と若い人が多いのが気になった。けれども王城の警備という大切な仕事を任されているだけあって、腕は確かなのだろう。思わずじろじろ見てしまって一人の騎士ににらまれ、慌てて目線をヨーリヤにうつした。

その時、ヨーリヤが、にっこり微笑み、優しく話しかけた。

「すみません。王城に入らせていただけませんか？」

貴族の令嬢の名に恥じない、穏やかな物腰である。

騎士は、厳格な顔つきで、「関係者以外立ち入り禁止である！」とヨーリヤに告げた。

（追い返されたらどうしよう……）

もしかしたら、不審者扱いされて斬り捨てられたらどうしようなどと不穏なことを想像しながらヨーリヤの横にひっそりとたたずんでいるリーナス。先ほどから、十人の騎士たちからの視線が痛い。

「そうなんですか？　この、ヨーリヤ・ミスラーネの頼みでも聞け

ませんか？」
ヨーリヤが勝ち誇ったような顔で騎士たちに告げると、一人をのぞく九人の顔が瞬く間に青くなっていった。
（わぁ、人の顔ってこんなに青くなるんだ……！）
驚きを通り越して感心してしまった。いつの間にか厳格な騎士が一般人に見えてくるから驚きだ。
「ミスラーネ家……！？」
一人の騎士が震える声でつぶやいた。何かを恐れているようで、体全体がぶるぶると震えている。
騎士というものが、頼りない。半ば呆れながら今度はじろじろと観察する。
（こんだけ震えてるならじろじろ見たって気づかないよね～）
ふと、青い顔の中で、一人顔色を変えない人物に気がついた。
年齢は、二十になったばかりかそれより少し下だと推測する。
漆黒の闇のような黒い髪。若葉のような明るい翠の瞳。かなり精悍な顔つきだ。ただ、翠の瞳だけが、異様に鋭く、近寄り難い雰囲気を醸し出していた。顔はなかなかに良い。
その人物は、射貫くような目線でリーナスを見ていた。思わず見返してしまう。いつもなら目線を外すはずが、逆に目線を合わせてしまったのはなぜだろう。
この青年の翠の瞳の奥に揺れる悲しみに気づいてしまったからかもしれない。
（この人……。　かなり苦労してきたんだろうな……）
そう思わせてしまうくらい、その瞳には、年に似合わない深い悲しみが表れていた。
ふと、青年が視線をヨーリヤに向けた。リーナスも視線の先のヨーリヤを見つめる。
ヨーリヤは、涼やかな顔でさらりと答えた。
「えぇ。私はミスラーネ家当主、エスライの妻、そしてこちらは、私たちの娘です。

さぁ、通して下さいますよね？」
「は、はいっ！　御無礼、誠に申し訳ありませんでしたっ！！」
青い顔の九人、鋭い目つきの青年を合わせた全員が寸分違わずに唱和し、ここで十人がぴしっと敬礼。　良く訓練されているものだと一人で納得してしまった。軍全体がこんな人たちなら、ラーナリアンの軍が強いのもうなずける。
リーナスがダングルにいた時には大きな戦争は起きていなかったが、過去に何百回もダングル人が遠征して、結局領土を勝ち取ったことはないらしい。
それほどラーナリアンにめったためたにされているのに戦争を止めないのは人間の性というものだろうか。潔く諦める。それもまた勇気だと、リーナスは思うが。

それはともかく、リーナスやヨーリヤは、ラーナリアンではかなり身分が高いらしい。この人たちの態度の変わりようがとにかくすごい。
全員、気を付けの体勢を絶対に崩そうとしない。どこかくすぐったいような気分になる。
「私が案内いたします。」
ふと手を挙げてやってきたのは、目つきの鋭いあの青年だった。ぐるりと見渡して分かったが、この青年が比較的若いと思われるこの隊の中で、一番若いようだ。けれど、その中でも一目置かれているようで、他の騎士たちは何も言わなかった。彼に対する信頼の深さが伺える。
むしろ、『俺が行かなくて良かった』と安心しているようにも見えるが。
（あたしたち、そんなに怖いかなぁ……？）
見た目はそんなに怖くないと思う。ちょっと意志は強そうだが、筋肉隆々でもない、華奢なヨーリヤと、見た目からして体力なさそ

うなモヤシのリーナスの二人組だ。これのどこに恐れる要素があるのだろう。首をかしげながら、リーナスたちはその青年のあとについて王城の中に足を踏み入れた。

「では、リーナス様はこちらへ」

親衛隊に入りたいと言ったリーナスが通されたのは、中庭らしきところだった。ヨーリヤが付いてきてくれるのか思いきや、ヨーリヤは、エスライが亡くなったことで王様に報告があるとかで、付いてきてはくれなかった。ちょっと心細いがしょうがないかと割り切る。

王城の中は、外見通りの優雅な作りになっていた。ここを作った建設士の人は相当腕が良かったのだろう。どこから見ても不備がない。

こんなところに住んでみたいなぁと思う反面、汚れがかなり目立ちそうな白い壁なので少し考える。

（でも、綺麗だよねぇ……）

しかし、こんなところに住む権利など自分には一生訪れることはなさそうだ。

壁から目を離し、リーナスが通された中庭を見る。

中庭と言っても、かなり広く、普通の庭園といっても通りそうだ。真ん中にあるのは豪華な修飾がしてある噴水。そこからは絶えず澄んだ水があふれ出ていた。

芝生が敷いてあり、端には木や、花壇があった。花壇には、名前が分からない桃色の大きめの花や、小さく可憐な白い花など、花好きのヨーリヤが見れば跳び上がって喜びそうだ。

やはり王城、腕の良い庭師がいるのだろう。どの植物も生き生きと伸びやかに成長していた。

そして、噴水の横には五人ほどの人々が思い思いに過ごしている。
（この人たちは、いったい何者なんだろう？）
思わずそう思ってしまうほど素性が不明である。
がっちりとして大男から、まだ十四、五歳程度の少女や、もう六十はとっくに超していると思われるおじいさんまで、まさに老若男女問わずに集まっている。
リーナスがここに通されたということは、この人たちは、親衛隊に違いないと思うのだが……。
この、のほほんとした雰囲気は何なのだろう。
先ほどの少女は何やらそばに咲いている花で花輪を作っているし、おじいさんに至っては、地べたで爆睡している。その少し薄くなった頭には、新種の花と勘違いしたのか、二、三匹の蝶がくっついていた。
その時、花輪を作っていた少女がこちらに気づいたようだ。満面の笑みで駆けてくる。
柔らかそうな金髪は緩くウェーブがかかっており、下の方で二つに結わえている。長さは肩よりも少し長い。瞳の色は、ヘスターより少し濃い碧。大きな瞳を見開いて、少女はにっこりと微笑んでいる。
その少女の瞳からは、慈愛の気持ちが溢れていた。かなり優しい性格らしい。
上に着ているチュニックは桃色。その下に履いているチュニックより濃い桃色のスカートは、花のようにすそが開いている。ブーツは柔らかそうな素材でできており、真ん中にはスカートと同じ色のリボンが結んであった。実に女の子らしい服装である。
人目で穏やかな性格だということが分かるその美貌は、服装とも合わさって、花の精のようだった。普通に言われても納得できる。誰からも愛されるようなふんわりとした容姿がうらやましい。
その少女は、相変わらず微笑んだまま話しかけた。
「あの、新しい見習いの人ですか？」

話しかける声も澄んだソプラノ。かわいらしい。
「……うーんと、親衛隊に入りたいんだけど」
少し困りながら言うと、少女は、ぱっと顔を明るくした。
「それならここであってますわ！　まだ、試験は終わっていないんですの？」
物腰も優雅で、とてもじゃないがこの子が親衛隊だとは思えない。
『試験』も気になる。
そんなリーナスの不安を見透かしたように、ふんわりと少女が笑う。
「多分、あなたほどの腕前なら、エルさんと対決ですかね」
「エルさんて誰？」
おそるおそる聞くと、少女は微笑んで答える。
「確か、今日はお仕事の日のような気がしましたが」
誇らしげに語った少女の瞳には、その『エルさん』に対する信頼が溢れていた。
（どんな人なのか……教えてくれないのぉ）
一応、苦笑いで応えておく。
その時、
「おはようございます！　隊長！！」と大男らしき太い声の人が声をかけた。
「おはようございま～す」と少女も声をかける。その先には、赤髪の男の人と先ほどの目つきの鋭い人がたっていた。
赤髪の人の年齢は三十代ほどと、いったところか。余り手入れされていないようなぼさっとした髪が印象的である。そのくせに、顔はなかなか整っている。美男子といっても良いくらいだ。
腰には大きな太刀があり、長年使い込まれている様子が良く分かった。
二人とも同じような服装であり、きっとこれが制服なのだろう。
「隊長～！　お給料上げて下さいよ～。家の嫁と子どもたちが実家で飢えてるんです」

大男が赤髪の男に話しかけた。
「もっと仕事したらな～」
隊長がいかにもめんどくさそうに答えた。
隊長と言ったから、もっと年配の人を想像したのだが、かなり若い。
（ん？　赤髪の人が隊長？　若いなぁ……）
先ほどの目つきの鋭い人は未だに突き刺すような視線でリーナスを見ていた。
「あ……」
隊長がふとリーナスに目を留めて、何かをつぶやく。
「あのさ、ホントにすまないんだが、お前だれだっけ？」
本当に困っているらしく、頭を抱えている。リーナスを親衛隊の一人だと思っているようだ。
どう答えればいいのか困っていると、隣の少女が、代わりに応えてくれた。
「隊長、違いますわ。この方は親衛隊入隊希望の人です」
「――いや、お前、その他にも絶対会ったことあるよな？　うんと、名前は？」
「リーナスです」
短く答えると、隊長の顔が一気にこわばった。
「親父さんはどうした……？」
「父さんは、つい先日、亡くなりました」
思わず下を向くと、隊長から悲しみの気配が漂った。ヨーリヤが確か言っていた。今の隊長はエスライの知り合いだと。
この様子だと、隊長にとってエスライは大切な人だったのだと思う。隊長から発される悲しみは深く、重い。
「そうか……。これから、激動の時代が始まるんだな……」
思わず顔をばっと上げてしまった。それはエスライがヨーリヤに言った言葉。
この人も知っているのだろうか。そんなに信頼されていた人なら、

エスライの正体も知っているのかもしれない。
「……今から試験やるからちょっと場所空けてくれないか？」
ぱんぱんと手を叩き、次の瞬間には元の声音に戻った隊長だったが、全てを隠し切れた訳ではなく、悲しみの気配を強く溢れさせていた。
それでも、自分の気持ちを切り替えられるのはすごいと思う。
大男が、未だ目覚めぬおじいさんをずりずりと引っ張っていった。
（ぽっくり逝っちゃってないよね……？　生きてる……よね？）
かなり心配になったリーナスであった。

リーナスたちが動ける位の場所が空いた。他の人たちの興味津々な様子が嫌でも伝わってくる。
「エル～！　頼む」
「……はい。承知しました」
かなりの仏頂面でエルが答えた。
「おい、そこの娘！　リーナス……だったよな？こいつに勝ったら親衛隊に入れてやる。
こいつは強いぞ、本気でかかれ」
隊長がエルと呼ばれた目つきの鋭い人をばしばしと叩きながら言う。
「はい！！」
（この人、あたしのこと嫌いなのかな……？）
と、思わず思ってしまうほどきつい目つき。
「俺はエルヴァンダル・ローラス。皆にはエルと呼ばれている。手加減するつもりはない。本気でかかってこい」
「……はいっ！」
（まぁ、ニコニコされるよりはマシか）
仏頂面の方が実戦のような気がしてやりやすい。そう楽観的に考えることにして、リーナスは静かに目を閉じ、精神を極限まで集中

させる。

目をゆっくり開き、静かに腰のサーベルを抜いた。エスライからもらった剣。リーナスの体と合うように作ってくれた剣。びっくりするぐらい軽くて、リーナスのスピードの元である。そのくせに固く丈夫なのでリーナスはこの剣に全幅の信頼を寄せている。

「……業火の元に集いし神よ。我が剣に御身の加護を」

ダングルで伝わる『守りの語』をつぶやく。『守りの語』は剣士なら必ず言わなければ行けないとされ、それを言わないと剣の守り神の加護を失ってしまうらしい。意外と信心深いリーナスは、それを言わなかったことはない。

つぶやいた瞬間、周りのものが全てリーナスの感覚の中から消え去った。見ている観客も、花も、木も。

リーナスの眼前には、戦うべき相手、エルがいるのみ。

エルは長剣をすらりと抜いた。やはり美しいほど様になっている。そのまま構えの体勢をとったエルは、静かにリーナスをにらみつける。リーナスも負けじとエルの翠の瞳をぐっとにらみつけた。

ふと、エルの瞳から何かの波動が出たように感じた。全身の力がふっと抜けてしまう。

「……試合、開始だ」

エルがそう宣告したと同時にエルの呪縛を振り払い、リーナスは斬りかかっていた。スピードと手数がリーナスの持ち味である。

目にも留まらぬ早さでエルを薙ぐ。しかし渾身の一撃は、空を切っただけだった。

エルは、すっとそれを後ろに下がってかわしたが、その顔には、興味の色が溢れていた。

「……なかなかやるようだ」

そうつぶやいたあとに、エルは一撃を繰り出す。リーナスはそれを剣で受け止めたが、思わぬ大きな力に腕がしびれた。その瞬間を

見逃さずに、エルはもう一度刃を繰り出した。
今度は後ろに飛んでかわし、エルの刃が宙を切ったのと同時に間合いに踏み込み足元をねらう。
最高スピードだったので、エルには捕らえることができなかったようだ。
（やった！）
そう思った瞬間にはエルは地面に転がってかわしていた。
自分で動いたというより、危険を察知して本能のままに動いた結果らしい。
エルの瞳には、動揺の色が浮かんでいた。しかし次の瞬間には不敵な笑みに変わる。
転がったところからリーナスの足元を斬りつける。リーナスはそれを横っ飛びでかわし様子を見る。
さっきの倒れている時が最大のチャンスだった。あそこで斬りつけられなかったのがあとで響くだろう。
自分を悔やみながら、エルの様子を観察する。
エルもこちらを伺いながらすりあしで移動する。その様子は獲物をねらう狼のように獰猛だった。
エルがいきなり剣を突き出す。リーナスはそれを剣で受け止める。あまりの力の大きさで二人は同時に吹っ飛ばされた。
手首までじんじんとしている。それはエルも同じだったようで、顔をしかめている。
（チャンス！！）
リーナスはトップスピードで駆けていく。エルは防御の態勢をとったが、リーナスは斬りかからなかった。そのまま大きく飛び上がり、空中で宙返りをして振り向きざまに斬撃を放つ。
重い手応えがあり、地面の着地してから見るとエルの肩がざっくりと切れていた。紅い血が吹き上がり服を濡らしていた。
エルは一瞬で状況を把握し、ぐっと表情を引き締めた。
（怪我させちゃったけど、大丈夫かなぁ）

剣術の師、ヘスターの稽古ではこれほどの傷は気にせずに試合をしていたので思わず動いてしまったが、リーナスの想像よりかなり深いようだ。
このままでは出血が多すぎて気を失うこともあるかもしれない。そうしたらフェアな試合ではない。
「こんな時に考え事かっ！　本気でかかってこいっ！！」
その時、エルが叫び、重い一撃を放つ。リーナスは、手首がしびれないように注意して受け止めた。
そのまま、二合、三合と打ち合うが、エルの勢いは今やもう衰え始めていた。しかし、衰えたとはいえどの一撃も重く、もとより女子であるリーナスには少しきつくなってきた。
ヘスターと同等、それ以上の力の持ち主だ。
このまま戦っていれば、いずれはエルの出血のため、エルが倒れてしまうだろう。
（そろそろ決着を付けるっ！！）
リーナスは振り下ろされる斬撃を横っ飛びでかわした。
剣が追いかけてきて、脇腹に斬撃が当たる。脇腹に焼けるような痛みが走ったが、これくらいなら我慢できる。その体勢からそのまま、また足元をねらう。
予想通り、エルはかわしたが、リーナスが斬りかかってくるとは思わなかったのか、体勢を崩した。
その隙を逃さず、第二派を放つ。これで終わりになるはずだった。
しかしそのとどめの一撃は空を斬っただけだった。リーナスの剣のぎりぎり下までエルが姿勢を低くし、下から斬りかかっていた。
とっさのことに防御が間に合わず、エルの剣はリーナスののど元に当てられていた。震える手がリーナスののど元に食い込み、暖かい液体が喉を伝った。
「お前の、負けだ」
エルが静かに言った。
リーナスは呆然とするばかりだった。その言葉を相手に宣告する

のはリーナスのはずだった。どこでそれが狂ってしまったのか。

「っく！」

エルが片膝を付く。リーナスが斬った肩からは、かなり出血しており、服はもう半分以上が血に濡れていた。

ふと痛みを感じ、脇腹を見ると、リーナスの脇腹からも予想以上に出血していた。エルと同じ位の深さだ。

興奮していたので痛み止め代わりになっていたのだろう。今更のように痛みが蘇り、リーナスは顔をしかめた。

「お二人共、大丈夫ですかっ！！」

少女が真っ先に二人の駆け寄ってきた。地面に足を付き、そうして傷口に手を当てる。

「清らかなる癒しの水よ。我の命に応え、彼を癒せ。　ヒール！」

少女の手から温かな光が溢れて傷口がみるみるうちにふさがっていく。

その光景を見て、やっとリーナスは理解することが出来た。

のど元からはまだ暖かい血が流れ続けている。それが証拠だ。

（――あたしは、負けたんだ）

07　～試験～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

０８　～別れ～（前書き）

別れと言ってもそんなに深刻な話では無いです。
むしろ最後のほうはけっこう明るいですよ。

08　～別れ～

――負けた。

ただその三文字のみがリーナスの頭の中を占めていた。これでもう親衛隊に入ることも、恩返しも、やろうと思っていたことが何もかもできなくなった。

こうなった原因はやはり自分の力量不足にある。試合の最中に相手の事を気遣う余裕などなかったのだ。戦う相手に慈悲を与えるなと、昔何回もヘスターに言われたのだ。今更になって、そんなことも分からない馬鹿だから負けたんだ。これは自業自得。

もう、悔しすぎて涙も出てこない。ただ、ぎゅっと拳を握る。手当をしてくれた脇腹とは別の所が痛い。自分のふがいなさが、嫌で嫌でたまらなかった。

父エスライも入っていた親衛隊。リーナスも入ろうと、目指していた親衛隊。それが目の前にある。

あと数歩歩けば届く所にいる。それなのに、入れない。手が届かない。そんなもどかしさに、リーナスは顔を歪めた。

気づけば、頭がぐらぐらしていた。

（どうしたのだろう……？）

世界が回る。視界がどんどん暗くなる。先ほどの脇腹の怪我で大量に出血したので貧血しているのだろう。そう、今更ながらに思った。

魔術で外面的な怪我は治すことができるが中身はどうしようもない。もちろん血を作る魔術などないため、どんなに腕の良い魔術師に手当をしてもらっても出血多量で死んでしまう人もいる。

（あ……）
これはやばい。こんな所で倒れてしまう。もう既に視界は砂嵐状態だ。
目の前では隊長とエルが話し合いをしていて、隣には手当をしてくれた少女がいる。
その少女に助けを求めようとするも、口の中に舌がひっついたようで声が出ない。
もう目の前は真っ暗。思考が濁った水のように、すっきりしない。
耐えていられるのはもうほんの少しだろう。薄れていく意識の中でぼんやりとそんな事を思っていた。
「っ！」
（もうだめ……）
そう思った瞬間、体は平行感覚を失い、リーナスの体は地面に沈んでいた。

目を覚ますと、そこは全く知らない部屋だった。体を起こして辺りをぐるりと見渡す。
リーナスが寝ている大きなベットは窓際にあり、窓際にはレースのカーテンが引いてあった。
真ん中には、長年使っているような味わいのある色のテーブルと二つのいす。
どこか暖かみのある木の色の壁紙。タンスは小さい。ここは男の人の部屋なのだろうか？そう思わせるほど生活感はあるがどこか殺風景だった。
その時、やっと倒れる瞬間の出来事が脳裏に浮かぶ。
貧血を起こして倒れて、その後の事は全く覚えてはいない。だれかがここまで運んでくれたのだろうが、その人物と思われる人はいない。この部屋の中にいるのはリーナスただ一人のみである。

（やばい……　あたしこれからどうしよう……）
この部屋の中に来たことで、具合が元に戻った所で、どこか安心してしまったのか、涙がこぼれそうになった。
親衛隊に入れ無かった。それはもう過ぎてしまったことで、今考えても始まらない。
（あたしは泣かない……。　何があっても）
ぐっと歯を食いしばりそれに耐える。何でこんなに自分は弱いのだろう。ヨーリヤのように強くなる。そう決めたはずではなかったのか。
その時だった。ベットと床の僅かな隙間から何かが出ている。あれは……。
「……うん？」
涙は瞬間的に引っ込んだ。そのスピードは、かつてない速さだ。
（ちょっと待て、ちょっと待てよ……）
今のは何だ？　違う、あれはそうではない。あれは人の足なんかでは……。
その時、それがぴくりと動いた。
「っ！？　きゃーーーーー！」
思わず甲高い声を出して布団にもう一度潜り込む。ぎゅっと布団をつかんで必死に息をこらえた。
叫んでしまった後でそんなことをしても後の祭りだとは思ったが、怖いものは怖い。
その時、ベットの下でごそごそと何かの物音がして、力強くかぶっていた布団をはぎ取った。
条件反射でぎゅっと目をつぶったリーナスの上に、聞き覚えのある声が降りかかる。
「……お前、何してんの？」
目を開けると、そこにいたのは……。
「た、隊長！？」
びっくりしすぎて声が裏返ってしまった。驚かすにもほどがある。

「な、な、何でこんなところにいるんですかっ！？」
隊長はめんどくさそうに頭を掻きながら答えた。
「何って……。倒れたお前の看病だよ。お前さぁ、助けてやったのにそんな反応しかできないの？」
「えっ！？　あ、ありがとうございました。でも、何でベットの下にいるんですか。とは言えなかった。多分、隊長の好みだろう。そう、趣味ということにしておこう。じゃないと頭がパンクしてしまう。
「うーん……。　隊長っていう仕事は思いの外疲れるんだぞ？　次いでだから昼寝した。ベットに寝るわけにいかないし……。今思ったんだが、ベットの下も意外とい心地いいなぁ」
そのまま、がははと一人で笑っている男が親衛隊隊長だとは到底思えない。しかも十七の娘相手にかなりすべっている。すべっているのに、いっこうに気づく気配がないのはさすがと言った方がいいのだろうか。
その時、ぎぎぃとドアがきしみ、一人の青年が入ってきた。そのままつかつかと隊長に歩み寄る。
「……隊長は何もやってないじゃないですか。いつもいつも面倒なことは俺に押しつけて」
かなり不機嫌そうな顔で、隊長に詰め寄る姿からは怒りの感情が溢れていて、リーナスは思わず体を固くした。
「隊長。あとで絶対に今日の埋め合わせやってもらいますから。それと今日は酒禁止です。
だいたい体に毒だと知りながら飲む人がどこにいるんですか。本当に心配なんですけど」
まだ怒っているような声音だが、いつの間にか怒りの感情はふっと揺らいで消えてしまった。
「嫌だね！！」
強い口調で答える隊長に、エルは呆れた顔をしてリーナスに向き直る。このやりとりはすでに何回もやっているのだろう。二人の間

には、仕事や階級などを無視した親しさがあった。
――この二人の中にいるのは何故か気まずい。
「……傷は？」
エルが静かに、低い声で問いかけた。
一拍おいて、それがリーナスの事を心配してくれているということに気づく。
「あ、大丈夫みたいです」
にっこり微笑んで答えると、エルは仏頂面で一枚の紙を取り出し、リーナスの目の前に突きつけた。
「……試験は合格。親衛隊に晴れて入隊だ」
「えっ……？」
いつもの事だが頭は思考停止。
（……今、なんて言った？　あたし、試験に合格……。試験に合格……。入隊……。……。）
たっぷり時間をおいて、やっとの事で理解することが出来た。胸の鼓動が高鳴る。
「や、やったぁあああああ！！」
感動のあまり思わず大きく叫ぶ。
うるさいと怒られるかと思ったが、エルはうっすらと微笑んでいた。
「……親御さんを待たせてある。少し話をしたあと、親衛隊の宿舎を案内するから、ついて来るように」
エルが目で促したのでぴょんとベットから飛び降りてとことこと、後ろについて行く。
未だに胸はどきどきとなっていて鬱陶しい。
「……俺もヨーリヤさんと会って少し話したいなぁ」
そのリーナスの後ろからのんびりした声と隊長が着いてきた。
確か、この隊長はヨーリヤとも懇意だったのだった。会ってやはり父エスライの訃報を聞くのだろうか？試験の時に感じた深い悲しみは、もう薄れてリーナスでも感じ取れなかった。

自分の感情を隠すことが出来る人物に、リーナスはまだ出会ったことがない。でも、それが一時だけでもできるということは、かなりメンタル面でも強い人なのだろう。
今更になってやっと隊長に尊敬の思いが湧いた。エルには、もうかなりの尊敬の念が湧いている。あの傷を負ってまで、リーナスに傷を負わせ、なおかつ勝利をつかみ取ったということはかなりの剣士だ。
きっと、そのエルの上に立つものなのだから、エルより剣術は上手いのだろうが、ベットと床の隙間で寝るような人が上手いなんて、とても考えられなかった。

エルの堂々とした後ろ姿を見ながら、リーナスは首をひねる。
この頃には合格だと告げられたときの興奮はおさまり、ようやく冷静な判断を下せるようになってきたからだ。
（だってあたしは最低な方法で負けたはず……）
油断をしないことは、剣術の道に進んだときに必ず言われることだし、敵に情けをかけるなとはもう何度も耳にタコができるほど言われたことだった。
それにも関わらず自分はそれを守ることができなかった。
（――考える事は止めよう）
もうこれは決まったことで、リーナスが何を言っても変わらないのだから。

もう十五分以上、エルの後ろ姿ばかり見ている。後ろからは隊長の視線も惜しみなく注がれていた。
故郷ダングルの女子の中では背の高いほうだったリーナスだったが、エルの身長はそれ以上あった。
エルの身のこなしは、驚くほど優雅で、どこか母ヨーリヤと同じ

ものを思い浮かべた。
もしかしたら、この人も貴族なのかもしれない。
――その後、エルの過去を知って絶句するリーナスだが、それはもう少し後の事である。

しばらく歩くと、また先ほどの中庭に通された。倒れる前まではもっとたくさんの人がいたはずだが、どこに行ってしまったのだろうか。
あの子に、手当をしてもらったお礼が言いたかったなぁ、と肩を落とす。
しかし、辺りを見渡すと、その人たちの代わり、と行っては難だが、端の花壇を見ているヨーリヤの後ろ姿が見えた。後ろ姿からは、溢れんばかりの歓喜の感情が放たれていた。
思わず駆けだして、ヨーリヤにアタックする。
ヨーリヤは、びっくりして花壇に突っ込んでしまったが、それでもリーナスの姿を確認して満面の笑みを浮かべた。
「……リーナス！　その様子じゃ、試験合格したのね？」
うん、と思い切り頷く。すると、よかった、とヨーリヤは目を細めた。
「……明日から、離ればなれね」
しばしの時を置いてしんみりと、ヨーリヤが言った。そういえば……。
「これから母さんはどうするの？」
その問いかけに、ヨーリヤが苦笑する。
「あなたに心配されるまで無いわよ。……そうね、また仕立屋でもしようかしら？」
お金はたっぷりあるし、とヨーリヤがいたずらっぽく微笑む。
「……じゃあ、しばらく会えなくなるね」
急に寂しさがこみ上げてきた。いつもけんかばかりしていた母親

でも、寂しいものは寂しい。
　そんなリーナスのしょんぼりした顔を見て、励ますようにヨーリヤが微笑んだ。
「大丈夫。また会えるわ。生きていればね」
「生きて……いたら」
　ヨーリヤの言葉を復唱すると、ヨーリヤはリーナスをぎゅっと抱きしめた。
「そうよ。あなたは母さんに似て、強い子なんだから、しっかりやれるわ。……頑張ってね」
　と、ここでヨーリヤはリーナスの耳元で声を潜めて言う。
「後ろの黒い髪の人が怒ってるみたいだから早くきりあげてあげましょう。
　あなたはきっと荷物の移動とかもあるのでしょう？私はダグネスと話してからいくわ」
　『ダグネス』と言う名前が隊長のことだと遅れて気づいたリーナスは慌てて頷いた。
　すると、名残惜しそうにヨーリヤはリーナスを離した。
　最後にもう一度、頑張ってね、とヨーリヤに肩を叩かれ、リーナスは背を向けて歩きだす。
　もう振り返らないつもりだったのに、気づいた時には駆け戻ってヨーリヤを抱きしめてしまっていた。
　ヨーリヤの体はやはり華奢で、リーナスとはまったく違う。
「リ、リーナス！？」
　ヨーリヤの少し驚いたような声。
「母さん、あたし、頑張るから。父さんみたいに強い騎士になって見せるから」
　ヨーリヤの耳元で、ゆっくりと言った。ヨーリヤが息を飲んだ音がすぐ近くで聞こえる。
「リーナス。……父さんのように、私がいない所で死なないで。お願い、約束よ」

ヨーリヤの感情を押し殺した声で、今までずっとヨーリヤは心にため込んでいたのだと悟った。
ヨーリヤは、今まで弱い自分が不安にならないように強がっていたのだと。
ヨーリヤの背中に回した手が思いがけず強くなる。
「……約束する！　だから母さんも、元気でね！」
未練が無いと言ったら嘘になる。しかし、名残惜しさを悟られないようにぱっと体を離し、今度は後ろを振り向かずにエルの元に駆ける。そんなリーナスと入れ違うように隊長、もといダグネスがヨーリヤに近づいた。

エルの元に駆け寄ると、エルは、少し微笑んでいるように見えた。ほんの微かな変化だが。
「……では、出発だ。来た時に持っていた荷物はもう運ばせてある」
話し始めた大人二人を置いてけぼりして、エルとリーナスは歩き始めた。
目の前にそびえ立つのはラーナリアン王城。
（――あたしは、そこで何を見つけるのだろう）
大きな希望と、少しの不安を抱きながら。

――彼女の運命は、親衛隊入隊を機に、これから大きく変わっていくこととなる。

０８　～別れ～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
今回は早めに投稿することができました！

09　～友～（前書き）

09　～友～

親衛隊の宿舎は、離れにあるのではなく、ラーナリアン王城の一角にあった。
道中にエルから聞いた話によると、親衛隊は全員で三十人ほどいるそうで、隊長のダグネス、そして何と副長のエルは個人部屋、他の隊員は二人ずつの相部屋となっているようだ。
通りで強いわけだ。としても、リーナスが副長に傷を負わせたことがびっくりだ。
幾ら王城と言っても空き部屋がたくさんある訳ではない、ということだろうか。
そして、先ほどリーナスが休んでいた部屋はダグネスの知り合いの部屋らしい。親衛隊ではなく、王城で住み込みの料理人だと、エルは言っていた。
ちなみに、ダグネスの部屋は、足の踏み場もないほどの汚部屋で、エルが片付けようとすると逆ギレしてくるそうだ。
無口に見えるエルだったが、リーナスが居心地悪い思いをしないようにと、ちょくちょく話をしてくれている。意外と人の気持ちにも敏感な人のようで、少し心細いリーナスには有り難かった。

それからエルと話をしながらしばらく歩く間に、始め豪華で優雅だった王城は、歩くたびにどんどん古く、汚くなっていく。
（……幾ら王城でも、汚いところもあるんだ。奥の方に来てるのかなぁ）
少し、というか、かなりショックを受けているリーナスを見て、エルが悔しげに顔を歪める。
「……一見きらびやかに見える王城だが、現実はこれだ。貴族や王族の居住スペースだけに金をかけ、その生活を支えているはずの臣

下には金をかけることはない。ある特定の人物に好かれたものだけが出世する。ここはこんな世界だ。なぜか、分かるか？」
知らなかったので、素直に首を横に振る。
「まぁ、これは一説だが、昔。王族の一人が暗殺者に命を狙われた。親衛隊員はその時とっさのことに反応できず、王族の方は亡くなった。暗殺者は貧しい農民だった。
今思えば、どうやって王城の中に入ったのか。その頃は、それどころでは、なかったんだ。
王は、その頃から農民を信用しなくなった。政策が貴族中心のものとなった。
隊長や親衛隊のメンバーほとんどが農民などの貧しい身分の出だ。王は、それゆえに俺たちの居住スペースを王城の一番端に厄介払いし、給料も低い。生活もぎりぎりだ。……まぁ、ある後ろ盾があるから実際問題、破綻することは無いんだがな」
エルは渋面でそう言って、口をつぐんだ。華やかだと思っていた親衛隊での生活。こんな背景があるなんて知らなかった。やりきれない思いに、思わず唇を噛むとエルが悲しそうに問いかける。
「どうだ？　がっかりしたか……？」
思いを伝えられればと、首を横に一生懸命振った。
「あたし、別に華やかな暮らしをしたいと思ってここに来た訳じゃないですから。でも、そんなことがあるなんて……。悲しいです。あたしは、これからそんな人たちを命をかけて護らなきゃいけないなんて考えると」
そう言うと、エルは目を伏せた。
「……そうだな。俺もだよ」
いつも不機嫌な副長の、本音が一瞬だけ見えた気がした。

それからまたしばらく歩くと、一つのドアの前でエルが立ち止まった。

「ここが、お前の部屋だ。相部屋の子もいるから、仲良くしてくれると助かる」
そう紹介をして、エルは少し小さめの鍵をリーナスへと手渡した。
「これ、なくさないようにしろよ。その後の手続きがいろいろあって面倒なんだ。隊長がやらないから俺がやるしかなくてな」
大きなため息をついたエルだが、その声音には、出来の悪い子どもの将来を心配するよう親のようだった。不謹慎ながらも思わず笑ってしまうと、エルが不機嫌そうな顔でリーナスをじっと見据える。
「……何か？」
「い、いいえ！」
慌てて笑いをかみ殺して答えると、エルは踵を返して、リーナスに背を向けて歩き去ってしまった。
（あ、やばいッ……！）
そう思い、謝ろうと後を追うと、いきなりエルが振り返った。
「……ついてこなくて良い。俺はここで帰るから。頑張れよ、新米」
そしてリーナスにほんの、ほんの少し微笑み、背を向けて帰って行った。

ドアの前に引き返し、ごくんと息を飲んでドアノブに手をかける。
そして記念すべき第一歩を踏み出す。

その時、上半身にいきなりの鈍い痛み。

「ようこそ！　親衛隊へ！」
入っていきなり少女にアタックされたリーナスは、抱きつかれたときの痛みに思わず涙目になった。
まだ少女とはいえ、骨と骨がもろに当たって痛い。その部位をさすり、痛みを紛らわす。
それにやっと気づいた少女は慌ててリーナスを解放した。その子をよく見て見ると、さきほどリーナスを手当してくれた少女だった。
「ご、ごめんなさい！　わ、わたくしそんなつもりじゃっ！」
悲鳴に似た声を上げたその少女まで涙目になり、呪文を唱えようとリーナスがさすっている場所に手を当てる。
「だ、大丈夫！　そんな、魔術を使うまでもないよ！！　ほら！」
自分がリーナスを傷つけたということで、かなりのショックを受けた少女を慰めるため、痛む肋骨の鞭を打って腹筋をしてみせた。かなりのダメージだが、そこは我慢だ。少女の為だ。
すると、少女は驚きに目を見張った。
「打たれ強い方なんですね！　すごいですわ！！」
そんなでも無いよ、などと謙遜したリーナスを、少女は尊敬のこもったキラキラした目で見上げる。少女の背がリーナスより小さいので必然的にそうなった訳だが、すこし恥ずかしい。
たじたじになるリーナスを、少女はにっこり微笑んで、思い出したように、シーツのみが掛かっている二段ベットの上に登らせた。

下のベットには女の子らしいピンクのカバーなどが掛かっているので、下はあの少女のベットらしい。
登ってから辺りを見渡すと、部屋はピンク色の壁紙で覆われ、置いてある家具類もピンクにデコレーションされていた。
王城の古さや汚さなどを露ほども感じさせないこの部屋を、見事と言うべきなのか、悪趣味と言うべきところなのか……。ピンク色にそれほど執着が無いリーナスにとっては困りどころだ。個人的には、ピンクより、緑色のほうが好きなのである。
「可愛いでしょう？」
少女がいつの間にかリーナスの隣に来て問いかけた。答えられないでいるリーナスを尻目に、少女は話し始める。
「こんなに可愛いのに、フィリアスが悪趣味って言うんですの。同じ女の子の貴女なら、分かって下さいますよね？」
少し脅しの入っているような問いかけに、リーナスは苦笑いをして頷くことしか出来なかった。
それに、フィリアスとは誰なのだろう？

少し怖い少女に、自分から話しかけることも出来ずに、少女が話すのを待つ。
幸い、そこまで待つことも無く、少女が口を開いた。
「わたくしは、カームリと言います。十五歳で、双子の兄が親衛隊の中に居ますわ。
この前まで親衛隊唯一の女子だったので貴女が来て下さって本当に嬉しいです」
本当に嬉しそうのニコニコ微笑む少女を見ると、こちらまで嬉しくなってくる。
「あ、あたしはリーナス。この間十七になったばっかり」
少女、カームリに微笑み返す。
「リーナス……さんですか。良い名前ですわね」

「あっ、リーナスで良いよ」
『リーナスさん』なんて身震いがする。
「そうですか？　ではリーナスと呼ばせていただきます。これから、どうかよろしくお願いしますわ」
カームリが手を差し出す。薄い白の手袋をはめてあるその細い手をぎゅっと握り、リーナスは上下に大きく揺さぶった。
「こちらこそ、よろしくね！……そういえば！さっき、傷直してくれてありがとう。助かったよ」
そう言うと、カームリは不思議そうな顔をした。
「なんでお礼を言うんです？」
その言葉にこちらも唖然としてしまった。お礼を言うことは当たり前の事では無いのか？
そんなこちらの気持ちを感じたようにカームリが苦笑する。
「……貴女は勘違いなさっていますわ。わたくしが貴女を癒したのは、善意ではなく、『仕事』だからで　すの。だから、お礼なんて言って下さらなくても結構ですのよ」
そう言って目を伏せるカームリ。悲しみが彼女から溢れる。さきほどの明るさが嘘のように、カームリはしょんぼりと肩を落とした。
「それでも、あたしはお礼が言いたいよ。だってカームリが癒してくれなかったら、あたしは死んでた　かもしれないもん」
にっこり微笑んで言うと、カームリは顔をあげた。
「……貴女は、変な人ですわね」
心底驚いているのだろう。目がまん丸になっている。
「そんなに言うなら、わたくしからもありがとうと言わなければいけませんわ。ありがとうございます。　リーナス」
そう言ってカームリは微笑んだ。
この子は笑っていてくれた方が可愛いと、リーナスは心の中で思う。
妹のように、守ってあげたい。どこか危なっかしくて目を離せられない。そんな存在。

リーナスには、今までに特に親しい女友達はいない。それなりに親しい友達はいたが、その子はリーナスの事を嫌っていた。その子からあふれ出る感情で、事前には分かっていたことだった。それなのに、リーナスには信じることが出来ずに、その子にくっつき、ある日突然捨てられた。

その事を知ったとき、リーナスはもうこれから、友達は作らないと決めた。

うわべだけの笑顔でその場を取り繕い、相手の心を知ろうとしなかった。

『友達』は、もう二度といらない。そう思っていた固い心がカームリという人物の出現で、揺らぎ始めている。あの子の笑顔には、そう感じさせる何かがある。

少し、信じてみよう。

そう思ってしまったのは、偶然だったのか、必然だったのか。リーナスには分からなかった。

その後、カームリと二人で荷ほどきを終えたリーナスは、明日からが親衛隊入隊本番だと言うのにもう疲れ切っていた。

「そろそろ、夕ご飯の時間ですわ」

くたくたのリーナスを見てカームリが苦笑しながら言う。

薄いピンクのレースのカーテンがかかる窓の隙間からはオレンジの光が溢れていた。

そういえば倒れてしまったせいで昼ご飯を食べることができなかった。お腹と背中がくっついてしまいそうだ。
それまでの間にすっかりうち解けたカームリは、動こうとしないリーナスを強引に立たせた。
そして引っ張ったままどこかに連れて行く。
「カームリ！どこ行くの？」
ばたばた暴れながら、慌てて聞くとカームリはリーナスを話してにっこりと微笑んだ。
「ホールですわ！　親衛隊やここの警護に就いている騎士達はそこで食べるんですの。
そこでわたくしの兄も紹介してさしあげますわ」
その、にっこりと微笑むカームリを見ていると、その弟は彼女にとって大切な存在であることが容易に分かった。一人っ子であったリーナスには分からない感情だ。
（きっと弟もおとなしそうな顔してるんだろうなぁ……）
なんて考えながら廊下を進む。今までの時間で、決してカームリが見た目通りの穏やかな少女では無いことは了解済みだ。けれど、双子だからきっとカームリと似ているはずだ。
少し期待にふくらむ胸を抱えて、少女たちは、ホールへと足を踏み入れた。

ホールは、天井がものすごく高かった。リーナスの身長十五人分くらいはありそうだ。
しかし……。
それ以外ははっきり言って大したことは無かった。壁はもう塗料がはがれて木が見えているし、床には食べこぼしがこびりついて変な色に変色している。テーブルに至っては、どこかの足が一本折れているのが当たり前といった風だ。
そこまでは何とか許せるが、この、においに関してはもう無理で

ある。何かの食べ物が腐ったにおい。
牛乳が腐ったような、卵が腐ったような。それが混ざったようなにおいがそのホールには充満していた。
思わず鼻を抑えてカームリを横目で見ると、何でも無いような顔をしてテーブルへと歩いていく。
結構な人数がいるこのホールで唯一の親しい知り合いを見失ってしまっては大変だ。鼻を強くつまみながらリーナスは慌ててピンクスカート姿の後ろ姿を追いかける。

席について一息ついたカームリは、やっとリーナスの様子に気づいたようだった。
「あら、リーナス。どうかしましたか？」
鼻を押さえている時点で分かるだろう！と言ったことをジャスチャーで伝える。今ここで口を開いて口の中にこのにおいが入ったらこらえきれない。たぶん……。吐く。胃の中にはたぶん何も入ってないはずだが、食事を楽しみにしている他の人たちに迷惑はかけられない。
それを伝えると、カームリは形の良い眉を寄せた。
「困りましたわ……。今日ここでリーナスの試験合格を皆に知らせるとおっしゃっていましたのに……。
我慢することは……。できなさそうですわね。一人で、先ほどの部屋まで戻れそうですか？
ここでわたくしも出てしまうと貴女の分までご飯持って帰れなくなりそうですわ。
ここのホール、時間厳守なんですの」
（なんでも良いから早くここから出たいよぉ～～）
といったことをまたもやジャスチャーで伝えると、カームリはまだ困り顔だったが、大きく頷いた。
「隊長には、わたくしが後で話しておきます。早く帰ったほうが良

いですわ。
夕ご飯の方は、あとからわたくしが責任を持っておいしそうなものを持って帰りますから」
ありがとう、とカームリを拝む仕草をしてよろよろとホールを出て行った。
ホールの入り口の騎士の人がリーナスを心配そうな目で見ていたが、リーナスはそれどころでは無かったので無視することにした。

ホールを出て、やっとひんやりとした清浄な空気を肺に流し込む。
（あぁ……。生き返ったぁ）
あそこのホールはいったいどうなっているのだろう。あれははっきり言って毒ガスだ。あんな所で食事をするなんてどうかしてる。と、ほっといたらこのままわめきそうになったのでとぼとぼと部屋へ向かって歩き出した。
さっき来た所を帰れば良いのだから簡単簡単などと楽観的に思っていたリーナスだったが……。

「道に迷った……」
お決まりの展開に頭を抱えるばかりである。自分が方向音痴だということを初めて自覚したということも自分の馬鹿さ加減に呆れる。ホールに近いうちに一回ホールに引き返そうと戻るも、どこから来たのか途中で分からなくなり、ふうっと大きなため息をついて廊下にぺたりと座り込んだ。
疲れたのもあるし、何よりお腹がすきすぎて歩くことができなかった。
（カームリ……。あたしの居場所分かるわけ無いもんなぁ……）
誰かに見つけてもらおうと思っても、人っ子一人いない廊下で誰かに出くわす確率はほぼゼロに近いという考えに行き着く。

「ああぁ……。どうしよう」
こんなことになるなら毒ガスホールで我慢してご飯食べておけば良かった……。
後悔ばかりが降り積もる。

どれほどの時が経っただろうか。リーナスは足音を聞いた。
静かな廊下に響くリズミカルな足音。かつん、かつんと響いているのでヒールの靴だろうか。
そうとしたら女性で、こんな人っ子居ない場所になんの用事だろう。
曲がって来た女性を見て、リーナスは凍り付いた。

その女性は、人間味のない、非の打ち所が全くない美人だったのである。

09　～友～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
活動報告も随時更新中です。良かったらどうぞ。

１０　～再会～（前書き）

遅くなってすみません。

10　～再会～

綺麗な、長い紫色の髪、切れ長の大きな瞳。真珠のように白い肌。目の前に現れた美女はどれもリーナスにはないものを持っていた。リーナスよりも少し年上だろうか。どこか人間ではない存在であると錯覚してしまいそうな美女は、ただリーナスを無表情で見つめているだけだった。

リーナスはというと、固まったまま、その美女を見ていた。

見ていた。というよりも、どうしても美女から目が離せないのだ。彼女に惹かれたわけではない。どこまでも続いていきそうに深い紫色の瞳。吸い込まれていきそうな、深い紫色の瞳。それにどうしようもなく視線がくぎ付けになってしまう。

そういえば、古くから、『目』には魂が宿っていると言われているらしい。彼女の瞳には、間違いなく魂がこもっていた。見つめてくる彼女の瞳からは、どんな感情も見いだせない。普通の『人』ならば、感情を隠すことはまずできない。今まで感情を完全に隠せる人に会ったことがなかったリーナスは動揺していた。感情を知ることは、リーナスの毎日の中でほぼ日常的に変化し、それなしではどう行動すれば良いのか、全く分からない。彼女はただ無機質な瞳で、どこまでも無表情で、穴が空くくらいリーナスを見つめている。

その次の瞬間。体中に悪寒が走り、気づくと足が細かく震えていた。

（な、何……！？）

自分でも全く理解することができない。彼女から一瞬で、まばたきをするぐらいの一瞬の間で、膨大な量の殺気が放たれていた。彼女の無言の圧力に、リーナスは文字通り体の芯まで凍りついた。

（あ、あ、あたし……。何もしてない）

どこか彼女の意にそぐわない事をしてしまったのだろうか。このまま地面に座り込んでいるのは失礼だろうか。考えれば考えるほど

頭がパニックになっていく。パニックと比例して、止めようと思っても、足の震えが止まらない。冷や汗が背中を滑り落ちた。

そのまま、リーナスには永久とも思われる時が過ぎ、彼女はようやくリーナスから目を離した。

視線が自分から外れたその瞬間、大きな安堵が体の中を駆け巡り、リーナスはふと、泣きそうになってしまった。彼女には悟られないように、深く俯く。

その時、肩に誰かの手が置かれ、思わずびくりと肩が跳ねてしまった。はっとして顔を上げると、先ほどの美女が少し傷ついた顔でリーナスを見ていた。

「……心配してあげたのに、そんな顔をしなくても良いじゃない」

声も綺麗で、泣いていることを一瞬だけ忘れて聞き入ってしまった。

美女は、少し不機嫌そうな、でも楽しそうな顔をしている。先ほどの殺気の原因だとは思えない。

「とりあえず謝るわ。ごめんなさい」

そう言って彼女は頭を下げ、豊かな紫色の髪が床にたれた。余りにも素直に彼女が頭を下げたので、リーナスは、すっかり涙が引っ込んでしまった。

「そ、そんなっ！」

リーナスは焦って声を上げる。これはリーナスが勝手に泣いたことで、彼女が謝ることなど、本当にないのだ。それでまた怒って殺気を放たれたらひとたまりもない。

「いいの。私が悪かったのよ、力がある方だとはいえ『邪眼』を人の前で使うべきではなかったわ。

私の『転移』の魔術をくぐり抜けたとはいえ、結局は人……」

美女は、理解できないことを言って落胆したようにうつむいた。仕草で感情を露わにしているはずなのに、どうして意図的にオーラ

として表れる感情を隠しているのだろう。
　リーナスが首をかしげていると、美女も怪訝そうに、リーナスの顔をのぞき込んだ。
「……？」
「な、なんですかっ？」
　年上だと思われるので、敬語で思わず問いかけたが、彼女はうるさそうにリーナスをぎろりとにらんだ。
「こっちの話よ。まぁよいわ、貴女に聞きたいことがあって、わざわざこんな所に出向いたの。
　座ったままで良いから、きちんと聞いてちょうだい」
　美女はそう言って音もなくリーナスの隣に座った。
（こんな床に座ったら服が汚れちゃう！）
　リーナスが一瞬焦ったが、幸い、彼女がそれを気にするそぶりは見せない。豊かな髪が揺れた拍子に、ヨーリヤが好きだった花の香りが漂う。
　彼女はいったい何者なのだろう。着ている服と身のこなしで、一般人でない事はすぐ分かる。貴族だろうか？　彼女の顔をのぞき込む。自分では良く分からないので、彼女が自ら明かしてくれるのを待つしかなさそうだ。
　リーナスの期待を知ってか知らずか。彼女は、ゆっくりと口を開いた。
「私の名前はイージュ。多分、あなたがこの名前を聞くことも、使うことも一生ないでしょうけど、
　一応覚えておいて」
　リーナスが小さく頷くと、イージュと名乗る美女は口元に微笑を浮かべた。
「あなたには一回会ったことがあるわ。その時も、そう言って頷いていたわね。あなたは覚えていないでしょう？」
　話を振られ、リーナスは記憶を探った。こんな美女に会ったことがあるなら、絶対に覚えているはずだ。けれど、記憶の中には痕跡

すらない。もしかしたら全く記憶がない子供の時の話だろうか。
悔しいが、ゆっくりと首を横に振る。
「そうよね。……あなたはあの事件に巻き込まれてしまったのだから」
そう言ってイージュは、リーナスから視線を外して遠い目をした。人のいない廊下のどこからか風が吹き抜けて二人の髪を揺らす。
（事件って……？）
初耳だ。今まで小さい頃の記憶がないのは、ただ単にリーナスの物覚えが悪いからなのかと思っていた。ヨーリヤも、エスライも、ヘスターも、誰も、そんなこと一度も話してくれなかった。
（あたし、知りたい……）
これはリーナスの記憶の問題だ。消失した記憶が元に戻るかもしれないなら、リーナスにはそれを知る権利がある。
そう口を開きかけたリーナスを、イージュが遮る。
「知りたいかしら？　でも今日はその話をしに来たわけではないの。あなたのお父上、『西の守護者』ことエスライはどうして死んだのか、それを知りたいのよ。
あなたなら分かるでしょう？　あの人の娘のあなたなら」
エスライの名を聞いた瞬間、胸がちくりと痛んだ。
「……父さんの死んだ原因は分かりません。あたしは、それを知るためにここに来たんです」
声が震えそうになるのを苦労して押さえつけて、リーナスは答えた。どうしようもなく、俯いてしまう。
「……知らない？」
イージュの声がワントーン下がった。ぱっと顔を上げると、先ほどの恐怖にも似た感覚が再びせり上がってくるのを肌で感じた。周りの空気が一瞬にして二度ほど下がったような気もする。
吹いていた風がぴたりと止まり、殺気が辺りに充満し始めた。体中に絡んでくるような、まとわりつく殺気。
「……。あり得ないわ」

イージュは頭を抱えて、髪を振り乱す。声音から推測すると、彼女は焦っている。
「あり得ない！　あり得ない！　あなた、娘でしょう！？　教えなさいよ！？」
声を荒げたイージュは、リーナスの胸元につかみかかった。見た目に似合わず、かなりの怪力で、リーナスは思わず息をのんだ。
「教えなさい！　教えないのなら今ここで殺すわよっ！！」
そう言ったイージュの瞳にはまた殺気が戻っていた。今なら視線で人を殺すことができるかもしれない。リーナスは、溢れる膨大な殺気に何も答えられない。口の中が一瞬でからからに乾き、口を開くことができない。イージュの瞳は本気だ。ここで答えなかったら殺される。けれど、何も知らないので答えようがなかった。
（母さん……。ごめん）
ここで、今ここでリーナスは殺されるだろう。イージュは本気だ。
（嫌だ。嫌だ。嫌だ。あたし、どうしたら良い？　嘘の情報を流せばいいの？）
そうだとしても、絶対に生きて帰る帰ることはできない。そう思うと、がっかりしたが、不思議なことに、絶望はしなかった。
死ぬはずなのに、驚くほど穏やかな気持ちになっていた。なぜかは、自分でも良く分からないが。
もう死ぬのだとしたら、最期ぐらいはかっこよく死にたい。覚悟を決め、イージュの瞳をしっかりと見据えた。
腰に差した剣をとりたいが、体はイージュの呪縛に絡め取られ、動くことができない。
（剣も使えない……か）
最期は剣士らしく剣を握って死にたかった。それを考えても悔いが残るだけなので、考えを打ち消す。
死を覚悟した今となっては、イージュの視線は怖くなかった。逆に、彼女の瞳はひどく寂しそうに見えた。どこか孤独な、孤高の姫君。正体はそんな感じかなぁ。とぼんやりとそんなことを考える。

「……死にたいの？」
イージュがさっよりも下がった低い声で問う。ついさっきの自分だったら怖がるはずだが、今のリーナスはなぜか怖くなかった。きちんと口も開ける。
「あたしは知らない。それが真実です」
その言葉を聞き、イージュは思い切り眉間にしわを寄せた。いきなりリーナスを解放する。
そしてイージュは突き刺さるような冷たい声で吐き捨てた。
「……命拾いしたと思いなさい」
助かった。のだろうか。どこか実感が湧かなくて、ただリーナスはイージュを見つめる。
「生きていたこと、きっと後悔するわよ」
氷のような笑みを浮かべながらそう言って、イージュは立ち上がり、リーナスを見下ろす。
「……エスライの娘。今度邪魔立てしたら許さないから。次はないと思いなさい」
イージュが言葉を吐き捨てると、辺りに白い閃光が閃いた。
思わず目をきつくつぶってしまう。
開いた瞳に気高いあの孤高の姫君はいなかった。

後に残されたものは、リーナス一人。一人ぼっちの、リーナス一人。

１０　～再会～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
活動報告もやってますので良かったらどうぞ。

11　～破壊～（前書き）

今回は姫君目線からスタートです。

11　～破壊～

「あぁぁぁぁぁ！！　何なのよあの小娘！」
その小娘が自分と同い年だとは知りもしないイージュである。
『転移』の魔術で塔に戻ったなりイージュは辺りにわめき散らした。誰もいないことを良いことに、邪魔なものを魔術で壊しながら、ばたばたと足音荒くバルコニーへ向かう。静かな部屋にイージュのヒステリックな声だけが響いた。
今日も月がとても綺麗な晩である。
しかしイージュはそれに目を向ける事無く、近くの山に向かって呪文を半ば怒鳴りながら唱えた。
「雷光よ、轟けっ！！」
呪文を半分以上省略した上に、魔力のコントロールもしないで派手にぶっ放した。
一瞬辺りが真っ白に光って次の瞬間にはイージュの作り出した黒い雷が近くの山に落ちた。最初は山の頂上に打とうとした雷は、少し目標を外し下の方に着弾したようだ。
一拍遅れて辺りに轟音が伝わり、思わず耳を塞いだ。次の瞬間には直撃したところがイージュが魔力で作り出した黒い炎で燃え始める。
（……呪文省略しなかったらもっと威力大きくできたかしら？）
冷ややかにそう考えた。かなり無茶をして魔力を行使したので息が上がってしまった。次にこの程度の魔力を使えるようになるのはいつだろう。このところ魔力の戻りが遅いから一週間後になってしまうかもしれない。
驚くべき速さで燃えだした山を見ながら、イージュは悔しげに顔を歪めた。
「……イージュ様」
その時に静かにたしなめる声が後ろから聞こえた。少々げんなり

して後ろを振り向くと予想した通り、イージュの精霊、ミディアが立っていた。
真っ黒の長い髪に赤い瞳。典型的な、闇の精霊の外見である。ただ他の闇の精霊と違うのは、ミディアがまだイージュと大して年の変わらない少女の格好をしていることだろう。ぴちっとした真っ黒の革のパンツにジャケットという出で立ちである。
一応、イージュが一番始めに契約した精霊で、一番気心がしれた仲ではある。
「ミディア！　あんたも分かるでしょう！？　イライラしないのっ？」
思わずくってかかると、ミディアは相変わらず涼しい顔で、「はい」と答える。
「……こんなに魔力を無駄にしてしまって。このところ魔力の戻りが遅いのでなかったですか？
もし緊急事態になって魔術を使わなければいけなくなったらどうするおつもりですか」
詰問するような声音に否応なくこちらの神経も尖る。
「何にせよ、もうやってしまったからしょうがないわ」
固い声で返した。
精霊と契約者は同じ人格を持つ。それは、どの魔術書を開いても書かれているが、自分とイージュに関しては間違いでは無いのかと思う。いつだってミディアはイージュの見ている光景、感情を共用している。それなのに、いつもミディアは自分と正反対の事ばかり言うのだ。
確かに、ミディアは自分の気持ちを分かってくれてはいる。けれどその思いが暴走しないようにいつも正反対のことを言うのだと、この頃やっと分かってきた。
「魔物がすみかを奪われて王都に降りてくるでしょう」
ミディアがもう四分の一が焼け野原になった山を指さしながら言った。

「私の魔術から逃れられる魔物がいるとは思えないけど。それに、そんなの知った事では無いわ」
つんと顔を背けると、大げさにミディアがため息をついた。
「そこまで腹が立つほど、あの娘が気になりますか？」
うっと言葉に詰まったイージュを見て、ミディアが不安そうに言う。
「闇の精霊の感から言っておきますけど、あの娘はどこか得体が知れません。
契約の『印』が無いのにかかわらず精霊の気配がするのです」
「……あぁ、それなら私も感じたわ。あの小娘にはどこか魔力が感じられるのよね。
腐ってもエスライの娘ということかしら」
ふと、ミディアが首をかしげた。
「エスライ殿は本当に亡くなったのでしょうか？」
「死んだに決まってるでしょうっ！　エスライの名前を出した時の小娘の顔、見たでしょう」
ミディアはその場面を思い出したように顔を歪めた。
「……辛そうでしたね」
「あの顔が嘘だと言うなら私はこの世の全てを疑うわ」
ふんと鼻を鳴らして答える。あの表情は今まで愛されて育ちました、なんてアピールしているようなものだ。八つ当たりだとは思うがどうしてもイライラは収まらない。
そんなイージュを見てミディアが呆れたような顔で言う。
「それはともかく、イージュ様は姫君なのですから、もっと御身を大切にして下さい。
さっきの魔術に関しても、もし魔力が逆流でもしたらどうなっていたと思ってるんですか」
口をつぐみ、一拍おいて考える。
「……死んでたわねぇ。ま、それでも良いんじゃ無い？　この世の誰にも、私は必要とされてないから」

「イージュ様……！」
ミディアが驚愕の色を浮かべる。イージュはきわめて軽い口調で言った。
「だって本当のことでしょう？　こうなる位なら、生まれてこないほうがマシだったわ。
軟禁された生活。消された存在。この世に私が存在する意味なんてあると思う？」
ミディアが唇を噛んで答える。
「……少なくとも、私のこの生はイージュ様に出会うために与えられたものだと思います」
「……。相変わらず固い頭してるのね、ミディアは。大丈夫よ、死ぬつもりは全くないから。
あんたも分かるでしょう？　……そうだ、お風呂の準備できてる？」
「は、はい。さきほど水を入れときましたから。後は湧かすだけです」
「んじゃ、私は入って寝るわ。……あぁあ、気分悪い。じゃね」
ミディアは、自分が魔術で作り出した浴槽に主人が消えていくのを見送っていた。
イージュが出てくる前に着替えを準備して、紅茶でも入れておこう。
同じ気持ちを共用しているから今何をして欲しいのか、よく分かる。
けれど……。今イージュが一番欲しているのは、『力』では無く、『愛情』だ。あのエスライの娘が貰っていたような、掛け値無しの愛情。
（……この世の誰にも、イージュ様が必要とされなくても、私は必要としています）

その言葉を言い出すタイミングが掴めなかった。けれどもそれでも良い。自分のこの気持ちは、きっとイージュには分からないだろう。

――誰かに愛されたことも、誰かを愛したことも無いイージュには。

リーナスは、轟く轟音に思わず文字通り飛び上がった。

「な、なにっ！？」

その後に、城が震え、足下まで振動が伝わってくる。

「なにがあったの……」

地震、だろうか？でもそうだとしたらなぜあんな轟音が聞こえてくるのだろう。

（ま、まさか襲撃！？　戦争……なんてこと無いよね……）

そう考えると背筋が凍った。力の出ない体をむりやり起こす。少しふらついたが壁に手をつくことでなんとか立つことができた。

（まずはここから脱出して食堂に行こう。そこから親衛隊の人に部屋を教えて貰おう。

結構優しい副長なら教えてくれるよね。まだいればいいんだけど……。）

リーナスはふらふらと、誰もいない廊下を歩き始めた。

ダグネスは、前方から歩いてくる人物に目を見張った。ここは結構ラーナリアン王城の中央に位置する所でもあり、親衛隊の宿舎からもかなり距離があるところだ。

（遭難してんのか？）

それならさぞかし困っているだろうと思い、声をかけた。

「おぅ！　新入り、どうした？」

声をかけると、新入り（名前はリーナスだったと思う）は、ぱっと顔を輝かせた。
「た、隊長。あたしの部屋、どこか分かりますかぁ……？あと、さっきの音は何ですか？」
そのまま弱々しい声で問いかける。
「お前の部屋……？　俺は知らないなぁ。それと、さっきの音にしては今エルが調査中だと思う」
「あ、あうっ。知らないなんて言わないで下さいよ、迷子になっちゃったんです。助けて下さい」
「はぁっ？　迷子？　そういやカームリが新入りを部屋に帰らせたって言ってたな」
やっとの事で記憶を呼び出す。いつもおっとりして、何事にもそんなに焦らないカームリがなにやら焦っていたなぁ。なんて思ったことも思い出した。
（もう仲良くなったのか。珍しいな）
意外とカームリは人見知りをすることが多いから、こんない早くうち解けたというのは驚きである。それだけ目の前の少女が気に入ったということだろう。
リーナスは、カームリの名前を聞いて大きく頷いた。
「そうです。それそれ。だから、あたしの部屋、教えて下さい。それかご飯下さい」
必死で詰め寄ってくるリーナスの形相に、ダグネスは苦笑した。
「……飯は持ってないが、エルのとこまで案内してやろうか？まぁ、俺も今行こうと思ってたとこだしな」
正直いって面倒くさいが、こんなに懇願されるのも悪い気はしない。
「は、はいっ！！　お願いしますっ！！」
リーナスが輝く顔で頷く。
――丁度その時、リーナスの後ろ側からエルが現れた。いつもより不機嫌である。

ダグネスの前にいるリーナスをうさんくさそうな目で見るが、それよりも重要事項なのか敬礼をして話し出す。
「隊長っ！！　正体不明の雷がデヴァ山に落ち、現在デヴァ山が燃えておりますっ！」
思わずちっと舌打ちしてしまう。
「さっきの爆音は雷か。今日は雨なんて降ってないぞ」
エルが険しい顔で報告する。
「はいっ！　おそらく何者かが魔術で作り出したものかと」
「……この国に今時そんな魔術師いたか？」
魔術の才能を持つ人が激減しているのが今この国の現状だ。ましてやあんな大きな雷を作れるような魔術の素質を持つものは滅多にいなくなった。
「自分の記憶しているところではいませんが……」
エルが不思議そうに眉間にしわを寄せる。
「エルでも知らないのか。こりゃ犯人特定に時間がかかるな。今デヴァ山はどれぐらい燃えている？」
「さきほどの伝令兵の見立てだと、もう三分の一は焼け野原になっていると。現在も燃え広がっていますのでこのままのスピードでいけば今日未明には全焼すると思われます」
「三分の一！？　どんな魔術を使えばそうなるんだ！！」
思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。魔術師はかなり力のある奴らしい。
「かなり高位の魔術師でしょうね」
「……魔物がすみかを奪われて王都まで降りてくることも考えられる。警備を厳重にせよ。
もし足りなかったら親衛隊も使って良い」
「了解しました」
きびきびした動きで敬礼をし、素早く去っていたエルを見送り、呆然としているリーナスに向き直る。
「お前はどうする？　今それどころではなさそうなんだが」

「……一人で、帰りますよ」
リーナスは肩を落として答える。感情がわかりやすい。
「そうか、じゃあ気を付けろ。たぶん、さっきの爆音で城内は騒然としていると思うぞ」
「リーナス！！」
リーナスが答えようとしたその時、この場に似つかわしくない明るい無邪気な声がかかった。
ダグネスが振り向くと、リーナスの相部屋であるカームリが泣きそうな顔で駆け寄ってきた。
しっかりダグネスを無視して、そのままリーナスをぎゅっと抱きしめる。
（お、おい。俺、一応あんたの上官なんだけど）
「部屋に帰ってもいなかったので、心配しました」
「か、カームリ。あたしは大丈夫だよ。
な、なんか大変なことになってるみたいだから早く部屋に戻りたい」
リーナスはしどろもどろになっている。
「分かりました！　さっきの爆音すごかったですもんね？」
カームリがリーナスの体を離し、にっこり微笑んで言った。
「ってことなので、隊長。あの、ご迷惑かけてすみません」
カームリから解放されたリーナスが礼儀正しく頭を下げる。
その頃には無視されたショックもなくなってきていた。
「ああ。親衛隊にも出撃命令が下るかもしれないから今日はもうゆっくり休め」
「はい。じゃあ、失礼します」
にっこり微笑んで答えて、リーナスとカームリは仲の良い姉妹のように帰って行く。
ダグネスはほほえましいその姿を見送り、そして問題を解決するために軍議室へ向かった。

今日はきっと徹夜になるだろう。

11　～破壊～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

12　～出撃～

やっとのことで部屋に帰ったリーナスは、カームリが毒ガスホールで持ってきたご飯を短時間で平らげた。

あの毒ガスホールにあったものなのでまずいかと思い、覚悟して食べたが、予想に反してかなりおいしかった。特に、ちょっと甘辛く炒めたお肉は最高だった。

カームリの話だと、貴族のパーティで使ったものを横流ししているだけらしいが、おいしいので特にリーナスに不満は無い。もっと食べたいと思うほどだ。

それに、それ以前にカームリ達のような貴族への敵対心があまりないというのも一つの要因だろう。

今まで出会ったラーナリアン人は、貴族嫌いが多い気がする。リーナス自身は貴族とそれほど仲が良いわけでも無く、彼等が何をしているのかが分からない。

カームリやエルの口調からすると相当嫌われているような事をしているようだ。

二人から出る憎しみの感情は大きく、深い。二人は貴族に対して思い出したくもないような過去を持っている、気がする。リーナスの勘はいつも当たる。だから、きっとこれも本当なのだろう。

（いつか……。話してくれるかな？）

カームリは明るくて、優しい。だからこそそういう悲しみや憎しみをため込んでいる。まだ少しの時間しか一緒に過ごしていないが、それでもよく分かる。

だからこそ、誰かにため込んでいるものを出さなくてはいけないのだ。それに、リーナス自身も一応貴族の血を引いている。貴族がカームリ達に何かしたのなら、自分のせいで無いとしても謝りたい。でないと納得できない。リーナスはひそかに決心を固めた。

そう考えながら、大きくふくれた自分のお腹をさすっていた時、やっと、デヴァ山の様子を聞きに行っていたカームリが帰ってきた。
「どうだった？」
深刻そうな顔をしていたので思わず問いかけると、カームリは跳びつくように話し出した。
「やばいなんてものじゃありませんわ！　このまま行けば全焼は間違いないと思います……。
消火活動はどうなってるのですか……！わたくしは……！　わたくしは……！」
「ま、まぁまぁ……。落ち着いて、カームリ」
このまま逆上しそうになったカームリをなだめる。
「……。　……申し訳ありませんわ。わたくし、ただ見ているだけというのが許せないのです。
わたくしたちが住むこの王都で、親衛隊の見ているこの王都で、人を死なせるなんてことがあったら、
わたくしは自分を許せません」
静かに抑えたカームリの声にリーナスは心を打たれた。カームリから漂うこの感情は悔しさ、悲しみ、そしてこの王都への、そこに住む人々への愛情が溢れていた。まだここに来て日が浅いリーナスには良く分からない。
「……魔物の移動も始まっているようですわ。……親衛隊への出撃命令はいつになるのでしょう」
カームリがぽつんと、沈みきった声でつぶやいた。
「カームリ。デヴァ山ってどんな山？　あたし、よく分からなくて。
これから実戦で行くかもしれないのに、そんなの嫌だから」
そうリーナスが言うと、カームリは少し考え込む。
「……リーナスはダングル帝国から来ていたのですわね？　そういえば、エルさんが
言ってましたね。
そうですね……。デヴァ山は、ここから結構離れた山なんですが、

王都とデヴァ山の間には
草原しか無いのです。その草がくせ者で、油成分たっぷりなんです。
なのですぐ炎が広がってしまうのですわ。
そして……障害物が無いので火を遮るものが無い。
このままいけば王都にもすぐに火の手が回るということになるのです。
あと、デヴァ山は太古から多くの魔物たちが住んでいるという噂です。
それに、このところ魔物が凶暴化していて。今回の火事で魔物たちが王都へ下ったら……。
考えるのもおそろしいですわ……」
カームリが華奢な肩をぶるりと震わせた。
王都が燃える。それはすなわち、母ヨーリヤもそれに巻き込まれてしまうことになる。そして魔物の凶暴化。それを考えると血の気が引いた。また、大切な人を失ってしまう。たった一人の母親、たった一人の家族を。
「……火ってどうやったら止められる？」
固い声でそう質問するとカームリはまた少し考え込んだ。
「そうですわね……。誰かが話していたのです。あの火は人工的に作られたものだと。
人工的に、魔術で作り出されたものは魔術で消すしか方法はありません。
今もなおコントロールしているのなら術者を突き止めて止めさせるしかないですわ。
今はコントロールせずに放置しているなら、あの炎よりも強い水魔術などで消すしかありません」
「あ……。副長が、かなり高位の魔術師だって言ってた……」
思い付いた事をつぶやくと、カームリは眉間にしわを寄せた。
「並の魔術師がやったならともかく、高位の魔術師ならこれが危な

いことだと分かるはずです。
あの炎が燃えている間はかなりの魔力を消費するのです。
それに気づかなくて、魔力を消耗し、気づいたときには炎に魔力を搾り取られて死に至る……。
なんてこともざらにあり得るのですわ。今はそれを望みたい所ですが。
ただ、ひっかかるのはあんな魔術師がそんな初歩的な事を知らないはずが無いということです。
……それを知りながらも魔術を使い続けているなら、その術者はかなりの、近年希に見る高位の
魔術師である可能性が高いですわね……」
「……う」
言葉に詰まる。
（これじゃ……あたしたち……勝ち目ないじゃん）
リーナスの顔色を見て、カームリも沈んだ顔になった。
「難しい状況ですわ。あれを消火するのは。
術者を倒すという意味なら、こちらの持てる力を全て使うことができるのならできそうですが……。
剣士も、魔術師も、全ての力を、です。なにせ相手は天才魔術師です。
なめてかかれば寝首をかかれる事になりかねません。用心に超したことはありません。
きっとこの魔術師もそうなる事を予想して魔力の痕跡を隠そうとするでしょう。
消耗戦になることは間違いありません。
魔術で消す。という意味なら、この国全部の魔術師を動員してもできるかどうか……。
わたくしには、想像がつきませんわ」
眉間にしわを寄せながら答えるカームリ。リーナスが怪我したときに見た彼女の治癒術はかなりのものだった。そんなカームリがこ

んな事を言うなんて、その人物はかなり強者だということが分かる。
下手をしたらこの国全てが塵と化す。なんて事もあり得ないことではないだろう。
「……今、隊長とかは頑張ってくれてるんだよね？」
不安になって思わずカームリに問いかける。自分は知らないことが多すぎる。もっと知りたい。
もっと知ることができたなら、この胸に積もっていく不安を消し去ることもできるかもしれない。
「えぇ。隊長、ずぼらに見えますけど。やるときはきちんとやる人ですわ」
そう、不安そうながらも微笑んで答えたカームリの言葉が終わるのを待つように、ドアのノックが聞こえた。焦っているように素早くされたノック。今は非常事態だ。これが出撃命令かもしれない。リーナスの初陣の始まりを知らせるノックかもしれない。思わず体を硬くした。
カームリもリーナスと同じような事を考えたのか、顔をこわばらせたまま「はぁい」と答えてドアを開け、そのまま廊下に出てなにやら話し始めた。
ぼそぼそと聞こえるカームリと、低い声で話す男（声が低いのでたぶん男だろう）の声を聞きながら、リーナスは不安でいっぱいになる胸を押さえることしかできなかった。
自分は何も知らない。何も出来ない。時がリーナスにだけ早く流れれば良い。そうしたら、年下のカームリに頼ることもないだろう。そうすれば、自分を認めることもできるだろう。
そのまま、数分話し込んで帰って来たカームリは、どこか晴れやかな顔をしていた。
「任務が下りましたわ。親衛隊は、エルさん、そして第一魔術師隊の方々といっしょに
火の消火に当たることになりました。速さが要求されるので、全

員城の裏門前にすぐ集合だそうです」
「えぇ！？　でも、あたし魔術使えないし馬にも乗れない」
思わず声を上げてしまった。そんな事じゃ皆の足を引っ張ることになりかねない。
「わたくしも今初めて知りましたが、エルさんも魔術が使えるらしいのです。
それとわたくしをはじめとした魔術を使える親衛隊メンバーも魔術での消火活動にあたります。
魔術の詠唱中は無防備になってしまうので背中を護って欲しいと。それがリーナスの任務です。
馬ですが……。わたくしの後ろに乗って下さい。相乗りになりますが、よろしいですか？」
問いかけられ、大きく頷く。
「分かりました。では、準備を急ぎましょう」
カームリが、リーナスの肩を叩いてにっこり微笑んだ。
なにはともかく、リーナスの初仕事である。怖いが胸がはずむのは押さえられない。
「リーナス、持ち物はあとで補給隊も来ると思いますので武器と鎧だけで良いと思いますわ。
あと、親衛隊の専用の鎧があるので出撃の前に向かいましょう。
はぁ……。こういうことはあとでゆっくりやろうと思ってましたのに……」
カームリは仏頂面でつぶやいた。

裏門に到着したリーナスとカームリはその規模の大きさに驚いた。普段この王城にいる魔術師の三倍ほどはいると、カームリが言っていた。
親衛隊メンバーは、半分ほどが出撃。その他はダグネスと共に王

城を護るらしい。
きっと、この非常事態に王都のあちこちから召集されたのだろう。
リーナスが来ている鎧は本当は男物で、女のリーナスには大きくきつかった。
馬には乗ったことが無いので馬上で体全体がかなり緊張している。
ただカームリが時々リーナスに優しく声をかけてくれた。それで緊張が少しほぐれる。
カームリはと言えば、魔術師なので持参したローブを羽織っている。まだ幼いがこれでもれっきとした魔術師。これまでは真ピンクとは行かないようで、淡い色彩のピンク色だった。
親衛隊はリーナスと同じ鎧。第一魔術師隊は全身すっぽりと覆われたローブを着ている。
まっくろのローブの人たちを見ながら、リーナスはかつて無い使命感を感じていた。
ここでリーナスたが失敗してしまえば、王都に住むヨーリヤや、他の住人たちの命が危険にさらされる。リーナスたちは絶対に失敗してはいけないのだ。成功しか、自分たちには許されない。
そう胸に誓って、リーナスは目をつぶった。

心が静まったのを見計らって目を開けると、エルが剣を振り上げる姿が見えた。
「皆の物、良く聞け！　この戦いは、目に見える、実在する敵との戦いでは無い。
しかし、これは実戦と同じ、家族を、愛する人々の為に行われる戦いである！
おそれることは無い、このエルヴァンダル・ローラスがある限り王都は不滅だ！！」
百に満たない部隊全体が歓声を上げた。自信満々のエルを見て、かなり士気があがったようだ。
たしか、家庭教師兼父親役のヘスターも、闘いに置いて士気とい

うものは大切です。とかなんとか言っていたような気がする。
ともかく、エルの演説でかなり士気は盛り上がった。
「先頭、進め！！」
エルが剣を向けた。先頭部隊が馬をかって飛ぶようにかけていく。
「あたしたちには、国民の命がかかってるんだ……」
その姿を見ながらリーナスは、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

12　～出撃～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

13　～悪戯　前編～

「隊列を整えろ！」
ぴしりとエルの怒号が辺りに響いた。その声に部隊全体が一瞬で隊列を整える。
その光景を他人事のように眺めながら、リーナスは思わず感嘆してしまった。
彼の声には人を従わせる魔術がかけてあるのだろうか。そう思ってしまうほどエルの声は遠くまで響き、人を従わせる。ここから見ているかぎり、それは兵たちの日々の訓練の賜物でもあり、エルの声の魔力で体が勝手に動いて従ってしまった結果だとも思える。
それが指揮官となるものとしての絶対必要な才能なのだと、これもまたヘスターから教わった。今思えば、リーナスにこんな『普通』の女の子に必要では無いことを教えたのはいつか武の道へ進むことを見透かしていたからなのだろうか。
（ありがとうございます。ヘスターさん。ヘスターさんから教わったこと、絶対戦いの役に立てますから。だからどうか、この戦いに勝たせて下さい。母さんを、王都の人達を護りたいんです）
もうこの世にいない人に感謝すると共に、この戦いの勝利も切に願う。
ヘスターに、私は万能の神では無いのですよ。と苦笑しながら言われそうだ。
（どうか……。どうか……）
思わず目をつぶって祈る。その時。
「魔術師部隊、配置に付け！」
思考はエルの声で中断された。リーナスも急いで戦いモードへ思考を切り替える。
カームリを初めとする魔術師部隊は馬を御して落ち着かせ、端から順々に降りていく。

馬に乗っていると馬の混乱や動揺がどうしても魔術師に伝わって魔術師は集中力が欠けてしまうのだと、カームリから聞いた。
残された馬を、あとから着いたたいまつを持った親衛隊が引っ張って迷惑のかからない所に連れて行く。　周りにいたのは魔術師ばかりだったのであっという間に馬に乗っているのはリーナスとカームリのペアだけになってしまった。
「リーナス。その子はおとなしいのでたぶん大丈夫だと思いますが危なくなったら降りて下さい。
……あとは、頼みましたわ」
カームリも、リーナスに静かに声をかけて、さっそうと鞍を降りた。おっとりした見た目を裏切る素早い動きでリーナスは思わず目を見張ってしまったほどだ。
けれど、カームリからにじみでる焦りや不安は濃く、カームリにまとわりつく。それはリーナスも。この場にいる誰もがそうだろう。今までに無い未曾有の危機に王都は、自分たちは見舞われているのだ。
自分たちがもし失敗したら。それは誰もが思わず考えてしまうことだろう。そう考えてしまって怖くなった人もこの中には必ずいるはずだ。
ただ、この部隊の心を一つにしているのはひとえにエルの存在が大きいからだろう。まだ親衛隊としても、ラーナリアン人としても日が浅いリーナスだが、部隊全体が、エルに全幅の信頼をおいていることはよく分かる。彼等がエルに向ける目は決して副長という地位に対しての妬みや羨みでは無い。彼等がエルに向ける目には自分たちの指揮官に命を捧げる、そんな決意の色が濃く現れていた。
部下に命を捧げる覚悟をさせるほど、エルという人物は、リーナスが想像する以上に偉大なのだろう。
きっとカームリも、自分の命を捧げる覚悟が出来ている。あの顔つきでよく分かる。いつもはおっとりしたカームリが去り際に見せたあの顔。

それならリーナスもその覚悟を見せてやる。エスライ・ミスラーネの娘、リーナス・ミスラーネの覚悟を。大きく息を吸い込んでお腹いっぱいにため込む。そして大音量の声と共に吐き出した。

「カームリ！！　頑張って！！」

駆けていたカームリは驚いたように目を大きく見開いてこちらを振り返った。

リーナスは体全体を使って馬上で大きく手を振った。カームリはそのリーナスを見て少し緊張がほぐれたのかいつもの優しい笑みを浮かべて振り返してくれた。

そしてまた前を向いて駆けていく。ピンク色の後ろ姿が漆黒の闇の中に囲まれ、見えなくなっていくまで、リーナスはカームリを見守っていた。

リーナスたち親衛隊と、第一魔術師部隊の合同部隊は夜通し馬を走らせデヴァ山までやってきた。

今は日付が変わるくらいの時刻だろう。

ここ山の麓。火元にできるだけ近づきたかったのだが、山はもうほとんどが燃えており、中に入るのは危険だということと、撤退の時の事を考え、ここで作戦が決行されることになった。

作戦は、まず火を消すことが最優先で行われる。魔術を代わりばんこで撃っていき、流れ作業で火を消そうとしているのだ。

リーナスたち親衛隊は魔術師の護衛。魔術師の中でも水魔術を使えない人々と共に魔物の討伐にあたる。ここは昔から魔物が多く住むと言われているらしいので、どんな大きさの魔物が現れるのか見当もつかないと、こわばった顔でカームリが言っていた。

気を引き締めて、見よう見まねで馬をかり、他の親衛隊の人々たちと同じように魔術師たちを護るために最前列に並んだ。

全部の隊が並んでしまうと話し声は一切無く、誰かの息の音まで聞こえてきそうなほど静かだった
目の前では『敵』である黒い炎が大きな舌で山をなめ回している。木々が舌になめりとられ、炎の大きな口に飲み込まれていく。
夜の漆黒の闇に浮かび上がる赤黒い炎。それは大自然の摂理には存在しないものであるためにひどく不自然に浮かび上がっていた。
その炎を見ると思わず身震いしてしまう。どこか冷徹で非情な所が、誰かに似ていると思ってしまった。あの孤高の姫君はどうしているかと美女に思いを巡らせる。
その姫君がこの炎を起こしているのだとは、これっぽっちも考えてはいないリーナスであった。

「皆、先頭配置に付け！　俺の合図で詠唱を開始し魔術を撃て。大丈夫だ、俺たちは出来る！
それに、隊長は俺たちを見捨てない！　すぐに応援を呼んで下さる！！
それまで、俺たちに出来る精一杯の事をしようでは無いか！王都を、故郷を、愛する人を護る為に！」
エルがそう言って長剣を漆黒の空に向かって突き出す。
「「王都を、故郷を、愛する人を護るために！！」」
今度も、部隊全体が声を張り上げた。精一杯声を上げることで体の緊張がほぐれるのを知っていたのでリーナスは声が枯れるぐらい叫んだ。周りの人々も修羅場をくぐり抜けた強者がそろっているのだろう。
皆それを知っているのか男らしいドスのきいた声で叫んでいた。
叫んだ事で、部隊も、リーナスも少し落ち着いたような気がする。焦りと不安の感情が大幅に減った。それでも無くなってはいないが。

痛いほどの静けさの中で皆が意識を極限まで高めたその時、
「みんな……行くぞ。三、二、一。詠唱、開始！！」
エルの号令が聞こえると共に先頭の魔術師部隊が一斉に詠唱を始めた。列ごとが一つのグループのようになっており、その列全員がぴたりと同じ呪文を唱えていく。
リーナスには理解出来ない呪文なのでルーンでの詠唱なのだろう。ルーンを使っての詠唱は時間がかかる分威力が高くなるというものだと、ヘスターから教わった。
そして二列目も、三列目も同じように詠唱を開始する。
三列目が詠唱を始めるのと同じぐらいの時に一列目の詠唱が終わり大きな水球が黒い炎の上に降った。
水はそのままの形を保ったまま炎の上に落ち、炎に当たった瞬間球体から液体に変わって真ん中から分裂した。ジューという水が蒸発した音が響き、炎が一瞬小さくなった。
いけるかもと一瞬期待したリーナスだったが黒い炎はとどまることを知らず、逆に盛り上がったような気がした。

「……あ」
お風呂から上がって本を読んでいたイージュはいきなり声を上げた。その理由は分かっている。イージュの作りだした炎を誰かが消そうとしているのだ。
それもそのはず、イージュが魔術で燃やそうとした山はこの国の王都に近い。きっと軍が動いたのだろう。それが普通だとは思うが、主と言えば読みかけの本を放棄し、バルコニーに走り去る。
やれやれと思いながらミディアはイージュを追った。主の突拍子も無い行動にはもう慣れた。

「……百に満たない魔術師で、私に勝てると思っているのかしら？
それこそ無謀だわね。
指揮官も、私が飽きるのを待っていたほうが得策だったのに。そしたら無駄な命を散らせなくても良かったのに。残念だわ」
凍てつく微笑みを浮かべて呪文を唱えようとする主の手をつかんで慌てて止めさせる。
「……イージュ様！」
呪文を唱える寸前だったイージュが驚いた顔でミディアを見つめる。
（危なかった……）
これだとミディアが止めなかったらこの王都ごとふっとばしてしまう位の呪文を唱えようとしていたと思う。注意力が散漫していたのが証拠だ。
「何よミディア……。邪魔しないで。せっかく楽しめそうじゃない」
たしかに、イージュはさきほどの機嫌が嘘のように上機嫌だ。けれども、この国の姫君として自国の民を無差別に殺して良いわけでは無い。それではただの殺人鬼の姫君になってしまう。
そうなることはミディアの美意識が許さない。
「……これ以上王都の人々を混乱に陥れるのは、良策では無いかと」
固い声で宣告すると、案の定イージュは不機嫌そうに口をへの字に曲げた。
「王都の奴なんて私には関係無いわ。私に関係ある人物はミディアとあの糞エスライだけ。あいつはもう死んだけど」
これもまた、一国の姫君の言動では無い。見た目と言葉遣いが合っていないこと甚だしい。
「イージュ様、そのような言動は慎んで下さい。イージュ様にも少しは関係があるのですよ。
ここは色々な物品があつまる所ですのでここが焼けたら流通に問題が発生します。
その結果、イージュ様が着ている服も、食べ物も、手に入れにく

くなるのです」
「……。でもね。ミディア、こんな面白い機会もう無いわよ」
強気な顔からとたんに悲しげな顔になったイージュを見て、ミディアはため息をついた。
いつもこういう顔に負けてしまうのだ。
「少しくらいなら……。許可します」
「ありがとう、ミディア。　……さぁ、私の魔術を破って見せなさい？」
意地の悪い笑みを顔全体に浮かべて、イージュは実に楽しそうにつぶやいた。

１３　～悪戯　前編～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
感想など制限無しにしていますので良かったら気軽にどうぞ。

14　～悪戯　後編～

少し消えてきたと思われた炎がまた燃え上がった。固唾を飲んで見守っていた親衛隊や魔術師たちからは思わず落胆の声が漏れる。リーナスもまた、落胆のため息をついた。

（あともうちょっとなんだけどなぁ……）

一度消えかかったと思われた炎はむしろ最初よりも燃え上がっているような気がする。このままでは炎がこちらに迫るのも時間の問題だ。

しかし、最初と比べると炎が燃え広がるスピードは格段に遅くなった。炎だけで無く近くの木々にも放水しているのが効いたのだろう。

「皆良く聞け！　消えない炎は無い！　我らならできる！」

エルの叱声が響き、その声に意気消沈していた魔術師たちが一斉におおーと声を上げた。親衛隊員もそんな魔術師達を護るために剣を振り上げてそれに応えた。

その時。

リーナスたちの所へ招かれざる客が来た。

――狼だ。

リーナスは故郷ダングルで町に降りてきた時に一度だけ見たことがあるのでそれほど驚きもしなかったが、ラーナリアン人である他の親衛隊員は見たことがないのだろう。一瞬どよめいた。

毛並みが悪くがりがりで、目だけが異様に鋭く、狂っているような赤い瞳は焦点があっていない。狂気にとらわれているような目つきが一番親衛隊員の恐怖をあおったのだろう。夜の闇の中で赤い瞳だけがやけに目につく。一度見た事があるリーナスでもその目を見たとたん背筋が凍った。

それでも、すぐに恐怖から立ち直ったのはさすが親衛隊だ。

狼がそのまま驚くほどのスピードでリーナスたちに近づく。リーナスは本能的に馬から降り、剣を構えた。その他の人々も少し緊張した面持ちで武器を構え、必死に戦う魔術師たちを護るための壁になる。

狼は、馬から降りたリーナスを格好の餌食にしようと思ったのかスピードを付けてリーナスに襲いかかってきた。

鋭い牙がリーナスののど笛を正確に捕らえ、迫ってくる。リーナスはほとんど考える間も無く、剣を振り上げ狼を斬り捨てた。ギャオンという断末魔の叫び声を上げて狼は絶命する。

あっけない終わりだったにもかかわらず斬り捨てた後も目だけはこちらをにらんでいた。そしてまだ足はぴくぴくと痙攣している。

狼の血は夜の闇に紛れて見えなかったが、斬った時にリーナスにも返り血がかかったのはよく分かった。

「おめでとう、新入りさん」

隣にいた知らない親衛隊員から肩を叩かれた。まだ若々しい声だ。相手はヘルムをかぶっているので良く顔が見えない。ただ、男としては少し小柄な方なのに大きな戦鎌を持っているのが印象深い。

「ありがとう……ございます」

まだ実感が湧かずにぼうっと答える。

（あたしが、みんなを、少しでもみんなを護れたんだ……）

そう考える事にするがどうしても実感が湧かない。ただ、狼を斬ったのだと、それしか分からない。

その時、狼たちの遠吠えが聞こえてきた。その声はリーナスに倒された狼を弔っているような声音だった。かなりの数だと思わせる遠吠えの大きさ。

その声に物思いから現実にかえったリーナスは知らず知らずのうち剣を構えていた。

「来た」
しばらくすると隣の親衛隊員がそうつぶやいた。リーナスにはまだ見えないが、隣の男には分かっているのだろう。
そうつぶやいた直後。木々の合間をぬって大小様々な大きさの狼たちがリーナスたちに向かって来ていた。
狼は普段群れない動物だ。それが群れるなんて、今回の事件が狼たちにも緊急事態だったのだろう。狼たちにとってもここを突破出来なければ一匹残らず死ぬ。命をかけた戦いだ。
「俺たち、ペアになんない？　どっちかが危険になったら助けてちょうだい」
隣の男がリーナスに向けてつぶやいた。その言葉に大きく頷く。
こういう混戦になりそうな時は助け合うのが一番だ。リーナスに合わせたのか他の親衛隊員もいつのまにか馬を下りていた。

一匹目が向かってくる。リーナスはその狼が牙をつきだした瞬間に首を一刀両断した。頭が転がりうらめしそうにリーナスをにらむ。
けれどリーナスはそれを無視して二匹目を斬りつけた。二匹目も断末魔の叫びを上げて絶命していった。
ふと隣の男を見ると大きな鎌を自由自在に操っていた。男の間合いに入った瞬間に面白いほどやすやすと狼が絶命していく。
（これじゃあたしが助けられるほうじゃん）
少し安心して自分に専念する。無駄に動き回らず間合いに入ったその瞬間に一気にかたを付ける。

狼の襲撃は斬っても斬っても止まない。ただ、毎日素振りだけはヘスターにかなり特訓させられたので疲労は感じない。他の親衛隊員もその名に恥じないすばらしい働きをしている。
中でもエルの動きは圧巻である。狼を斬りつけながら呪文を詠唱している。それでもその他の魔術師よりも魔術の威力は高い。

（やっぱりすごい……！）
こんな人に自分が勝てる訳が無かったなと今更のように思う。戦士としての実力も、精神面でも、リーナスがエルに勝てる要素は無い。それに、魔術が使えないリーナスはやはりエルと比べると劣ってしまう。
（あたしにも魔術つかえればなぁ……）
魔術のほうかからっきしでどんなに練習しても出来なかった。魔術というものは才能が無ければどんなに練習したって無理なのだ。
そんなもどかしさを向かって来た狼で発散する。
「はぁっ！」
大きな声もプラスされたのでストレス発散効果も上がった。
ここで辺りを見渡すとかなり狼の数が減った。最初の四分の一くらいだろうか。親衛隊の壁の前には絶命した狼たちの無惨な死体が積み上がっている。少し胸が傷んだがぐっと歯を食いしばった。
（ここであたしが殺らなきゃ、みんなに迷惑がかかるんだ）
狼にだって守りたいものがあるようにリーナスにだって守りたいものがある。そのためには少しの犠牲も覚悟しなくてはならない。
それが戦場での掟。これを破ったものは死ぬ。滅多に家に帰ってこないエスライが最後に会った時に言っていた言葉。
今思えば、それはいくつもの戦場を生き抜いてきたエスライの失敗を繰り返さないようにと言うことも含めて言っていたのだと思う。
母ヨーリヤは、エスライは妹を護れなかったと言っていた。
誰かを護るためには何かを犠牲にするしかないのだろうか。エスライは犠牲にすることが出来なかったことで妹を護れなかった。誰も犠牲にしたくない。なんて所詮夢物語でしか無いことは重々承知している。ただ、そんな世界にするために少しでも努力するのは悪いことなのだろうか。
「ここはもう良いみたいだから魔術師たちの様子、見てきてくれな

い？」
意識が奥底に沈んでいたとき、隣の男に肩を叩いて声をかけられた。
「は、はいっ！」
返事をして駆け出し、もうなじみの顔となったカームリの姿を探す。幸い、ピンクのローブは見付けやすく、すぐに見つかった。
「カームリ！　大丈夫！？」
「リーナス……。大丈夫とは言えないですわ。魔術師たちはもう少しで魔力が切れるそうなのです……。
もう魔力が無くなってしまった人もたくさんいて危ない状態です」
そう言うカームリの顔色も悪い。その他の周りの人はもっとだ。
「エルさんに伝えてくれませんか？　ここは複合詠唱をしたほうが良いと思います。と」
「分かった」
複合詠唱が何かを聞きたかったがカームリの顔色を見て断念した。これは一刻を争う。
元々白いカームリの顔だが、さらに白く、青白くなっており目の下には真っ黒のクマができていた。
リーナスは青白い顔に宿すカームリの決意の色を見てエルの元へ一目さんに走った。
「副長！　カームリが複合詠唱したほうが良いと思います。と言っていました」
転がり込むように駆け寄り、かみつくように言った。
誰よりも魔術を行使しているはずのエルだが、ここにいる誰よりも顔色が良かった。
「カームリもそう考えたか。しかし、複合詠唱は威力が高まる分。消費魔力も多い。
疲労が蓄積している今の状態では自分で魔力の調整が出来なくなって
自分の残っている魔力も全て使って倒れてしまう恐れがある」

そう言ってエルは考え込んだ。近くにあるたいまつの火がゆらゆらとエルの顔を照らした。
リーナスには何も言えない。リーナスは魔術に関しては疎いし、ここで何か発言して隊のみんなを危険に追い込みたくは無い。エルはそのまま俯いて考えにふけっている。

しばらく時間をおいて、顔を上げたエルの瞳には強い決意の色が現れていた。
「全軍、攻撃停止！！」
魔術師たちは何事かと互いに顔を見合わせた。
「魔術師隊は複合詠唱を実施する！　耐えられないと思われる奴は外れろ！」
その声を聞いて魔術師たちはそれを待っていましたと言わんばかりに満面に気色を浮かべた。
「威力を高めるためルーンを唱える！　3。2、1で行くぞ！」
魔術師たちは一斉に精神を統一させるかのように目をつぶる。目にはみえない力の波動が高まり、漂ってくるのをリーナスは感じた。
「……3、2、1！！」
エルの声と共に、魔術師たちが一斉にリーナスには訳の分からない呪文を唱え始めた。
一糸の乱れも無く、全員がぴたりと正確に言葉を紡ぎ出していく。
最後の言葉が吐き出されるのと共に上空に大きな水の球体が現れた。それは最初一つだったものがどんどんふえて、最後には大きな球体が十個ほどできた。
「ハューテイガ・ブティラオス！！」
全員の大きな声が響き渡り、大きな球体たちは炎に向かって怒濤の勢いで落ちていく。
激しい水しぶきが起こりここまでかかるぐらいだ。それからも十個が代わりばんこに激しい水音をあげて落ちていく。水が蒸発する

音もかなり大きい。
これはいけるのではないかと、その場にいた全員が期待した。
大きかった炎は最後の一個を残して最初からは想像が出来ないくらい小さくなった。
あと一つの水球が大きな水音を立てて炎にたたきつけられる。また蒸発音がおこり白い煙が辺りを覆った。
（お願い……！！）
リーナスは祈った。思わず目をつぶってしまう。
蒸発音が消えたその時、おそるおそるまぶたを開く。

そこにあったのは弱々しいがまだ残ってる炎。

皆口にはしなかったがかなりの落胆ぶりだった。誰も何一つ話さない。力尽きたのか座り込んだ者もいる。リーナスも思わずへたり込みそうになった。

その時だった。
「水よ！！　荒れ狂う水神となり悪しき炎を消し去り給え！！」
ひときわ大きい呪文の詠唱が聞こえた。
前の方向から大きな咆吼が聞こえて思わず前を見ると魔術で作り出した水竜が現れ、炎を飲み込もうそとしていた。
夜の闇の中で水竜は銀色にきらきらと光輝いている。
その場にいる全員が固唾をのんで見守るなか、炎は竜に食べられるように見えた。
竜の中に入った炎はまた燃え上がろうとしたが竜の力には勝てないようで大きな蒸発音を響かせて消えた。

その瞬間皆の歓喜の声が響いた。
疲れ切ったものも例外では無く、その場にいる全員が大きな、大きな歓喜の声を上げた。
その場を揺るがすような大歓声の中、黒毛の馬に騎乗し、駆けてきた者がいた。
親衛隊の鎧だ。エルの隣、リーナスにとエルの間に割り込んで来る。皆は大歓声でその人物を温かく迎え入れた。その人物はエルの肩をねぎらうように叩き（エルは苦笑している）、皆の方に向き直った。
そしてもったいぶったように親衛隊のヘルムを脱いだ。その瞬間割れんばかりの拍手と歓声。リーナスがその人物を見ると……。

そこにいたのは、親衛隊隊長、ダグネスだった。

１４　～悪戯　後編～（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

15　～傷跡～

（――私の炎が、消えた）
イージュはそれを信じられない思いで悟った。
「私が、負けた……？」
呆然とつぶやく。
（ありえない。いくら本気を出していないにしてもこの私が負けるはずが無い。私はこの世界で最強なはず。魔術だけは、魔術だけは誰にも……！）
私は……。私は……！
暴走してしまいそうなのを意識の力を最大限使い、深呼吸をして抑える。さっき大きな魔術を使ったばかりなので今回ばかりはなりふり構わず魔術を使えば死の恐れもある。
誰にも必要とされていない自分でも、今はやらなくてはいけないこと、使命があるのだ。

深呼吸をしばらくしているとだんだんと落ち着いてきた。
いつもの自分、機嫌が良いときの自分に戻れたと思った所でミディアを静かに呼ぶ。
「……ミディア」
「はい。お呼びですか？」
静かに隣にたったミディアは心配そうに自分を見守る。
イージュが自分を律することなどあり得ないなどと思っているのだろう。
「……術者を捜して」
「はい、了解です。……始末、しておきますか？」
やはり精霊という関係上、話が早い。
「いいえ。始末したいのはやまやまなんだけどね。

私、そいつに興味が湧いたわ。……そうね、ここに連れてきてくれないかしら？

あ、失礼な事はしないで。ちゃんと礼儀正しくするの。もし相手がかなりの術者だったらミディアから私の居場所を特定されてしまうかも。もし危なかったら早く逃げなさい」

「大丈夫です。私でもきちんと引き際は心得ているつもりです」

微笑してミディアが答える。

「イージュ様も、どうかお気を付けて。……では、私はここで。失礼します」

イージュが優雅にお辞儀をして消えると、辺りに紫色のオーラが飛び散った。

精霊の特権であるいつでもどこでも出来る転移だ。

普通の人間で転移の魔術が使える人は少ない。なぜなら、転移の魔術は最高位魔術。全種族の精霊と契約した最高位魔術師で無いと使うことが出来ないのだ。

弱い精霊が年々減少している今、この世界に残っているのはある程度は強い精霊だ。精霊は契約者の魔力と自分の魔力を比較し、自分より上なら契約する。

なので全種族の精霊と契約することが出来たということはかなり魔力が強いということに繋がるのである。

（……あの術者は使えるのかしら？）

あの術者とはもちろん自分の魔術を破った魔術師のことだ。ふとそんなことを考える。イージュを破れるくらいの魔力を持っていれば最高術者だろう。

イージュとイージュの炎を消した犯人の魔力同士がぶつかり合ったとき、犯人は、どこか寂しげな魔力の波動を持っていた。イージュと同じように。

小さいながらに世界というものの非情さを知ってしまった。魔力で見る限り、男だと思われる犯人の魔力からはそんな諦めがにじみ出ていた。

（結局は……。強い魔力は苦労したものしか手に入らないということね……）

魔力は、上手に使えば術者の得になる。しかし、使い方をイージュのように誤れば、仇となる。

そして、強い魔力を持つ者には不幸がつきまとう。

今はいないエスライも、不幸に一生つきまとわれた内の一人である。エスライの場合、最期は自ら不幸を選んだような気がするのはイージュだけだろうか。

『今度邪魔立てしたら許さないから』と宣告したあの娘はあのくだらない父親をどう思っているのだろうか。自分達を捨てて、不幸を選んだのだとしたら、どんな顔をするのだろう。

（――けれど。あの娘には、家族がいる。母がいる。友も、いるのだろう）

どんなに辛くても、あの娘はイージュのように絶望しないだろう。前を向いて生きていける力をあの娘は持っている。

自分が持つことを許されなかった一切の者をあの娘は全て持っている。

（私が、どんなにあの娘のような生活に惹かれていたか、知らないでしょう？）

どんなに泣いても、叫んでも、何をしても手に入れられないもの。

それがどんなに。どんなに欲しかったか。

幸せな生活をしていた、あの娘も、この世の誰もイージュの心の叫びなど、知るはずがない。

欲しい、欲しいと願って。日にちが経つたびに、自分のことを迎えに来てくれない両親の事を考えて。
自分を殺したがっていることを信じたくなかった。けれど悟ってしまって。
それでもいつか迎えに来てくれるのだと、そう信じて。そしてまた裏切られて。

（私がどんなに苦しかったか、知る人はどこを探してもいない）

そう思ってしまうほど、今では卑屈な自分になった。

いつからだろう。この世を、壊したいほど憎むようになったのは。
いつからだったか、正確には思い出すことが出来ないほど昔から、この世を壊したいと願っていた。
どうして私は生まれてきたのだろう。暗い部屋で、ずっとずっとそんなことを考えていた。

「死にたい」

そう初めて口にした時の、ミディアの顔を今でもはっきりと覚えている。
闇の精霊らしい、紅の綺麗な瞳を大きく見開いて。そして透明な涙がみるみるうちに盛り上がって。
端麗な顔がくしゃりとゆがんで、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

それが引き金だったのだろうか。
自分のせいでミディアを泣かせてしまったことがかなりショックだった。

ミディアが悲しむとは思うけれど、自分なんて生まれてこなくて良かったのだと思った。
この世からイージュの存在など消えてしまえば良いと思った。
――なぜ、死にたいと思ったイージュが生きて、生きたいと願う人々が死に逝くのだろう。
不条理ではないか。
どんなに働いても働いてもお金がなくて。ついには食べ物もなくなって死んでしまう人もいる。
それなのに、部下にやることは任せ、自分は玉座でふんぞり返っている王である父親もいる。
不条理ではないのか。

だから、イージュは腐りきったこの世界を壊すのだ。
イージュはこの不条理な世界を変えてみたいのだ。この世界そのものを全て無くして、一からやり直したら、神はどんな世界を作るのだろう。
そこはきっとイージュのようなはみ出し者が一人もいない世界なのだろう。
イージュは神の失敗作なのだから。この世界は神の失敗作なのだから。
(だから……。もうこんな思いをする人を作ってはいけない)
誰からも必要とされていない。そう言って泣く。そんなイージュのような人物を作ってはいけない。
(だから……。だから私はこの世界を壊してやり直す。
そうしたら、私みたいな少女はもういないでしょう?
神よ。もう失敗なんて……失敗なんて、しないでしょう?
私は。この世界を壊す。一つ残らず破壊しつくしてやる)

……誰も恨まないわよね？

……誰も、私の事恨まないでしょう？

だって、これは正しいことなのだから。最後には、皆が救われる

ただ一つの道なのだから。

15　～傷跡～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
今回、暗い話ですみません。

16　～凱旋～

「隊長！　ダグネス隊長ばんざーい！！」
割れんばかりの隊長を称える声。その場にいる全員が口々に隊長を、そして皆の労をねぎらう。リーナスもその中に混じって負けじと声を張り上げた。
「おう！　みんな、良くやってくれた！　俺一人が炎を消したのでは無い。みんなの努力があったからだ」
ダグネスの言葉に部隊はまた沸き立つ。
涙を流しているものや知り合い同士で誰かを胴上げをしているものもいる。
祭りのような興奮の中に入れず、リーナスはそっと輪の中から外れた。
カームリの姿を探すも、めまぐるしく動く人の中では見つけることが出来ずに肩を落とす。友を呼べる人物がカームリしかいない今、リーナスはこのまま黙って見ているしかない。
そのままぼんやりと人々を見つめる。
（あたしも、入れたらなぁ……）
惨めな感情がぼうっと胸の中に浮かんで、消えることはなくどんどん増え続ける。
（あたしは……はみ出し者なのかな）
そうではない。そう心の中にいるもう一人の自分が声を張り上げる。そうではない。自分でも分かっているはずなのにそう考えずにはいられない。
リーナスはそのまま、惨めな気持ちを抱えながら、人々を見つめていた。
輪の中では、お祭り騒ぎがようやく終末をむかえようとしていた。
「さぁ、お前達が守った王都へ帰ろう」

ダグネスは歓声の中から声を張り上げ、エルがまだ興奮冷め切らぬ部隊全員をゆっくりと誘導していく。
親衛隊員も、魔術師も、良かったという安堵の表情で馬をかり愛する人の待つ王都へ帰る。
――自分達の守った王都へ。

「リーナス！良かったですわね」
近づいてきたカームリがリーナスに声をかける。カームリは大輪の花が咲くような笑みを浮かべていた。
「カームリも、すごかったよ」
ぎこちなく笑って返す。
「隊長の言葉ではないですが、みなさんのおかげだと思いますわ」
カームリが、ほんのりと顔を赤くして答えた。
「うわぁ、すごい謙虚な。ここはもう、わたくしの努力の結果ですわ。なんて言っちゃえば良いのに」
こういう時に素直に喜べない自分が嫌で、わざとおどけてカームリの声まねをしてみせる。
「違う。カームリはそんな下品な声してないから」
その時、二人の話に割り込んできた者がいた。そしてそのままカームリの肩に手をかける。
「フィリアス！！　あなたもこの戦いに加わってたのですか？　ダグネス隊長と王都にいると
おっしゃっていたではありませんか」
カームリが驚きの声を上げる。
リーナスも驚きだった。声をかけたのは先ほどリーナスの隣にいた人物。戦鎌を持っていた人である。
ただ、もっと驚きだったのはその男がヘルムを脱いだ、その素顔だった。

カームリと良く似た金髪は短くカットされており、同じく似ている碧色の瞳は男子にもかかわらず大きくぱっちりしている。
カームリと本当によく似た顔立ちだが、カームリとは違い悪戯っぽい光を瞳に宿している。
女顔だということをのぞいてもかなりの二枚目である。想像だが、髪を肩につくぐらいまで伸ばせば、中性的な美貌が姿を現すのではないだろうか。
この顔でも一瞬言葉に詰まったくらいだから、髪を伸ばせばたぶん絶句する。今までにかなりの女の子が惑わされただろう、さわやかな笑顔。リーナスには通用しないが。
「あ、カームリのお兄さん……？」
半信半疑で問いかけると、その人物はにっこりと微笑んだ。
「そ、俺はカームリの双子の兄、フィリアスで～す！　同じ親衛隊員だから、なんかあったら聞いて」
ちらりと見せられる白い歯。甘いマスクに普通の女の子ならノックアウトされる所である。
リーナスは、ヘスターという二枚目がすぐ傍に居て、ヘスターに焦がれた女の子達の末路を知っているのだ。こういう整った顔立ちの人には気を付けろと体中が叫んでいる。
「よろしく……」
控えめに挨拶をする。カームリと同い年だから敬語は無しだ。
「あ、リーナスちょっと警戒してる？　大丈夫、俺は見た目通りの軽い男じゃないから」
フィリアスがそう言ってまた笑う。年上に『リーナス』なんて慣れ慣れしいんじゃボケと言いそうになるのを苦労して我慢した。
仮にも友達の兄。そして同じ親衛隊員なので暴言を吐くのは止めよう。
「フィリアス、あなた、わたくしに嘘をついた件に関してはどうするおつもり？」
カームリが、普段とは違う少しすねたような顔でフィリアスにつ

っかかる。
双子とはいえども、男女の差があるので少し背の高いフィリアスがカームリの頭をなでた。
「本当は王都にいないといけないんだけど、やっぱカームリが心配でさ。
隊長に懇願してぎりぎりでこっちに配属されたんだ。だから知らせる時間無くて」
リーナスに見せたのとは違う優しい笑み。
心の奥底からカームリの事を大切にしているのがよく分かった。
これが兄弟愛というものか。
「まぁ、フィリアスってば」
そう言ってからからと軽快に笑うカームリ。
「……お怪我はありませんか？」
「大丈夫！　元気いっぱいだよ。カームリも、大丈夫か？」
「えぇ、わたくしはフィリアスが無事でいてくれれば大丈夫です。
それだけでわたくしは生きていけるのですから」
二人のまわりにはバラの花が咲いているようにも見える。それほど絵にはなっている。なっているのだが……。

（……なに、このベタ甘トーク）
無意識に顔が引きつって、苦笑いが止まらない。
周りから見れば美しい兄弟愛が違う方向に行ってしまっていると疑われそうだ。
「ごほん」
わざとらしくならないようにせきをする。
カームリが心配そうに、フィリアスが邪魔すんじゃねーよといったようににらんだ。
「あの、カームリ帰らない？　みんなもう居なくなっちゃったし」
あたりにはぽつりぽつりといったふうにしか人がいなくなってしまった。

「そうですわね。では、フィリアス、王城でまた会いましょう？」
「え？　いっしょに帰らないのか？」
フィリアスがきょとんと目を丸くした。
カームリがにっこり微笑む。その姿は、天使というより小悪魔にも見えなくない。
「今日はリーナスと相乗りするんですの」
フィリアスがリーナスに向ける目がいっそう厳しくなった。
「ふ、ふーん……。じゃ、じゃあ王城でまた会おうな」
そう言って手を振って近くにいた馬に飛び乗って駆けだしていった。
「わたくしたちも、帰りましょうか」
カームリが微笑んでリーナスの手をぎゅっと握った。

最後となってしまった男が馬に飛び乗ろうとしたその時。
「ごめんなさい」
耳元で女の声が聞こえた。その刹那、閃いた刃と殺気。
体に激痛が走り男はその場に崩れ落ちた。零れていく命。それを全身で感じる。
今まで鍛錬してきた剣術を使う時間すらなかった。これから帰る所だったし油断していたなんて言い訳は通用しない。
男は強く唇を噛んだ。襲撃者の顔は、見えない。

（俺は……ここで死ぬのか）
親衛隊まで上り詰めた。家族もいる。王都も守った。命がけで民を守った。
それなのに、ここで死んでしまうのか。
（あぁ、意識が……。消えてしまう。死に……たく……な……い……）
男が最期に見たのは黒い髪と、紅の瞳を持った美しい少女だった。
その手には男の血に紅く染まったナイフ。
「安らかに、眠りなさい」

「あぁ……失敗したかしら」
ミディアは今し方、自分が殺した男の亡骸を見つめていた。
若い男の亡骸を探したのでまぁ背丈は自分と同じぐらいだろう。
しかし、ナイフで刺したおかげで血がべったりとこびりついて服の模様が分からなくなっていた。
これからミディアはこの男になりすまして親衛隊に潜り込もうと思っている。そのためには『変化』の術を細部までかけなければいけないのだ。

「……」
しくじった自分をなじりながら、黙ったまま自身に術をかけていく。精霊とはいえ女なので男に変化するのは抵抗がある。
（気持ち悪……）
女の人にすれば良かったか。しかしミディアがここに転移してきたときにはもういなくなっていた。
転移とは、一瞬でその場にいけるわけではないのだ。どうしても空間を移動する時間がかかってしまう。
ため息をついて術を、二重にも、三重にもかけていく。念には念を、だ。

どこからどう見ても完璧にその男に変わったところで、男に手をかざした。
黒い闇が男を覆い、そして見えなくなる。
「あなたの記憶……。私が貰う」
死んだ直後の死人にはまだ記憶が残っていることが多い。少し後ろめたいがこれも任務のため。
黒い闇が晴れると、ミディアの頭の中には新たな記憶が存在していた。準備はこれで完了だ。

「さ、行きますか」

主の命のままに。己の望むままに。

16　～凱旋～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

17　～招待～

「カームリ……。隊長って、あたしの存在忘れてないよね……？」
リーナスはベットの上で寝っ転がりながら、げんなりとカームリに尋ねた。
カームリは、仕事にいくために、あわただしく準備をしている最中だったので少し不満そうな声で答える。
「それはないと思いますわ。あのずぼらな隊長でも、それを忘れるはずがありません。
それに、エルさんもいることですし」
部下にずぼらだとか言われてる時点で可哀想だ。それでもかなり信頼されているのはそんなところに共感を得られているからなのか？それともやはり実力が認められているからなのだろうか。
「そうだといいけど……」
リーナスはカームリの、「暇ならお部屋の掃除して下さい」という声を聞こえないふりをして、ベットの上で大きく背伸びをした。
――掃除は、嫌いだ。

あの大騒動があってから、早一週間が過ぎようとしていた。急遽結成された親衛隊と魔術師隊の混合部隊のおかげで大惨事は免れたものの、まだまだ復興には時間がかかりそうだ。
その対応で今頃は国の偉い人たちが大忙しらしい。
カームリたちは通常通りの仕事に戻っているが、リーナスの所にはあれから一回もそういう依頼が来ていなかった。
へなちょこリーナスでも、一応は親衛隊なので、そろそろ本職である要人の護衛ぐらいさせてくれたって良いと思うのだが……。隊長の考えていることはよく分からない。

暇人となったリーナスは、ここのところ、いつも中庭で訓練をしている。あそこに行けば必ずといっていいほど休みの親衛隊員がいるので、その人に相手をしてもらうのだ。
やはり親衛隊員は強かった。リーナスの方も負けてはいないつもりだが、相手の方も小娘に負けるなどプライドが勝たないのか、本気になってやってくる。
そうなると当然挑発に乗りやすいリーナスも本気となり、流血沙汰になったことも一度や二度ではない。
絶対に治療役のカームリに手当をして貰えるわけではないので、城の治療師達に手当をしてもらっている。一日に何回も行くので治療師たちに顔を覚えられてしまった。そしてリーナスが行くとくすくす笑い声が起こる始末だ。こんどからは気を付けようと思うのだが自分でもストッパーが聞かない。
（今日は、今日こそは気を付けよう。自分の名誉を守るために！！）

訓練を続けていて分かったのだが、やはりエルは格が違う。自分でも良く怪我なんて負わせることができたなと思う。
まぁ、そのときは生活がかかっていたから想像以上の力が出たのだろう。人間、窮地に陥ったときが一番力の発揮できる所だという。

（――それにしてもこのほったらかしはひどい）
訓練も楽しいがそれはそれで結構飽きてきてしまったので、今日もお呼びがなければ少し城の中を散策することにしよう。まぁ、城の中もリーナスのような下っ端がいけるところは限られているらしいが。
それでもこれからの仕事で少しは役に立つだろう。要人でも、きっとリーナス達が歩くような汚い道もお忍びで通ったりすることあるだろう。……きっと。
無意味……ではない。絶対に。

「カームリ。仕事、頑張ってね」
部屋から出て行くそぶりを見せたカームリに、そう声をかけると、カームリはかなり複雑そうな顔をしていた。
「……隊長も、忘れたわけではないと思いますわ、リーナス。だからいつお呼びがかかってもいいようにこの部屋で待ってたほうが良いのではありませんか？……掃除などして」
「どうせこないよ。来るとしても火急の用事じゃないと思うから大丈夫」
（それに掃除めんどくさいし）
心に秘めた思いは口に出さずに、そう言ってニカっと笑って見せるとカームリはまだ少し心配そうな顔をしていたが「行ってきますわ」と声をかけて行ってしまった。

リーナスしかいない部屋の中は物音もなにも聞こえなかった。ここは城の中心からかなり離れているので誰かの話し声もなにも聞こえない。ただただむなしいだけだ。
だからって掃除もやる気が起きないし。
ここで瞑想をしたらお偉い神官さんなんかは気持ちが落ち着くと思う。
何もないときでも剣の手入れだけは怠るなとエスライやヘスターに口が酸っぱくなるまで言われていたので一回手入れをしてから行くことにしよう。
手入れをするのは掃除と違って意外と好きだ。無心になれるし、すこしだけ強くなれる気がする。

「よ、っと」
ある程度時間が経ってから、重たくなった腰を上げる。

（うん、完璧）
昨日の訓練相手（名前は忘れた）は力で押してくる傾向があったので刃こぼれしていないか心配だったのだけど心配するほどでもなかった。
やはりさすがエスライのくれた剣。やはり宰相だったこともあってこの剣にもかなり金がかかっているのだろう。
それにしても、この剣が無事で良かった。
そんなルンルン気分のまま部屋を出て鍵を閉める。カームリに口うるさく鍵を閉めたか聞かれるのでこの頃はちゃんと閉めている。
（あたし達の部屋に入ってもいいものないじゃん）
とは思うのだが、カームリがどうしてもというのでカームリの意見に合わせた形だ。

人っ子一人いない廊下を抜けて吹き抜けの渡り廊下を通りかかった。
ここから中庭が見えるのだ。
（今日は誰がいるのかな～）
そう思って中庭のほうにふっと目を向けた、その時。
「！？」
思わず絶句してしまった。
「た、隊長！？　なんで中庭に？」
そこには、見間違いようもない。あの隊長が立っていた。相変わらず頭は無造作に……いいかえればぼさっとしている。
いくら雑用はエルに任せているとしても、隊長には仕事がたくさんあるはずだ。休みだとしてもこんな所にいるなんておかしい。
首をかしげると、隊長だけではなくてもう一人いることに気付いた。
リーナスはあまり親しくはないが、フィリアスと親しげに話していた若い親衛隊員だ。

立ち話だろうか、男同士、珍しい。
（あたしも隊長と話すっ！！）
内容はもちろんリーナスの仕事の件だ。こんなにほったらかしにするなんてひどすぎる。
あの親衛隊員に話す権利があるのなら、自分にだって、新入りの自分にだってあるはずだ。
リーナスは全速力で中庭に向けて走った。途中で剣の鞘が、何かの花ビンらしきものにぶつかりそうになって冷や汗が出たが最終的には大丈夫だったのでセーフだ。

急いで中庭に出ると、二人の話声がぼそぼそと聞こえてきた。
「調子はそうだ？」
「まぁ、良い感じだとは思いますよ」
「お前も、あの火事の現場にいたよな？　なんか、怪我とか大丈夫か？」
「いや、自分は後衛だったのでそんな、怪我もありませんでした」
そこまで聞こえるくらいまで近づくと、ダグネスが振り返って、『しまった』という顔をした。
（……あたしが来ちゃ、駄目だった？）
「……リーナス、来てたのか？」
「はい、隊長が見えたので。お聞きしたいことがあるんですが」
意図して固い声を出す。そこまで困っている雰囲気を出すのだ。
「……。あいにく、今はそれどころではないんだ」
「えっ？」
一瞬何を言われたのか、ちんぷんかんぷんだった。しかし、そのすぐ後にようやくその意味を知って頭に血が上るのを感じた。
（あ、頭に来た。試験に合格させておいてそれはなに！？一週間もほったらかしで、あたしが可哀想だと思わないのわけ！？）
思わずくってかかろうとしたその時。それまで黙って見ていた若

い親衛隊員が凍るような微笑を浮かべた。
「隊長。もう逃げられないわ」
その男の唇から紡ぎ出される声は女のもの。背中に悪寒が走り、リーナスは思わず剣を身構えた。
この人は誰だ。この外見通りでは絶対ない。男の声ではない。
（この人、感情が読めない……！）
今、ダグネスから発せられるのは焦り。弱くて先ほどは気付かなかったが今なら分かる。
隊長はこの男の正体に気付き、そしてまさに今、あばこうとしていたのだ。リーナスが来たおかげで予定が狂ってしまったが。
（隊長……。ごめんなさい）
心の中で謝る。

対して、その男から発せられるのは何もない。感情がシャットダウンさせられている。
リーナスの焦りを察したのか、男はまた笑った。
その時。白銀の光が辺りに一瞬にして舞い、リーナスが瞬きをした次の瞬間に立っていたのは少女だった。
漆黒の闇のように黒くて長い髪。鮮血のように紅い瞳は切れ長で少しつり目だ。
着ているのはぴっちりと体にフィットした革のジャケットとパンツ。

「……お前は誰だ？　誰の差し金だ？」
ダグネスが低い声で問う。
「誰の差し金でもないわ。これは我が主の望むこと。すなわち私の望むことだから。
隊長さん。そこの小娘の命が惜しかったら私といっしょにきてもらいましょうか？」
「……いやだと言ったら？」

少女が冷笑を浮かべる。
「もちろん、殺してさしあげます。貴方一人で私の攻撃を防げるかしらね？
イージュ様の炎を消したからって、いい気になってるんじゃないわよ」
少女からはっせられる無言の殺気。
とてもじゃないが勝てない。それどころか指一本でさえも触れることができないだろう。
反抗する態度を見せたら一瞬でリーナスは骸と化す。
剣が手のひらから滑り落ちていった。草の上に乾いた音を立てて落ちていく。

固唾をのんでダグネスの言葉を待つ。それで、リーナスの運命が決まる。
冷たい汗を手にも背中にもかいている。
ダグネスがしっかり顔を上げて言った。

「わかった。行ってやろう」

17　～招待～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

18　～対談　前編～（前書き）

遅くなってすみませんm（　）m

18　～対談　前編～

「さぁ、手を」
少女が、細い手をリーナスとダグネスに差し出した。
（手を……握れと？）
リーナスは、困ってダグネスの方をちらりと見た。
ダグネスはリーナスの視線に気付いたのか、リーナスに向けて小さく頷き、少女の手を握る。リーナスもダグネスに習って、一瞬戸惑ったが少女の手を握った。
――彼女の手は、驚くほどに暖かかった。氷のような微笑を浮かべていた人間とは思えない。
暖かさを感じてどこか拍子抜けしている自分がいる。目の前に立つ少女は、リーナスが感じる限り、『人』ではない。雰囲気からして、ヘスターのような精霊だ。今ではその殺気や感情を露わにしているためそれがすぐに分かった。
ただ、精霊だとしたら誰が、何のために精霊を使ってまでダグネスを連れて行こうとしているのだろう。
（気にくわない……）
リーナスはこっそり唇を噛んだ。
（ホント、気にくわない）
こんな気にくわない少女の言いなりになるしか方法がないというのも。
「行くわよ……！」
少女が声を上げたとたんに、視界が暗くなった。心の準備がまだ出来ていなかったのでリーナスの心臓はばくばくと早鐘を打っている。
相変わらず視界はゼロ。そして、この間使った『転移』の技を使ったときのように体が左右に引っ張られている。
（痛い……！　痛い痛い痛い痛い……！！）

前回同様、体は左右上下に伸縮を繰り返しており、骨がきしんで音を立てている。
このままでは体が持たない。今やリーナスの意識を支えているのは少女の手の温もりだった。
それでも前回のように安心は出来ない。それはこの少女の素性が分からないから。
こうやってリーナスを弱らせて死なせようとしているのかもしれない。
（止めてよ……）
体に強い衝撃が走った。思わず崩れ落ちそうになったとき、弱った体を、誰かが支えてくれた。
「そのままだ」
ふと耳元で声が聞こえて、体をそちらに動かそうとするが動かない。
「大丈夫か？　お前、この術に弱いみたいだな」
また声が聞こえて、リーナスはそのままの姿勢で頷いた。
（た、隊長……？）
普段だったらギャーギャー叫ぶが、今はそんな元気もなく、そのまま腕に抱かれている。
心臓が、さきほどまでとは違う意味で、バクバク音を立ててうるさい。
「転移はもうすぐ終わる。お前にはきついが頑張れ」
ダグネスがリーナスの耳元で言った。いつものめんどくさいといった雰囲気とはまるで違う。
どこかエスライを感じさせる、父のように慈愛がこもった声。
「は……い」
このところ誰かに助けてもらうことが多いなとリーナスは薄れる意識で思う。
さきほどまでの不安は、いつの間にか無くなっていた。
（隊長には……二回目）

貧血を起こしてしまった時。そして今回。
（隊長……ありがとうございます）
心の中でそう、つぶやいた。
「……来たぞ！」
ダグネスがいきなり叫んだ。そしてだんだんと視界が晴れてくる。
近づいてくる光は白い。
リーナスは、耐えきれずに思わず目をつぶった。

目を開けた時に映ったのは、どこか古ぼけた部屋。どこにあるのかは今の状態では不明。円形の部屋の中には必要最低限の家具。そして分厚い本がうずたかく積まれていた。
ほこりが積もっていながらも、どこか生活感のあるこの部屋に窓は一つしかなく、その代わりなのかバルコニーが設置してあった。そこから柔らかく日の光が入ってくる。
先ほどの白い光はこれだったのかと、リーナスはぼんやりと思っていた。
転移の術から抜け出したことで、体は完璧とまではいかないが、普通に歩けるくらいに回復していた。
（良かった……）

その時、バルコニーに見覚えのある人物がいるのにリーナスは気付いた。
その人物はリーナス達に気付いたのか、ゆっくりとこちらへ向かってくる。
「……」
思わずごくりとつばを飲み込んだ。そしてその時、ダグネスがそっとリーナスを離した。
体は治っているので大して支障はなかったが、少し寂しい。
「ごきげんよう。あら、仲が良いこと」

その人物はにっこり微笑んで言った。思わず顔が赤くなる。
（イージュ……）
リーナスを恐怖のどん底まで落とした少女。今日もおそろしいほどの美貌だ。
「……生きて……おられたのですね？」
突然、ダグネスがかすれた声で尋ねた。男のダグネスなら骨抜きにされているかと思ったのだがイージュの色香も彼には効かなかったようだ。
それにしても、ダグネスはイージュの知り合いなのだろうか。
イージュは薄く微笑んだ。
「ええ。あなた方の策略に、のこのこと乗ってあげるような女じゃないわ。私は」
（策略……？）
そういうイージュの声には棘がある。
（イージュはいったい何者……？）
かなりの手練れであること、そして見た目からして、高貴な身分であることは明らかだ。けれど、貴族がこんな古ぼけた所に居るはずがない。
「……」
ダグネスは答えない。
「死んでなくて、がっかりしたでしょう？」
イージュがからかうように、唇の端で笑った。
「……ご無事で、なによりです」
その時、ダグネスがいきなり深く礼をした。ダグネスにせかされ、リーナスも慌ててダグネスに習う。
と、ここでイージュがからからと笑った。
「ご無事……ねぇ。あんた、親衛隊長だからっていい気になってんじゃないわよ。
私は誰にも護られない。自分で自分の身くらい守れるわ。もうあのときのような子どもではないの」

ダグネスをそっと横目で見ると、顔をこわばらせていた。
（あの時……？）
リーナスが分からないまま会話がどんどん進んでいってしまう。自分だけ、この空間にいないような錯覚に、リーナスは襲われた。
「……ところで、そこの小娘。顔をあげなさい」
言葉通り顔を上げると、イージュがリーナスに向けて指を突きつけていた。体中に悪寒が走る。
「はいっ！？」
「今回は許すわ。まだあんたは私の逆鱗には触れていない」
言って視線をダグネスに移す。
許すと言っているはずが、かなりの殺気を感じるのはリーナスの気のせいか。
「隊長殿。ミディアから聞いたわ。最高位術者ではないそうだけどかなりの力を持っているようね」
イージュがダグネスの方を向いて冷笑を浮かべた。恐ろしいはずが、魅入ってしまう。
「……その力、私達に使われてくれないかしら？」
「……どういうことだ」
護る対象ではなくなったからだろうか。顔を上げたダグネスは、いつのまにか敬語をやめていた。冷静そのものの表情のダグネス。しかし、その声からは、焦りの感情がほんの少しにじみ出していた。
「私に協力しなさい。そうしたらこの世界は救われる」
いつのまにかイージュの瞳は、真剣味を帯びていた。
「この世界を壊すの。全てを。一つ残らず」
一語一語をくっきりと、発音したイージュ。
（世界を壊す！？　そんなこと……！）
イージュは正気か。リーナスは今聞いたことが信じられなかった。世界を壊すなんてことが、一人の少女ができるはずがない。そんなの、ただの妄想だ。
「断る。そんな馬鹿げたことに付き合っている暇はない」

ダグネスが下がった声のトーンできっぱりと断った。
ダグネスの言葉に安心した反面、ほのかに笑っているようなイージュの顔が怖くて直視出来ない。
（怒ら……せた？）
心臓がばくばくいっている。このままでは、リーナスはイージュの行く手を阻んだことになってしまうのか。
（死にたく……ない）

冷や汗が吹き出したリーナスを尻目に、イージュは、怒るわけでもなく、突如笑い出した。
「馬鹿なことは、よく言ったわね。この私に向かってそんな事を言ってしまっていいのかしら？」
イージュが残忍な笑みを浮かべる。
「……俺はお前のしもべでも何でもない」
ダグネスがきっぱりと言いきった。
「残念だわ。でも良いわ。あんた達、生かしておいてあげる。あなたほどの腕の者、今ここで死なせてしまっては楽しみがなくなるから」
それに、とイージュは続ける。
「私のこの計画、阻む敵役がいないとつまらないでしょう？　今度はあの炎のようにはいかないわよ」
「……あの炎の犯人はお前か」
ダグネスが低い声で言った。
「えぇ。見事だったでしょう？　消えてしまって、残念だったけど」
その言葉で、ダグネスから怒りの感情が一気に舞い上がった。
「これから……こいつを見張りに付ける」
ダグネスが感情を押し殺した声で言った。その言葉に、部屋に居る誰もが固まった。
「はっ！？」
（こ、こいつってあたし！？）

「ちょ、ちょっと待って下さい。ありえない。ありえないですよ！」
リーナスが慌ててダグネスに泣きつくも、ダグネスはその表情を変えようとしなかった。
「女の親衛隊員は、カームリとお前だけ。カームリは外せないからお前に行ってもらうしかない」
ダグネスが、きっぱりとリーナスに告げた。
「ちょっと待ちなさいよ！　さっき言ったはずよね！？　護りはいらないって」
イージュが少し焦ったような声でダグネスにつっかかった。
「護るためではない。監視だ」
「そんなこと、この子に出来るかしら？　私ならその子を一瞬で殺すことも出来るのよ」
「……あんたはそう言って殺すことはできやしないさ」
ダグネスが不敵な笑みを浮かべてイージュに告げる。
「なっ……！」
イージュは、虚を突かれて反撃出来ない。
「とにかく、もう決めた」

そう宣告する声が、死神からのお告げにしか聞こえないリーナスとイージュであった。

１８　～対談　前編～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

１９　～対談　後編　～（前書き）

遅くなってすみません。

19　～対談　後編　～

「ちょっと、待ちなさいよ！　私があの小娘を殺せないってどういうことなのよ！？」
イージュがダグネスにかみつくように言った。イージュの瞳にはぎらぎらと怒りの感情が燃えている。
「……それはその通りの意味だ。お前には、殺せない」
ダグネスが冷静そのものといった声音で言う。聞いているこっちまで冷や汗がだらだらと出ている。
「……また、またあの時の記憶なのね？」
（あの時？）
先ほどからその単語ばかり聞いている気がする。気になるが今ここで聞くことは出来ない。
ダグネスがゆっくり頷くと、怒りに燃えていたイージュは、悔しそうに目をそらした。
「もう全部取り戻せたと思っていたのに……」
一瞬にして怒りの感情が薄れてしまったイージュに、リーナスは目を見張った。
「……あんた、私の記憶を取り戻す手伝いをしなさい。そうしたら、あんたの記憶も一緒に取り戻せるかもしれないわ。あんたを頼るのは不本意だけど。護られる訳でもないし、そのほうが気が楽だわ」
イージュがしおらしい声でリーナスに告げた。
その姿がとてつもなく儚げで、今にも消えてなくなりそうだった。イージュという存在は、何かひとつでも欠けたら壊れてしまって、もう二度と戻らないような、そんな感じがした。
「リーナス。それで良いな？」
ダグネスがリーナスの方を振り向いて確認を取る。
本当に行きたくなかったのに、気付いたら頷いてしまっていた。

それで、自分がいかにイージュに魅せられているかを再確認してしまう。

「あんたら、俺の部下をどうした？」
ダグネスが投げ込んだ一言で、イージュの顔にいつもの不敵な笑みが浮かんだ。
その表情とは裏腹に、リーナスの顔は自然とこわばる。
ダグネスが言う『部下』とは、リーナスのことではなく、あの黒い髪の少女が化けていた隊員のことでだとすぐ分かった。あまりリーナスは親しくなかったが、それでも同じ隊員ということで気になるところではある。
「そうね……。どうしたかしら？……ミディア？」
そうイージュが呼ぶと、今まで消えていた黒髪の少女が姿を現した。リーナス達をこの塔に連れてきた、あの少女である。そうしてなにやらイージュとこそこそ話し合う。
どちらも美女。その様は絵になっていた。その二人のなかには、リーナスとヘスターの仲よりも深い絆で結ばれているような、そんな気がした。
イージュが彼女に向ける表情は、リーナス達と話しているときのような、自分を見せつけるような笑みではなく、彼女に対する信頼が見え隠れしていた。
しばらくして、二人は話しを止めた。代表して、イージュが口を開く。
「ごめんなさいね。その隊員は殺してしまったみたい。大丈夫、ミディアが弔ってあげたから」
ミディアというのは、隣の黒髪の少女のことだろう。彼女は、決まりが悪そうに下を向き、唇を噛んでいた。
「……やはりとは思っていたが、そうだったのか」

ダグネスが低い声で言った。その声音には悲しみが溢れている。隊長であるダグネスにとって部下の死はとても辛いものなのだろう。そして、それが戦いで死んだわけではなく、イージュ達に簡単に殺されてしまったということも、悲しいのだ。

「俺はお前達を許しはしない。……今この場にリーナスがいなかったら、俺は戦っていた」

ダグネスの声からは深い悲しみが分かる。しかし、表情からは何も読み取ることが出来なかった。面のように無表情で、イージュを見つめるその瞳には、彼女に対する怒りの感情が露わになっている。

「あなたがそんなに怒るなら、生かしておけば良かったわ」

イージュがバツの悪そうに言った。

「……命を軽視するな。それを直さないと、またあの事件を起こすぞ」

ダグネスが怒りに任せて早口で言うと、イージュの顔にダグネス以上の怒りの感情が溢れた。

「何よ……！　黙って聞いていれば。あんたがあのとき、きちんと護ってくれれば、私はあんなことをせずにすんだのに。こんなことにならなくてすんだのに！　それなのに、自分の事は棚に上げて……！

帰って、帰って！　もう帰ってちょうだい！」

今にも泣き出すのではないかというくらいイージュの叫びは悲痛だった。心からの悲しみが叫びとともにリーナスの胸に迫る。

（……この人は、孤独なんだ）

自分の事を指摘されて怒ってしまうところはまだ子どもだという印象を与えるが、彼女から溢れる悲しみの感情は、彼女の見た目からの歳では、あり得ないほど深かった。

彼女には、こんな悲しみを支え、励ましてくれる人が誰もいなかったのだろう。だから悲しみがこれほどまでに深く、濃い。

（あたしが……この人を……）

支えてあげたい。この、孤独な姫君を。そうは思ったが、自分で

は差し出がましいかもしれない。
（いや……それでも良い）
この人から悲しみを取り除けるのだったらそれでも良い。どうしても、放っておけない。彼女には、リーナスにそう感じさせるものがあった。

黒い髪の少女が優しくイージュをなだめ、イージュはまだ怒りの感情を溢れさせながら、隣室に消えていった。
静かに、黒髪の少女がこちらに近づいてくる。そうして、リーナスたちの目の前に立った。
「……ご無礼、すみませんでした。私は、イージュ様の精霊であります、ミディアと申すものです。
私が、親衛隊員の方に危害を加えました。……いかなる処遇も受けるつもりです」
ミディアと名乗る少女はそこで深く一礼した。リーナスたちをこの塔につれてきたときとは違う丁寧な口調。それは、こちらに対して引け目を感じているからか。
「……精霊は、怪我をすることはなかったのではないか」
ダグネスが静かに問う
「はい。その通りです。しかし、痛みはあります」
「……もういい。お前を切ったところで、イージュには何も伝わらない」
「……主に、良く忠告しておきます」
ミディアが悔しげに顔を歪めて言った。そして、リーナスをゆっくりと見つめた。
「リーナス様、明日私がお迎えに上がります。どうか……どうか主を救って差し上げて下さい。
……では、転移の術であなた方のもといた場所にお返しします。

あの、中庭で良いですね？」
「あぁ、ではよろしく頼む」

リーナスたちはミディアの術で中庭まで転移した。
ダグネスは、あの隊員の死亡を確認しなければいけないと言って、早々にいなくなってしまった。
中庭には、誰もいない。ただ、植えてある花たちがさわさわと音をたてるだけだ。
「……あたしが、支える」
そう決心した言葉は、誰にも聞かれることはなく、風に吹かれていった。

１９　～対談　後編　～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

20　～食事～

リーナスは、そのまま転移の術の酔いが覚めるまで一人中庭にいた。本当に、転移の術が自分にはあっていないのだと再確認させられる。帰りの時も、ダグネスが支えてくれて助かった。一人だったら、また倒れてしまっていたかもしれない。

ダグネスが去って、一人になってしまうと、考えごとが、たくさんありすぎて何が何だか分からなくなってしまった。

イージュを支えるのがリーナスの使命。そこまでは分かっているのだが、そこから先はよくわからない。分からないことが多すぎて、そんな自分が嫌になる。

（……イージュは、あたしにとってどんな人だったのだろう？）

まず一番に分からないのがそれだ。どうしても分からない。初めてイージュに会ったとき、イージュはリーナスに昔、一度会ったことがある。と言っていた。そして、それはイージュがリーナスを殺せないという理由に繋がっているような気がする。勘……だが。昔、リーナスの記憶にない過去、リーナスとイージュの中に何かあったのだろうか。

それは、イージュの手伝いをすることでおのずと明らかになってくるだろう。イージュは、リーナスに記憶を取り戻す手伝いをしろと言っていた。それなら、今は考えるのを止めよう。

そして、次に分からないのが、ダグネスとイージュの関係である。先ほど、イージュは『あんたが護ってくれていたら……』のような言葉を言っていた。見た目からして高貴な身分のようだから、ダグネスはきっと護衛として雇われていたのだろう。

（いや……でも待って）

ダグネスがあそこまで敬意を表す。それは、王家の人間だけではないか。そう考えると一瞬にして背筋に寒気が走った。
（……王家の人間が、あそこに閉じこめられている？）
リーナスのような、頭の悪い人間でも、現王家の人間くらいは知っている。そして、今の王家の人間は、親衛隊員が命がけで護っているはず。
（イージュは……閉じこめられてるの？）
そうとしか思いようがない。それなら、ダグネスの言葉にも合点がいく。『生きておられた』ということは、イージュがそこにいて、生きていることは、僅かな人しかしらないということだ。
（生きたまま……存在を消されてる？）
そこまで気付くと、とたんにイージュの悲しみが、色鮮やかにリーナスの胸に迫ってきた。
両親、家族と離され、一人きりで、何もない部屋ですごす。出たいと願っても、出たところで自分の居場所はもはやどこにもない。自分の存在意義さえも見いだせなくなる。
（あたしなら……）
そう考えてしまって頭を振った。今、イージュに必要なのは同情じゃない。助けであり支えだ。
悲しいときも、いつもそばにいてくれたヘスターのような。

（そして、どんなときも強くて優しい、母さんのような）

「ただいま……ですわ」
カームリは暗い部屋に戻ってきた。灯りがついていないのでリーナスはどこかに行ってしまったのだろう。あの人は、どこかにとどまるということを知らないらしい。
（けれど、それがリーナスらしいということですかね……）
苦笑して、呪文を唱えてランプに火を付けた。

ゆらゆらとうねる炎が、先日のあの事件を思い出す。その戦いで、魔力を使いすぎたために後遺症に悩まされている者もまだいる。ただ、それで死者が出なかったのは不幸中の幸いだとカームリは思う。カームリ自身はもう大丈夫だが、まだ病室で寝ている同僚を見ると、とても胸が苦しくなる。自分の魔術で直してあげられないのが、悔しい。

ランプに照らされて、ほのかに明るくなった部屋の中で普段着に着替える。

その時、二階のベットにリーナスが寝ているのが目に入った。思わず苦笑してから、階段を上る。

「リーナス。……ご飯の時間ですよ」

そう言ってゆらゆら揺らすも何も反応がない。

「リーナス！」

耳元で、大きい声を出してもリーナスは起きない。

「もう……。わたくし、ちゃんと起こそうとしましたわよ？」

そう、捨てぜりふを吐いて部屋を出た。

（それでご飯を食べ損ねても、わたくし、知りませんわ）

「う～ん……」

大きくうなって目を覚ますと、世界はもう暗く変わっていた。いつの間にか寝てしまったらしい。中庭から帰ってきたあと、ベットで考えごとをしていたら、こうなってしまったようだ。

「うそぉ！　待ってよ、ご飯の時間が……！」

壁に掛けてある時計を見ると、あと五分ほどでホールの閉まる時間だ。ここの規律は厳しいので、ホールが一度しまってしまうと中に入ることができなくなるのだ。

初めて行ったときはホールの臭いに耐えられなかったリーナスだが、二回目からは臭いを感じることがなくなったので、最近はご飯の時間が一番の楽しみである。

「いやぁ！！食べる～！！」
慌てて飛び起き、リーナスは、半泣きになりながら、ホールまでの道を全速疾走した。

「リーナス！　間に合ったか！」
ホールへ着くとフィリアスが笑って手を振っていた。
今日仕事がない他の親衛隊は、もう揃っていたのでみんなの注目を浴びることになってしまい、思わず頬が紅潮する。
「うっさい！　この糞ガキ！　余計なこと言うなっ」
通りすがりに小さくつぶやいて、フィリアスの頭をげんこつで殴った。
「うぉお！」
フィリアスがうめいて頭を抱えるも、リーナスはそれを素知らぬ振りでごまかした。
「カームリ！　起こしてくれても良かったじゃん」
フィリアスの隣、そしてカームリの向かい側に座って、非難の声を上げる。
「わたくしはきちんと起こしましたわ！　リーナスが起きなかったのです！」
カームリが口を尖らせて答える。
「この馬鹿女！　カームリに言いがかり付けるな！　どうせお前が、ぐーすかいびきかいてたんだろぉ？」
横からまだ頭をかけているフィリアスが口を挟む。
「何よこのちび！　もう一回殴られたいの！？」
「へっ！　やれるならやってみろよ！」
言ってフィリアスがあっかんべーをする。
「やってやろうじゃん！！」
リーナスががたんと大きな音を立てて立ち上がと、カームリが明らかに怒気をはらんだ瞳で二人をにらむ。
「リーナス！　大人げないですわ！　フィリアスも止めなさい！」

そう、カームリには珍しい大声を出して二人の間に割って入った。近くの親衛隊員がくすくすと笑い声をたてたが、もう今更後には引けない。
「カームリは黙ってて！」
「いやですわ！　こんなばかばかしい喧嘩、見てられません」
カームリがきっぱりと言い切った。
（あ、それ痛い。……心が）
その言葉でしおしおと椅子に座り直す。フィリアスも同様だ。
カームリは、リーナスの向かいで、大げさにため息をついた。リーナスが親衛隊入りをしてから、こんなやりとりは日常茶飯事になっているのだ。何かとつっかかってくるフィリアスをリーナスが迎え撃つ。ふだん穏やかなカームリも、そろそろ我慢の限界といったところか。
少しカームリには反省の気持ちが湧いたが、それでもフィリアスとの喧嘩は止めることはないだろう。
（あいつ、ほんっとにイライラする……！）
どうしてもリーナスの神経を逆なでするのだ。イージュも、あのときこんな風にイライラしていたのかなぁ、何て考えてしまう自分はどうかしたのだろうか。
「リーナス。そろそろご飯取りにいかないと、なくなってしまいますわよ？」
「……えっ！？　あぁ、うん。じゃ行ってくる～！」
考えごとをしていた頭を急いで切り換え、席を立った。
（今日はおいしそうなのあるかなぁ～）

「ねぇ、カームリ。あたし、なんか特殊な仕事与えられちゃったみたいでさ」

ぐさりと、イモを突き刺しながらカームリに話しかけると、カームリは大きく目を見開いた。
「特殊な仕事ってなんですの！？」
カームリは驚いたようでまた大きな声を出す。
「しー！　もうちょっと声のボリューム落として。……。なんていうか、正体不明の人の監視……かな」
「正体不明……？」
カームリが眉間にしわを寄せて尋ねた。正体不明という言い方は悪かっただろうか。
「あたしも、良く分からないんだ。とにかく、すっごい美人なんだけど、古い部屋にいるんだよね。本ばっかり積まれているような。紫の髪と目が神秘的でさ。物腰とかは……貴族っぽいかな。んで、かなりの魔術の使い手で。」
そう言うと、カームリは顔を曇らせた。その劇的な変化に不安になってしまう。
「……その方って」
「カームリ、知ってる？」
不安そうに顔を曇らせたカームリは、フィリアスと顔を見合わせた。ちゃっかりフィリアスも今の話を聞いていたらしい。こういうところだけ知恵が働く奴なのだ。
「……。イージュ姫でしょうか？」
カームリが決心したように顔をあげて答えた。
「……あ。やっぱり王家の人……なんだ」
思わず低い声で言うと、二人揃って頷いた。
「……イージュ様と、任務がどうして関係あるのですか？」
「あのね、あたし、さっきまで、イージュ……姫と会ってたの」
そう言うと、二人揃って驚愕の表情を浮かべた。二人ともほぼ同じ顔だけに、こうやって見ると面白い。不謹慎ながらもそんな事を思ってしまう。
「そんなことありませんわ。……イージュ姫は、もうとっくの昔に

亡くなっています」
　カームリが抑えた固い声で言った。カームリからは疑惑の感情があふれ出ている。リーナスの言うことが信じられないらしい。
「……それが、生きてるの。隊長も了解済み」
「……リーナス！　それは……本当なのですか？」
　カームリが震える声で尋ねた。それもそうだろう。死んだと思っていた人間が生きていて、それが間違いではないと確認されたのだから。
「リーナス、嘘ついてんじゃないだろうな？」
　フィリアスも不信感いっぱいの表情で尋ねる。まだ驚愕に目を見開いているカームリのいる前でからかう気にもなれない。
　そこで、ゆっくりとうなずいた。
「……ごめんなさい。取り乱しました。もう大丈夫です。……リーナス、それは、ここで話せる内容ではありませんわ。いったんわたくしたちの部屋に戻りましょう」

　カームリの言葉に、リーナスは山盛りにつんだ夕食を急いでかきこむ事となった。

20　～食事～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

21　～相談～

「さ、リーナス。全て話してしまいましょう」
上機嫌なカームリに対して、リーナスは不機嫌だ。
それは、一つ目として、ご飯を良く味わって食べられなかったこと、二つめは、
「なんであんたがここにいるの？」
――フィリアスがいるからだ。
フィリアスは、その甘いマスクで、にかっと笑って見せた。
「ん？　俺だって聞きたいし、ほら、カームリの兄だから」
その脳天気な顔に腹が立つ。
「このシスコンちび」
こっそり低くつぶやくと、フィリアスはぴくりと反応した。
「んだとぉ！？　シスコンは許すが、ちびは許さない！！」
「つっこみどころそれであってんの？」
（まぁ、それもフィリアスらしいけど……）
この兄妹の兄妹愛はすばらしい。見ていてすがすがしいほどバカらしいのだ。
「はい、はい。止めて下さい！　フィリアス、喧嘩をするようだと部屋から出しますわよ！」
カームリの言葉に、ぴたりと静かになったフィリアスを見て、リーナスは笑いをかみ殺した。

「では、イージュ姫は生きていらっしゃるということですか？」
今までの話をすると、カームリは深く考え込んだ。フィリアスもまたしかりだ。
「たぶん……ね」

「……おかしい。おかしいですわ。あの方は、昔の事件に巻き込まれて命を落としたはずです」
「……先に、イージュの正体教えてくれない？」
自分で想像はついているとはいえ、本当のところが知りたい。自分の脳で考えたことがあっているはずがない。……あっていないことを願いたい。
そんなリーナスの気持ちが伝わったのか、カームリはごくりとつばを飲み込んだ。一呼吸おいて、話し出す。
「……イージュ姫は、このラーナリアン王国の王家の血をひいた姫君ですわ。亡くなっていないなら、王位継承権もまだあると思います。けれど、十一年前のあの日。ある晩餐会で、イージュ様は暗殺者に殺された。その後、駆けつけた親衛隊に、暗殺者は斬り殺された。そのはずです。あの事件は、親衛隊始まってから最悪の事件と、今でも親衛隊では言われています」
「……暗殺者」
リーナスは額にしわを寄せて考え込む。
（……あたしの予想、当たっちゃったな）
出来ることならそれが嘘であって欲しかった。嘘であったなら、こんなにも胸が痛くないのに。どうして自分は今、こんなにも泣きそうになっているのだろう。これはイージュへの同情の涙なのか。それすら知らず、リーナスはただ涙をこらえた。
「えぇ。当時かなりの事件になったのですが。知りませんか？」
「あたし、小さいころの記憶がないんだ」
「それでも、かなり長い間話題でしたわ。にしても、なぜあの方は生きているのでしょう？　確かに亡くなったというはずですわ。国葬も盛大に行いましたし」
カームリが首をかしげた。
「……国葬まで」
それを考えてしまうと余計に泣きそうになってしまった。
（なんであたし、こんなに泣きたいんだろう……？）

自分でもよく分からない。体の奥底から何かがカームリの言葉に異常に反応している。『この気持ち』はなんなのだろう。自分ではコントロール出来ない何か。体の奥底からわき上がってくる、これほどまでに切ない気持ち。

「……リーナス？」

カームリが心配そうにのぞき込んだ。隣にいるフィリアスまでもが、心配そうに見つめている。

「どうした？　具合でも悪いのか？」

「……具合は大丈夫。でも、あたし、なんか変。泣きたくないのに、よく分からないのにものすごく泣きたいほど切ないんだ」

泣き笑いのような表情で言うと、カームリが優しく背中をさすった。

「……リーナス、あなたに、小さいころの記憶がないといっていましたよね？　それは、きっとその記憶のせいではありませんか？　過去になにがあったのか、わたくしも、そしてリーナスも知りませんが、きっとその記憶は、リーナスにとって必要なものなのです。その記憶が、反応しているのではないですか？」

「……でも、過去にとらわれるのも、よくないぞ」

フィリアスがぼそっと言った。彼らしくない優しさに、思わず苦笑がもれてしまう。

「……あーーー！！　人がせっかく心配してやったのに、笑ってるし！　ありえねー」

それをめざとく見つけたフィリアスが、リーナスに向けて指を突きつけて叫んだ。

「うるさいですわ、フィリアス」

カームリがぴしりと言うと、フィリアスは、「どうして俺だけ」とかなんとか言いながらも静かになった。

そのころには、だんだんと切ない気持ちが消えていっていた。あれほど突然に来たくせに、消えてしまうときも早い。

「……もし良かったらでいいのですが、明日、イージュ様の所に行

くのですわよね？　その時に、そうしてイージュ様が生きていらっしゃるか、聞けそうだったら聞いて下さい」
「……分かった。聞けるかは保証できないよ」
自分がそれをあのイージュに言わなければいけない、なんて考えると憂鬱だ。あの姫君にそんな込み入った話をする勇気は、リーナスは持ち合わせていない。時間があったら、精霊に聞いておこうと思うリーナスだった。

「としても……。あの方がリーナスを殺せない……。とは、どういうことでしょう？」
またもやカームリが首をかしげる。こんな仕草をカームリがするととてもかわいらしい。ふんわりとした雰囲気が格段に引き立つ。
「……！　あ、俺話分かった！　きっとトラウマ的なやつがあるんじゃない？」
フィリアスが嬉しそうに言う。
「トラウマ……？　リーナス、心当たりは？」
「うーん……小さい頃の記憶無いから良く分かんないんだよね」
目にみえて二人の表情が暗くなった。特にフィリアスの落胆ぶりは見事だ。
「外れ……か？」
「にしても、わたくしはイージュ様とリーナスの間に何かがあったとは思います。初めて会ったときに、イージュ様はあの頃も～とかなんとか言ってたんですよね？　怪しい以外の何者でもありませんわ」
「初めてあったときもそんなこと言ってたわね。とか。怪しぎるな」
フィリアスが大きく頷きながら言う。
「それ、リーナスは一つも覚えてないんですの？」
「……残念ながらね」
「けっ、役に立たねぇやつ」
フィリアスが吐き捨てたが、カームリが鋭くにらんだので、すぐ

にいい顔に戻った。このところ、カームリはフィリアスに少し厳しい。フィリアスの片思いのように見えて、見てるこっちがはらはらしてしまう。
「……そろそろ、寝ましょうか？　もうだいぶ遅くなりましたし。すみません、結局よく分かりませんでしたわ」
カームリが俯く。
「大丈夫。あたし、イージュの正体知れただけで結構良かったし。また明日行かなきゃいけないから、その時に聞いてみるよ」
「すみません、お役に立てずに……」
「ま、面白い話聞けて楽しかったぜ？　んじゃ、消灯の時間も迫ってるし、俺帰るわ。　お休み、カームリ」
「お休みなさい」
カームリに特上のスマイルを見せて帰っていったフィリアス。お休みをリーナスに言わなかったのは絶対に、嫌味である。
「……あいつ、覚えてろ」
小さく復讐を誓うリーナスに、カームリは苦笑した。
「フィリアスの意地悪にいちいち付き合っていたらきりがないですわ。あの人は、人をからかうことが大好きなんです。家のお手伝いさんも、しょっちゅうからかわれて。フィリアスの嫌いなお手伝いさんは、意地悪がひどすぎて、辞めてしまったくらいなんですの」
楽しそうに頬を上気させるカームリ。
「カームリたちの家って、お金持ちなんだね。お手伝いさんとか。もしかして貴族？」
次の瞬間、それを言ってしまったのは失敗だったと、カームリの顔でよく分かった。一瞬にしてカームリの嬉しそうな表情が消え、悲しみの感情がふわりと漂った。まだ、カームリの過去に触れてはいけない時期だったのだ。その判断を間違えて、カームリを悲しませてしまった。
俯いてしまったカームリの顔を見ることができずに、リーナスは

逃げるようにベットに入った。

21　～相談～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

22　～唄声～（前書き）

22　～唄声～

早朝。リーナスはなぜか目が覚めてしまった。昨日は別段早く寝たわけではない。

（あれ？　どうしたんだろ）

少し記憶の中を整理して考えてみるが、理由は見つからない。

「……うーん」

つぶやいてぎゅっと目をつぶる。そのまま横になっておけば眠れるかと思ったが、目が異常にさえて眠れない。リーナスのいる真下のベットからは、カームリの規則正しい寝息が聞こえている。

「……しょうがないか」

独り言を言って起き上がった。窓からは柔らかな朝日が降り注ぎ、リーナスの翠の髪を照らしている。

下でぐっすり眠っているカームリを起こしてしまわないように、ゆっくりと下に降りると、カームリが寝返りをうった。まだまだ幼い顔。いつも大人びているので忘れてしまっているが、カームリは十七歳であるリーナスよりも二つ年下なのだ。

（あたしが……傷つけた）

昨日のカームリの表情が、目を閉じても鮮明に思い出されて、リーナスはカームリから目をそらした。ついつい、聞いてしまった。カームリと、少しでもうち解けることができたのだと、自分はカームリの事を知ったようなふりをして。

（最低だ……）

リーナスは一人唇を噛む。その時のカームリの表情が、振り払おうとしても何度も何度も記憶の底から浮かび上がってくる。楽しい思い出よりも、嫌な思い出の方が、消えてしまうまで時間がかかる。

「ごめん……」

そっとつぶやいてカームリに背を向ける。どうしても、カームリを見ているのは気まずい。

そんな醜い自分から逃げるように、リーナスは立てかけてあった剣を取って部屋を出た。
重い足が自然と中庭に向いたのは、なぜだったのだろう。

中庭に出たリーナスは、朝露が光る草に腰を下ろし、歌っていた。剣は大事に膝の上に置いている。こんな王城の中で襲われることは、ないだろうという考えからだ。
歌っているのは、小さい頃にヘスターが教えてくれた子守歌だ。リーナスとヘスターの二人で、よく歌っていた。
子供に教えるにしては、もの悲しいメロディーだと、今では思うが、それでもその曲が本当に好きで、一人でも暇さえあれば歌っていたのだ。
本当は歌詞のある曲らしいが、いつの間にか歌詞は失われ、旋律のみが伝わっている。それも、頭の悪いリーナスにとっては歌詞を覚えなくても良いのでぴったりだった。
「〜♪」
朝日の中で一人歌うと、この世界に自分一人しかいないような感覚に襲われる。世界の中に、自分が飲み込まれていくような、そんな感覚。その感覚がとても心地よくて、リーナスはそのまま何回も歌っていた。
誰に聞かせるわけでもなく、ただただ自分の為だけに歌う。遠い過去から伝わる、――鎮魂歌を。
「……綺麗な歌だね」
「！」
ふと、声をかけられた。慌てて後ろを振り向くと、そこにいたのはフードを目深にかぶった人物だった。逆光で、顔は何も見えない。フードの影が、その人物の顔を黒く染めていた。
その人物は、リーナスからあと数歩の所に立っている。そこまで近づいていたのに気付かなかった。そのことがリーナスを動揺させ

た。リーナスは、剣をひっつかんで慌てて立ち上がる。朝日の中で、漆黒のローブが、どこか不気味だ。
「驚かないでくれよ。……何も、しないから」
そう、人物は言って、フードをとった。そこから現れたのはエルと同じか年上の男の人の顔だった。
整ってはいるが、今にも倒れてしまいそうに青白い顔。頬はこけているが、それでも怖いという印象はない。細い青色の瞳には、うっすらと悲しみが揺らめいていた。長く伸ばされた紺色の髪は後ろで一つに束ねられ、先の方は、傷んで色が抜け鮮やかな蒼に変わっている。
男の人は、うっすらと微笑を浮かべて、リーナスを見つめていた。青色の瞳に、見つめられているリーナスは、何だか居心地が悪く、そっと目をそらした。
「……キミは、何と言う？」
男の人が問いかける。その声は驚くほどなめらかで、低く、体の芯から響いてくるようだった。ヘスターにも似た、柔らかい声に、リーナスはいつの間にか緊張を解いていた。
「……？　あたしは、リーナス、といいます」
「リーナス……」
男の人はリーナスをまた見つめた。その瞳には、疑いの感情が揺れていた。
「どうかしましたか？」
「あ、いや。何でもないよ。ところで、さっきの歌は、何ていう歌なんだい？」
「鎮魂歌……だそうです」
そう言うと、男の人は少し考え込んだ。
「……懐かしい気がするんだ。今までに聞いたことがあるような気がするんだ。お世辞ではなく、本当に心が洗われるようだったよ」
「すみません。あなたは……？」
口を挟むと、男の人は目を見開き、そして笑った。

「すまないね。申し遅れた。僕の事は、リート。と呼んでくれ」
「本名ではないんですね」
苦笑いで返すと、リートはまた笑う。
「ハハ。いいじゃないか。人には隠し事の一つや二つあるんだよ。隠し事がない人間なんて、神しかいない」
「……怪しい者なら、あたしはあなたを切らなければいけませんが」
硬い顔で、剣に手を添えながら宣告すると、リートは吹き出した。
「ははっ。面白いこと言ってくれるじゃん。リーナスちゃん。僕のどこが怪しいんだい？」
「……全部。でしょうか。ここには親衛隊の者と使用人しか来ることはないはずですが」
少し考えてから話すと、リートは眉間にしわを寄せた。
「えー。僕は正真正銘の偽善者だけど。でも……僕がここにいたことは、黙ってくれれば嬉しいな。
じゃないと、またしかられちゃうんだ」
「……お母さんとかですか？」
「……違うよ。母親なんて、もうとっくの昔にいなくなった。血は繋がっていない、家族に……だよ」
そう言ったリートの声音が、余りにもがらりと変わったので、リーナスは息をのんだ。突然に彼から溢れた感情は深い憎しみだった。目の前の優男と、放たれたその感情が結びつかなくて、リーナスはそのまま呆然するしかできなかった。
そんなリーナスを見てか、リートは顔を落とした。
「……ごめん。キミにこんなこと言っても仕方ないね。僕、行かなきゃ。見つかるとまた怒られちゃうからね。リーナスちゃん。また、明日も来てくれるかい？　キミの歌が聴きたいんだ。こんな僕でも、その歌を聴くと、必要とされているような、そんな気がするんだよ。お願いだ」
そう言ってリートは微笑んだ。その笑みは、どこまでも切なかった。心をわしづかみされているかのように、胸の奥が苦しくなる。

「…あたしの歌、上手じゃないですよ？」
やっとのことで声を絞り出す。胸が、苦しい。
「十分だよ。それで良いんだ」
「……それなら、言いですよ」
そう言うと、リートは満面の笑みを浮かべた。
「ありがとう。じゃ、明日ね」
そう言って、リートは手を振りながら去ってしまった。追いかけていきたいはずなのに、足が重しになったように動かない。暖かい朝日が、雲に隠れてしまった。胸の痛みは、直らない。それどころかますます強くなって、そしてリーナスの思考を鈍らせる。
その時、聞き覚えのある声がリーナスを呼んだ。そのまま近づいて、そして目の前で止まる。
「リーナス！！　ここにいましたのね？　探しましたわ。今日が大事な日だっていうのに。
ミディアとおっしゃる方がいらしてますよ？……。……リーナス？　どうしました？　ぼうっとして」
カームリの顔が、何だかつまらなそうに見えた。カームリの元気が、消えてしまったように感じた。
「ううん。何でもない」
（カームリ、怒ってないんだ……）
鈍る頭で、それだけ考えて返事をする。
「……それじゃ、帰りますわ。リーナス、あなた変ですわよ？」
心配そうに顔をのぞきこんだカームリの顔は、やはり元気がないように見えた。そんなカームリを元気づけようと微笑むも、カームリにまた変な目で見られた。

（あれ……？　元気がないのは、あたし……？）

22　～唄声～（後書き）

読んで下さって本当にありがとうございます。
更新速度が遅れまくっていてすみません……。

23　～仕事～

カームリとともに、息を切らして帰ってきたリーナスが見たものは、カームリのベットに腰掛けているミディアだった。無表情で、うるさく入ってきたリーナスをにらむと、すっと立ち上がる。真紅の瞳から、静かな怒りを感じ、リーナスは自分の顔が引きつるのを感じた。そのときになって、ぼんやりとしていた意識が覚醒する。

「す、すみません！　お待たせしてすみません！！」

何回もへこへこ謝ると、ミディアの表情が、心なしか和らいだ。カームリはあきれ顔でリーナスを見ている。

（カームリも謝って～）

そう念を送ってみるが、カームリは知らん顔だ。怒りを収めるには、一人では足りない。

そのとき、ミディアが苦笑して言った。

「……こちらも、時間を設定しておらず、すみませんでした。突然なのですが、今からはどうでしょうか？　我が主がお呼びなのです」

「……へ？　今ですか？　大丈夫ですけど……」

あっけに取られて変な返事をしてしまった。

（怒ってない……？　良かったぁ）

心の中で大きく安堵のため息をつく。

「良かったです。ではこちらへ」

ミディアが、細い手をリーナスへ差し出した。

（また転移かぁ……　具合、悪くなるよなぁ）

そう考えてしまうと、否応なしに気分は下がる。

（今度は倒れないといいなぁ……。でもって、そろそろ体も慣れてくれれば……）

そうは思っても、体とは意地悪なものだから、そう簡単にはいかないだろう。何日、何か月かかるかは分からないが、だんだんと鳴らしていくしか道はない。

「リーナス！　ちょうど良かったですわ！」
そう考えていると、いきなり、カームリが弾んだ声をあげた。
「あの、ミディアさん。今から転移の術を使うのですよね？」
「は、はい。そうですが」
ミディアは困った顔でカームリを見ている。その返事を聞いて、カームリは部屋のすみへ走っていき、そこにある棚から、何やら取り出した。
「じゃーん！　カームリ特製酔い止め薬ですわ！！　この間、医術師の方に教えていただいて作ったのです」
カームリが取り出したのは、真緑の液体が入った小瓶だった。カームリが動くたびに中の液体がびじょびじょといった風に動く。何やら神話に出てくるモンスターのようになっているが、これは果たして薬なのだろうか。
（……毒の間違いじゃないよね？）
そう言い出したくなったが、嬉しそうに頬を上気させているカームリの顔を見ると何も言えなくなる。
ふと見ると、ミディアが引きつった顔で液体を見つめていた。
「……このまま飲むんだよね？」
「えぇ、一気飲みしてください」
ごくんとつばを飲んで手渡された液体をじっくり見る。何だか冷や汗まで出てきた。
（飲まないと……カームリが……）
覚悟を決めて蓋をあけると、中から強烈な芳しい香りが、鼻孔を通りぬけていった。卵が腐ったような、そんな臭いである。近くにいるミディアが、そっと顔を背けた。
「うん……じゃあ、いきます」
強烈な香りのおかげでかなり涙目だが、リーナスは意を決してその液体を飲み込んだ。そしてそのまま一気に薬を飲んでいく。
「……！！」
ミディアが驚愕のまなざしで、リーナスを見ていた。

「ぷはぁ……！」
からになったびんをカームリに手渡す。
「お味は、どうでしたか？」
おそるおそるカームリが尋ねる。
「……うーん。無味だった」
そう、あの物体は無味だったのだ。自分でも信じられないが、全く味がなかった。臭いと見た目さえ変えることができれば、転移を使うときは毎日飲んでも良いくらいだ。
「……良かったですね。あの、主が待って居るので」
ミディアが困り顔で言って、手を差し出した。リーナスは、その意図をすぐにくみ取って、手を握る。顔が、まだ微妙に引きつっているのは気のせいか。
「いってらっしゃいですわ。頑張ってくださいね」
満面の笑みをうかべるカームリに見送られて、リーナスは姫君の所へと出発した。

転移の術が開けると、目の前にあったのは、大量の本だった。あの薬が効いたのか、酔いはしなかった。
目の前にある大量の本は、リーナスの背丈よりも高く積まれており、かなり不安定である。そんな山がそこら中にあって、本当に足の踏み場がない。寄りかかったら大変なことになる。
「あーーー！　やっと来たわね。遅いったらありゃしないわ」
どこからともなくイージュの声が聞こえて、リーナスは驚いた。どこにいるものかと辺りを見渡すと、積み重ねてある本の隙間からイージュが顔を出していた。少しほこりをかぶっているが、それでも美しさは衰えてはいない。
「あの、すみません！」
とりあえず謝ると、イージュは思いっきり顔をしかめてこちらへ手招きした。

「そんなことどうでも良いわ。こっち来て。あ、本、倒さないでよね」
隣にいるミディアを見ると、ほほ笑んでイージュの元へと促した。これを見る限り、殺されることはないだろう。それでも、あんなことを言われたからには警戒する。
そびえたつ本の中を抜けると、イージュが分厚い本を開いていた。地べたに座っているので、純白のドレスは薄汚くなっている。
「リーナス。だったわよね？」
イージュが本をめくりながら尋ねる。リーナスはどうしたら良いのか分からなくなってとりあえず地面に座った。
「そうですけど……」
「あー。敬語はやめなさい。あと私を呼ぶときも『イージュ』で良いわよ。堅苦しいのはミディアだけで十分だから。いいわね？」
「は、はい」
イージュが本をめくる手を止めてこちらをにらむ。
「今言ったこと、忘れたの？　……分かったかしら？」
「う、うん」
やけくそで答えると、イージュは満足そうに微笑んだ。
（こんな人相手に敬語無しなんて！）
リーナスのような親衛隊員が姫君を気安く呼んでいいわけがない。そんな生活がこれからも続いていくと思うと、すーっと体温が下がったような気がする。
「今日はあんたにこの本を片付けて貰おうと思うの。運ぶときは『引き寄せ』の術で運んでこられたんだけど、何か魔術の防御が張られちゃったみたいだし、親衛隊とかが、消えた本たちを探してるみたいだから。あいつらと面識があるあなたなら大丈夫でしょう？あ、ミディアにも手伝ってもらうから」
「こ、この本全部……？」
「当たり前でしょう？　私が一応読んだものは、こっちに置いてあるから。読んでないのはもっていかないでね。んじゃミディア、あ

とはよろしく」
ひらひらと手を振り、イージュは読書に没頭し始めた。
ふぅっとため息をついたのは、いつの間にかリーナスの真後ろにいたミディアだった。思いがけないところにいたので、寿命が縮むと思うほど驚いた。
「……さぁ、運びますか。階段を下りなければいけないので台車は無しで、全部手で運びます。
五冊くらい、一気に持てますか？」
試しに、近くにあった本五冊を持ってみる。
「お、おもっ！」
意外と重い。
「あ、大丈夫ですね。じゃあ私について来てください」
そう言ってミディアは自分も本を五冊持ち、歩きだす。持っている本がぶつかって、積んである本が倒れそうになった。
「あーー！　倒さないでよ！　絶対よ！！」
イージュの声が後ろから飛んでくる。これは絶対に、心臓に悪い。始終びくびくしながら部屋を出た。

部屋を出ると、目の前に広がっていたのは、延々と続く階段だった。
「あの、すみません。これって自分を転移の術で運べないんですか？」
おそるおそるミディアに尋ねる。
「……転移の術は余り頻繁に使ってはいけません。あなたを毎日ここまで転移させているのも危険なんですよ」
「どういうことですか？」
鋭い声で問い詰める。ミディアはたじろぐこともなく、リーナスの視線を受け止めた。
「転移の術は、便利ですが何より体に負担がかかりますので。続けていると内側から壊れていきます」

背筋に冷や汗がまた、つたった。
「それ、はやく言うべきじゃないんですか」
「すみません。でも言ってしまったら、あなたは転移を使おうとしなくなるのでは？」
「……」
図星だったので、何も言うことができない。
「まぁ大丈夫だと思います。もし駄目だったとしても主が、なんとかしてくれるはずです。さぁ、運んでしまいましょう？」
リーナスとミディアは、延々と続く階段をゆっくりと下りていった。
階段は、二人を飲み込んでいく。

23　～仕事～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

24　～崩壊～

「つ、つかれた……」
リーナスは、階段の一番下で荒い呼吸を繰り返していた。心臓が飛び出してしまいそうに大きく鼓動を繰り返しており、全身が熱い。体が新鮮な空気を強く求めている。
（あの階段……まさに心臓破り……）
途中で休もうにも、一端休んでしまうと進めなくなりそうで休めなかったのだ。隣にいるミディアも、精霊とはいえ、疲れ果てているようで、額には汗が光っている。
「後でイージュ様に言いますね。……こんなもの、何回もやらされたら、きりがありません」
ミディアがぽつりと言った。
「あの、今更なんですけど、この本を転移で下に降ろすことはできるはずですよね？」
「あ……。その手がありましたか。でも……多分イージュ様は面倒くさがるでしょうね」
荒い呼吸を繰り返しながらミディアがげんなりと言った。精霊であるミディアの話は説得力がある。それにしても……。
「イージュ……。ちょっとぐらい人の気持ち考えてくれたって……」
「……すみません。イージュ様は、人とふれあった時間というものがないのです」
「それは……？どういう……」
聞き返すと、ミディアは顔を背けた。
「あ……。それはそうと、私に対しての敬語は結構です。主に対する練習と思ってくれれば」
即座に話題を変えてしまったミディアに、これ以上聞くことはできなかった。
「そうだね。イージュに話す練習にさせてもらう」

深く追求せず、こちらも気分を変えて返すと、ミディアはふんわりと微笑んだ。
「……では、そろそろ行きましょうか？」
「うん。がんばろう」
そう言ってミディアの肩をぽん、と叩くとミディアが驚いた顔を見せた。
「……あれ、嫌だった？」
「い、いいえ。はい。頑張りましょう」
その時ミディアが見せた笑顔は、疲れを吹き飛ばすのではないかと思うくらい明るい笑顔だった。
よっこらせと、また本を持つ。もう腕がぱんぱんで大変だ。

本を持つ二人組の女性たち。その光景は周りから見ればどう映っているのだろうか。イージュの住んでいた塔は、王城の外れにあるらしかった。すれ違う人はまばらだが、それでもそのたびに不審な目で見られる。リーナスのお腹の減り具合からいえば、もう少しでお昼の時刻である。そろそろ本が消えたという噂が浸透してきた所だろう。
（捕まったり、しないといいのだけど……）
ミディアの話によると、親衛隊が本の捜索をしているらしい。一人は高位の魔法陣を張ったかなりやり手の人物。そしてあと二人はその部下といった様子の気配だと、ミディアは言っていた。
（鉢合わせしたくないなぁ……）
リーナスは、親衛隊に入ってからまだ日が浅い。そんな時に怖そうな上官に怒られでもしたら、後で皆の笑いものにされてしまう。そうなっている自分をありありと想像して、頬がほてってきた。
「あともう少しです」
ミディアの言葉に、想像の中から引きあげられた。ぱちぱちと目

を瞬かせ、現実へと頭のスイッチを切り替える。
ミディアに促されて、リーナスは。まだ行ったことのない王城の深くまで入っていく。
しだいに、すれ違う人はまばらに、そしてとうとう誰もいなくなった。人のいない廊下に、ミディアとリーナス、二人分の足音が大きく響く。風はないが、それでも、どこかひんやりとする空気が流れている。
「……ここって」
「ここは王家の書物庫につながる道ですね。あとほんの少しです」
そのときだった。前方から何やら声がする。数人の人物がぼそぼそと話している、低い声。男だろう。こんな所で話しているとなると、考えられる人物は一人しかいない。
「親衛隊ではないですか？」
その時、ミディアが、嫌そうに言った。
「あたしも、今まさにそれを考えてた」
見えてきたのはエルと、知り合い程度の親衛隊二人だった。エルは難しい顔でその他の二人の親衛隊員と話し込んでいる。
「副長～！　何してるんですかぁ！？」
思い切って大きく声をかけてみると、エルはかなり不機嫌そうに振り向いた。
「誰かが来ると思っていればお前か。……ん？　その本……」
「あ。これですか？　今ここに返しに来たんですよ」
「お前が犯人か……！」
エルの顔が明らかに怒気をはらんだ。
「ち、違いますっ！　あたしはただお手伝いに来ただけですよ」
慌てて本を置いて大げさに首を横に振る。その他の親衛隊員も状況を察知したようで険しい顔をリーナスに向けた。
（そ、そんな顔で見ないでよ～）
その他の親衛隊員を見ているのは精神的に難しかったので、比較的話したことがあるエルに顔を向けることにした。その他の二人は

空気だと思って振る舞おう。そうすれば、怖くない。
「……ところで、そちらの方は？」
大きくため息をついて、エルは視線を、後ろにいるミディアにうつした。
「……ミディアと申す者でございます」
「何のようだ？　こちらは王家の者以外立ち入り禁止の書物庫だ」
「あ……。副長。ちょっと耳貸してください。それか、あの人たち……」
リーナスは慌ててエルのもとに近づき、声をひそめて言った。エルの眉間にしわが入る。
「……二人とも。少し席を外してくれないか？」
エルはすぐ判断し、低い声で人払いをした。その決断力の早さはさすがといった所か。
その他の二人は、リーナス達に不審そうな目を向けながらも、そこはエルに対する信頼からなのか、何も言わずに去っていった。
（良かったぁ……）
リーナスはこっそり胸をなで下ろした。

「んで、何のようだ。リーナス。人払いをするってことは、ろくでもないことなんだろ？」
足音が遠ざかり、完全に聞こえなくなったところで、エルが尋ねた。
「うーんと……。これ、話して良いのかな？」
後ろにいるミディアを、振り返って聞くと、返答は意外な所から返ってきた。
「姫君のことか？」
「あ！　知ってるんですか！？」

思わず声を大きくすると、うるさそうにエルは顔をしかめた。
「俺を誰だと思っている。副長だぞ」
「……それはそうでしたね」
すっかり忘れていた。
「忘れるな。……まぁ、その反応だと、姫君がここの書物を持って行ったということか？」
「そうなります」
「とすると、こちらさんは精霊か？　通りで気配が違うと思った」
「はい。私はイージュ様の闇の精霊でございます」
静かに頷くミディア。すっと、エルの目つきが厳しくなった。
「お前があいつにした仕打ち、忘れはせん。……たとえ姫の精霊だろうと、許されることではない」
ミディアは答えなかったが、深く、深く一礼した。リーナスは、その姿から感情を読み取ることはできなかった。
「ところで、その本、返しにきたのか？」
エルが、まだ厳しい目つきながらも尋ねる。
「そうなんです……。もうヘトヘトで」
「あぁ。俺が侵入者よけの古代魔法陣を使ったからか」
エルが扉を指さした。けれども、それはただの分厚い扉で、一言で言ってしまうと、何の変哲もない扉だった。
「古代魔法陣……？　何ですか？それ。変わってるように見えませんが」
「名前のまんまだよ。簡単にいえば古くから伝わる、威力の高い魔法陣ことだ。原因も分かったことだし、解除してやるよ」
エルがほんの少し微笑んで言った。
「やったぁ！　ありがとうございます！」
飛び上がって喜ぶと、エルの笑みははにかんだような笑みに変わった。照れ隠しなのか、早々にリーナス達に背を向けて扉の前に立つ。
「……」

エルが扉の前に仁王立ちになり、両手をかざした。その瞬間、扉に複雑な魔法陣が白銀の光とともに現れ、ぼうっと光った。
ブゥウウウン。
低くうなるような音が扉から発せられる。そして、大量の魔力が肌に伝わり、ぴりぴりしてきた。小さく電流が通っているような感覚に、リーナスは思わず肌をさすった。
そして、エルが低くつぶやくと、魔法陣は一瞬で消え、それとともに光も消えた。

「……何か、あっけないですね」
しばらく経ってからやっと声を出すことができた。
「あっけないとか言うな。これでも、張るのにはかなりの時間が必要なんだ。古代布陣だから見つけ出すのも大変だったんだ。隊長が今日の朝、いきなり持ってきたんだぞ？」
いかにも隊長らしい。きっとエルは『こんなの俺には出来ません』なんて反論しながらも、結局は、やるはめになってしまったのだろう。真面目な性格が仇となっているのだ。
「……これで解除されたんですね？」
「あぁ。姫君が本を転移させることもできるだろう」
エルが大きく頷く。
「何でそれを！？」
「魔術の痕跡から分析した。魔術の感じがあの炎と似ていたからすぐ分かった。ところで、提案なんだが、俺も姫君に合わせてくれないか？一応はこの事件の責任者であるからして、会わずして帰ることはできない」
ミディアを振り返ると、ミディアは固まっていた。
「ミディア。大丈夫だと思う？」
「主なら、今は大丈夫だと思います」
ミディアが静かに答えた。そういえば、古代布陣にも動揺を一切

見せていなかった。
「じゃあ決まりだな。本は外に一回追いとけ。親衛隊でも、中に入ることは許されていないからな」
エルの指定された場所の本を置くと、ミディアが紫の光のシールドを張った。侵入者から本を守るためだそうだ。
「転移を使ってもよろしいでしょうか？」
エルが頷いたのを見て、リーナスも頷く。
「それでは……行きます！」

到着しても、やはり目の前にあったのは積み上げられた本だった。本の数はまだまだ大量で、これを手作業で、降ろさなくてはいけなかった考えると、気が遠くなりそうだ。本当に、良かった。
「……あら？　お客かしら」
イージュのうんざりしたような声が聞こえてきたが、本人がどこにいるのかは、本に囲まれていて分からない。
「ミディア。布陣は確実に解除されたのよね？」
「はい。確実です」
「じゃあ送りかえすことにしましょう」
イージュが小声で何かを詠唱すると、そこら中にあった本がほんの一瞬で消えた。そして、イージュの姿が露わとなった。
（本が……消えた！）
あんなに苦労して運んだ本が一瞬で消えてしまうのを目の当たりにすると、何だかやるせない気持ちになる。それにしても、イージュの魔力はやはりすごい。あれだけの本を一気に転移させてしまうなんて。
「……！」
隣で、エルが息をのんだ音が聞こえてきた。びっくりして、横を見ると、エルが固まったままイージュを見ていた。
「……あなたが布陣の？」

エルが頷く。
「あんなの張ったら困るのよ。古代布陣だから解除しようにもめんどくさいし。あんた親衛隊よね？　ま、だれにも言わずに借りてったのは悪いとは思うわ。でも、私にはその資格があるのよ。そこ、忘れないで」
「……はい」
（おいおい！　副長！　どうしたんですか！！）
イージュを相手にして、何も言えなくなったエル。横目でみると、彼の視線はイージュに釘付けだった。悪い予感がする。それも特大の。
「な、なによ」
イージュがその視線に気付いたのか。エルに尋ねる。
「とても、おきれいですね」
「「！？」」
そこにいる人全員が度肝を抜かれた。リーナスに関しては、腰が抜けて座り込んでしまった。
「ぶ、侮辱してんのかしら？」
イージュがそれでもつっかかる。
（はぁ！？　ふ、副長どうしたの！？　頭どうしたの！？）
頭は混乱してパニック状態だ。ある意味、親衛隊に合格した時よりもパニック状態である。エルを止めようと手を伸ばすも、その手まで震えている始末だった。
「俺が出会った中で一番美しいです」
服を掴める寸前で聞こえたそのセリフに、あっけに取られて、エルをぽかんと見つめると、その瞳は、恋に落ちてしまった人特有の潤んだ瞳だった。
（も、もう止めてよ副長……。あ、あたしもう……）
自分では意識していないうちに涙が出てくる。信頼していた副長。その人がこんな人だったなんて。
（女の人に免疫なさすぎ！　普通、惚れた相手でも初対面でそんな

こと言わないって！！）
いろいろつっこみたいが、そんな雰囲気ではない。それに、イージュもまんざらではなさそうだ。
「……！？　ま、一応ありがとう」
（やばいよやばいよぉ……。副長が壊れた……。崩壊だよぉ）
リーナスの眼前で、尊敬する副長の像が、がらがらと音を立てて崩れていく。どこまでどん底に下がればいいのか分からない。
泣きそうになっているリーナスを尻目に、エルはその後も大きく、大きく崩壊していくのだった。

２４　～崩壊～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

25　～準備～

そして、すっかり日が暮れた頃。リーナスの部屋では、リーナスによる、カームリへの必死の説得が続いていた。その題材とは、もちろん『副長について』である。

「リーナス、嘘を言わないでくださいよ」
カームリが、声を立てて、楽しそうに笑った。
「嘘じゃないんだって！　何回言えば信じてくれる？」
必死に言うも、カームリは軽やかに笑うのみ。信じてくれる素振りを一つも見せてはくれない。このやりとりが先ほどから何回も繰り返されている。
「何回言っても無理ですわ。あのエルさんがそんなこと、あり得ません」
リーナスは大げさに、がくりと肩を落とした。
（なんで分かってくれないの……）
「だってさ、あたしこの目で見たんだよ……。あの副長がさ」
思わずくってかかるとカームリになだめられた。
「まぁまぁ、肝心の事は聞けたのですか？　イージュ様の真相は？」
やっとのことで顔を上げると、カームリが輝く瞳でこちらを見ていた。エルの話ではなく、そちらの話を待ちわびていたのは一目瞭然だ。
「……あ、忘れてた。副長のことで頭がいっぱいでさ……。帰りたがらない副長を根性で返して。その後イージュが欲しがるものを片っ端から集めてきて、荷物を作って……。大変だったんだから」
思わずため息が出てしまう。
「……荷物を作って、どうするのですか？」
カームリが、笑みを隠して尋ねた。
「あ……。それなんだけど、あともう少し経ったらミディアとどっ

かに出かけるらしい」
「ミディアさんとは、あの方の精霊ですよね？」
「うん。そうなんだけどさ。何でも、イージュはそのことを重要なことだと考えてるみたいで、あたし、役に立てるかなぁ」
頭を抱えると、カームリは小首をかしげた。
「……何でリーナスまでついて行くのですか？」
「何でだろうね。あたしにも良く分かんないんだ。明日行ったら、詳しい説明するって言ってたし」
「それにしても、リーナスは出世しましたね。わたくしは多分、いつまでもこのままですわ」
カームリが小さくため息をついた。
「カームリは治療師として、この隊に必要な存在だから、仕方がないよ。あたしなんて、言っちゃえば、隊にいなくても言い存在だから、イージュ達といるんだよ」
軽くふざけて言った。その時。
「……リーナス！」
カームリが珍しく声を荒げた。カームリの厳しい叱責に、思わず肩が跳ねてしまう。
（……言い過ぎちゃったかな？）
次には厳しい言葉が来ると思い口をつぐんで待つ。しかし、カームリは静かに諭すように言った。
「……自分をいらない存在なんて、言わないで下さい。わたくし、そういう考えは好きではありません」
カームリからは『悲しみ』が漂っている。心の中に素直に謝罪の気持ちが浮かんだ。
「うん……。ごめん」
「いいんですわ。わたくしも、取り乱してすみませんでした」
そのまま、二人の間に気まずい静寂が流れた。
「リーナス」
カームリがそっと呼ぶ。

「何？」
「……お仕事、頑張って下さいね。ある意味、あなたの仕事が一番辛いのですから」
頭の中でイージュを思い浮かべる。彼女の相手は、確かに、がさつな男連中には一番辛いかもしれない。
「頑張るよ。カームリもね」
歯を出して笑って見せると、カームリも微笑んだ。
「ええ。では、お休みなさい」
「お休み」
二人の夜は、こうして更けていった。

「遅いっ！」
目をつり上げながら怒っているイージュに、リーナスは思わず身を縮めた。
「大体、あんたバカでしょ？　バカ以外の何者でもないわ！」
「すみません……」
頭を深く下げたが、イージュの怒りは収まらない。イージュの感情を読み取ることは、なぜか出来ないので、怒りの度合いを知ることが出来ない。
（……うぅ。何もこんなに怒らなくてもいいじゃん）
朝、リートとの約束の通りに中庭に向かったが誰も来なくて、ついついそこで居眠りをしてしまったのだ。ミディアが来てしまってから、カームリが探しに来たのだが、それで思いの外時間が遅くなった。
そして、今日のミディアとイージュは何故か機嫌が悪く、こうして八つ当たりされていると言うわけだ。
（……何でこんなに怒られなきゃいけないの？）

自分が悪いのは確かだが、遅れただけでそこまで怒らなくても良いはずだ。何が合ったのかは分からないが、イージュの八つ当たりの矛先は確実に自分に向いている。
（でも、ここで反抗したら殺される可能性もゼロじゃないよね……）
イージュの怒り具合を見ると、あり得る。それほど機嫌を悪くした何かが、リーナスの他にはあるということだ。
（これは、耐えるしかない……）
そう判断したリーナスは、ただ口をつぐんで、嵐が通り過ぎるのをじっと待っていた。

「ま、今回のことは、これくらいにしてあげるわ」
そうして時間は流れ、ようやくイージュの機嫌が収まった。あの怒りが変な方向に行かなくて良かったと、リーナスはこっそり胸をなで下ろす。リーナスが傍にいながら、また山を燃やされた、なんてことがあったら末代までの恥だ。

「……リーナス、そこに座りなさい」
イージュが椅子を指さした。リーナスは、イージュが言った通りに、静かに椅子に座る。イージュも、向かいにある椅子に腰掛けた。その動作の一つ一つが流れるようで、リーナスは思わず見とれてしまう。
イージュと目が合った。その瞳は、どこか冷たい。
「あんたに、行って貰いたい場所があるの。昨日、詳しく話すって言ったわよね？」
小さく頷いた。
「あんたに行って貰いたいのは、ここから北に行った山の中よ。
城下町を通っていかなきゃいけないから、あんたに行って貰うことにしたの。
私もミディアも、所詮この城の人間。だから、外の世界に詳しい

あんたを付き添いで行かせることにしたの。……何か質問は？」
リーナスは、おずおずと口を開いた。
「あの、何でミディアが行くの？」
この間、言われたので敬語は無しだ。それでも、敬語無しで話すのにはまだまだ慣れそうにない。
「私はこの塔から出られないのよ。あんたの父親の糞エスライがそういう魔術をかけたの！
あいつが死んだから出られると思ったのに、どうしても無理で」
イージュが睨んだ。
（父さん……何してんの）
心の中で父を恨む。
「でも、前に一回会った時は……」
「ああ。あれは私が作った空間だから。他に質問は？」
イージュがあっさりと受け流した。
「……なぜ山の中に？」
「それはあんたに話しても分かりそうもないから言わない。他には？」
（……その言いぐさちょっと傷つく）
作り笑顔が引きつりそうになったが、そこはあえて我慢した。イージュにはできるだけ逆らいたくない。
「もう大丈夫」
「……なら、今日は何をしようかしら？　荷造りは終わったし……。そうだ！」
いきなり明るい声を上げたイージュに、リーナスは虚を突かれた。こんなに、いきいきとしているイージュを見ていると、少し嬉しい。
「あんた、私と剣の勝負しない？」
イージュの不敵な笑みは、どこまでも妖艶な笑みだった。

25　～準備～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

26　～発見～

リーナスがイージュにがっつりとしかられる、少し前に、時は戻る。

だんだんと朝日が部屋に差し込む。そういえば、今日も寝ていなかったとイージュはうっすらと思った。これで、徹夜記録四日目に到達した。この程度の徹夜なら、もう体に慣れすぎて、さほど影響はない。

読んでいた本を床に置いて、かちかちになった体をほぐそうと、大きく背伸びをしたその時。

「イージュ様……！」

ミディアが珍しく焦った様子で声をかけた。その声音に、不吉なものを感じたイージュは、思わず顔をしかめる。

「何？　いきなりどうしたのよ？」

「……これを見てください！」

ミディアが持ってきたのは、先ほどまでミディアが読んでいた本である。この国の全盛期を作り上げた女王、メリフォンナ・ラーンナーの日記らしきものをまとめた手記だ。これを見ると、いかにメリフォンナがこの国の政治に手を焼いていたのか分かる。ただ、イージュたち以外の一般人にとってはかなり退屈なものだろう。

「これがどうしたの？」

ミディアが驚くような事があるということは相当だ。胸にどす黒い不安がにじみ出す。

「……このページだけ、なくなっています」

「……そんな！」

悲鳴にも近い叫び声をあげて、その本をひったくるようにして受け取る。城の奥深くに眠っていたこの本は、保存の魔術が効いてい

たのか、目立った外傷もほこりもついていない。そのはずだが、なぜページがなくなるようなことが起きてしまったのだろう。
ページをぱらぱらめくってみると、その訳が分かった。
「誰かが、ここのページだけ破いたようね……」
思わずため息が漏れる。これは、イージュたちにとってかなり貴重な品なのだ。無造作に切り取られて、ぎざぎざに小さく残されたページが、不憫でたまらない。端に少し書いてある文字を見ようと顔を近づけたが、良く見えない。
「良く分からないわね……。ミディア、見えるかしら？」
ミディアが顔を近づけてのぞき込む。その顔は、心なしか青白いように見えた。
「……いいえ。すみません」
ミディアが悔しそうに謝る。
「いいのよ、仕方ないわ。それにしても、誰がこんなことを……」
今すぐ犯人をつかまえて八つ裂きにしたいくらいだ。
（いえ、八つ裂きだけではすまさないわ。生き地獄にしてやる……）
「こんな貴重なものを……許せないわ」
そうつぶやくと、ミディアも硬い顔で頷いた。こう見えて、ミディアもかなり怒っているのだ。
「魔術の痕跡は……？」
ミディアに聞かれ、目をつぶって本に意識を集中させた。自分の魔力を超音波のようにして送ることで、他の魔術の痕跡を探し出すのだ。
「……少し。ほんの少しあるわね」
自分では、完璧に痕跡を消せたと思っていたのだろうが、イージュには全てお見通しである。ただ、これは自分で消して薄れたわけではなく、時の経過とも関係がありそうだ。
目を開くと、ミディアが難しい顔で考え込んでいた。
「うーん……。こんな微量じゃ、魔術の源を、たどっていくわけにはいかないわね……」

イージュがつぶやくと、ミディアは顔をあげて尋ねた。
「イージュ様。なぜ犯人はこの本を狙っているのでしょう？」
一瞬言葉に詰まる。
「……分からないわ。だって、この本には、メリフォンナの日記しか書かれていないもの。一般人が、そこまでして持って行く要素があるのかしら？」
「……そうですよね」
ミディアは口をつぐんだ。イージュは部屋の中をぐるぐると歩き回る。何か動いていないと、この行き場のない怒りが爆発してしまいそうだ。そうしてしまえば、この手記ももしかしたらなくしてしまうかもしれない。そう思うからこそ、我慢していられる。そう考えると、今までこんなに怒りを抑えていられたのは、奇跡に近い。
そんなことを考えていると、ふと恐ろしい考えが頭に浮かんだ。とても恐ろしくて口には出せない。ただ、ミディアには言わなくても感情が分かる。
「イージュ様……！」
ミディアがこちらを向いて絶句した。
「ど、どうすればいいのかしら……」
イージュは、柄にもなく動揺している。どうしようもなく動揺している。声が震えてしまうのはそのせいだ。だから決して、怖い訳ではない。そう、自分を必死で落ち着かせる。
「……大丈夫です。落ち着いてください」
ミディアが優しく言った。自分だって、動揺しているはずなのに、そんな素振りを一つも見せない。そんな姿に、イージュの動揺もだんだんと収まってくる。
「ね、ねえミディア……？　私の勘が外れていないなら、これから大変なことになるわ」
ミディアの目をまっすぐ見つめて言った。紅の瞳は、憎たらしいほど落ち着き払っている。いつもいつも、変わらない。
「……そうですね。……イージュ様。私とリーナスが行っている間、

魔術の痕跡を分析していただければ助かります」
「……！？　どこに行くの？」
一瞬頭の中が真っ白になった。
「泉ですよ。測定しに行くんです」
ミディアは静かに言った。そこでやっと記憶が戻ってくる。
「そうだったわ……」
深い虚脱感を感じた。
「こんなときにそんなことを、ちまちましてなきゃいけない、なんて、馬鹿げてるわ」
ふつふつとまた怒りがこみ上げてくるのを感じる。
「仕方ありません。今は、それしか手だてがないのですから。……時間なので、リーナスを迎えに行ってきます」
ミディアが礼をして消えた。その後には、いつもの通りの静寂が訪れる。
「いいわ。絶対に突き止めてやるから」
イージュは怒りを何とか沈めて、つぶやいた。

「……歯車が、回り出したわね」

その声は、誰もいない部屋に、静かに響き渡った。

26　～発見～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

27　～出発～

「あんた、私と剣の勝負しない？」
その言葉に思わず後ずさりをしたその時、待ち望んでいた救世主が現れた。
「イージュ様。そんなことをしている場合ではありませんよ」
ミディアだ。険しい顔でイージュを睨んでいる。それこそ、リーナスがやってしまったら確実に殺される顔だ。長年のつきあいとはやはり大切だと、しみじみと思う。
「今から急げば間に合うと思いますので、行ってきます。リーナス、そこの荷物お願いします」
ミディアが指を指した荷物を持ち上げる。恨めしそうなイージュの視線が痛い。
「そう……。でもリーナス、帰ってきたら絶対だから、覚えておきなさいよ」
今日は意外とあっさり引いたと思いきや、最後に鋭く睨まれて、冷や汗が出てきた。
「はい」
明らかな作り笑顔で頷く。イージュの瞳は相変わらず鋭い。
「では、イージュ様。そちらの作業の方、頑張ってくださいね」
「分かったわよ」
ミディアが言うと、イージュはふくれっ面で頷いた。ミディアは楽しそうな顔でリーナスを手招きする。
「今から城の門の所まで転移します。しっかり掴まっててください ね」
頷くと、その瞬間に転移は始まった。体が左右に引っ張られる、おなじみのあの感覚だが、カームリの薬のおかげで今日もそれほど苦痛はない。若干楽しみながら、転移を終えた。

外に出た瞬間、強烈な太陽の日差しが、暗いイージュの部屋に慣れてしまった目にしみる。それでも、慣れてしまえば、さんさんと降り注ぐ太陽が気持ちよかった。隣のミディアを見ると、ミディアも気持ちよさそうに目を細めている。

二人が出てきたのは、城門の近くの物陰。上流階級の人々が暮らしている場所に当たる。不自然に物陰にいると、人に見つかって大変なことになる。二人は、暗黙の了解で、急ぎ足で通り抜けた。

しばらく歩くと、城にはない騒々しさが、二人の耳に届いた。ミディアにとっては久しぶりに当たるのだろうか、とてもいきいきとした顔をしていた。リーナスにとっても、この国に来てからまだ二回目なので物珍しい。どちらかと言えば、ミディアより落ち着かなく辺りを見渡している。

やはり城下町は混んでいた。青空の下に広がる屋台。たくさんの食べ物。魅力的な品物に、歩くたびに目が吸い寄せられる。

（おいしそう……）

「……食べたいですか？」

ある店の食べ物を見ていたら、ミディアに笑いながら声をかけられた。

「いいや。大丈夫。……？」

ミディアが笑いを必死でこらえているのが気になる。

「どうしたの？」

「リーナス、口元によだれが」

「……！？」

慌てて口元をぬぐう。無意識に出ていた。一気に頬が熱くなるのを感じながら、今度は気を付けようと固く心に誓った。

（……イージュじゃなくて良かった）
こっそりそう思ったリーナスだった。

「ミディアは、ここに来たことがあるの？」
人通りが少ない所に出た。早速ミディアに話しかける。
「ええ。昔ですが、イージュ様が食べたいと言ったお菓子を買いに来たのです」
「へぇ～。あのイージュがお菓子、かぁ」
いつも怒っているあの姫君を思い出す。絶対に甘いお菓子なんかは食べないような顔をしているが、それでもやはり女の子といったところか。
「ええ。イージュ様が、まだ幼い時でしたね。何でも、友達が食べていたお菓子を自分も食べたいとか言い出して。思えば、あの頃から負けず嫌いでした」
「友達、いたんだね」
思わずぽつりと言ってしまった。友達なんて、リーナスには一人もいない。
「それは、塔に閉じこめられる前のことです」
ミディアが少し俯いた。
「その話、もっと詳しく教えてくれない？」
「……少しだけなら。でも、ここでは駄目ですよ。どこで誰が聞いているか分からないですから」
辺りを見渡しても危険人物はいないように見えるが、一応は用心しておいた方が良いのかもしれない。リーナスは慌てて口をつぐんだ。
（これじゃあ、あたしは父さんみたいな諜報員にはなれないなぁ）
同じ血が流れているなら、少しぐらいはその才能が欲しかったなどと考える。
（剣の腕に関しては感謝してるけどさ）

それからまたしばらく歩くと、ようやく城下町の外れにたどり着いた。大きな木製の門が、旅人たちを威圧している。その時、リーナスは重要なことに気がついた。
「あ……！　証明書」
思わず大きい声を出してしまい、近くを歩いていた人にうるさそうな目で見られた。それでも今はどうでもいい。
「……？　証明書とは何ですか？」
ミディアは、知らなかったようで首をかしげる。
「あたしも一応兵だから、何かの命令でここから出ることになったら、隊長にそういう書類を渡さないといけないんだ」
行く前に、隊長に知らせておけばよかった。突然だったので、当然カームリにも話してない。自分の情けなさに泣きたくなる。
「どうしよう……。このままじゃ門も出られない」
今のリーナスは制服を着ているので、必ず兵士に声をかけられる。そうしたら、城に呼び戻されるのは目に見えている。時間がないらしいので、そうなったら大変だ。
「では、私の妹ということにして、変身の術をかけてみますか？」
「できるの！？　なら、お願いします」
「では、少しこちらに」
ミディアの誘導で、少し離れた路地に入った。少し暗くてじめじめしている。少しおびえるリーナスに、ミディアはほほえみかけた。
「大丈夫です。痛くはありませんから」
そう言ってから、ミディアは呪文をつぶやく。すると、全身がほわほわと暖かくなってきた。
「うあ！　すごいね、これ」
思わず声をあげる。体の端っこからだんだんと熱くなってきて、熱さが消えると、そこはもう別人の体だ。それが全部終わったとき、

そこに立っていたのは、正真正銘、別の人間だった。
「よし、完璧です」
ミディアの妹という設定にしてあるので、少し背が低い。それに細い。動くたびに黒い長い髪が揺れる。服は、ミディアとは違う、ゆったりとしたワンピースだ。小さい時以来、久しぶりのスカートなので、少し恥ずかしい。
「隊長たちにはどうやって説明しよう……」
容姿に関しては完璧だが、どうやって隊長やカームリに、このことを知らせるかが問題だ。少しの間、黙って考え込んでいるとミディアが口を開いた。
「そうですね……。手紙に飛翔の術をかけて飛ばせますか？　それなら、人に見つかる可能性はありますが、きちんと届くと思います」
「ホント！？　良かった。それならきっと隊長にも届くから大丈夫。……後でちゃんと事前に報告しなかったから怒られると思うけど」
そのことを考えると少し憂鬱だ。
「さっきの荷物の中に紙が入ってますから」
そういえば、イージュに用意させられた荷物の中に入っていた。がさがさと音を立てながら探し出す。
「何て書こうかな。隊長に直接届けるのはちょっと怖いから、カームリに言って貰おう。
『イージュの命令で、少し離れた山にミディアと一緒に行ってきます。隊長に知らせておいてください』よし、これで良いかな？ミディア、お願い」
きれいに折りたたんでミディアに渡す。
ミディアは、短く呪文を唱えて、それにふうっと息を吹きかけた。その途端、手紙から、力強い白い鳥の翼が生えた。純白の羽がきらきらと日に当たって輝いている。
「うわっ！？」
思わず変な声を出してしまったリーナスだが、手紙はそれを気にせずにぱたぱたと羽ばたき、リーナスの目の前に浮かんだ。良く見

れば、かわいいような気もしなくもない。
「行き先を指定して下さい」
ミディアが静かに諭す。
「え！？　うーんと、親衛隊のカームリの部屋のテーブルに行ってちょうだい」
手紙は、人の言葉が分かるかのように頷き、高く舞い上がった。
「これで完了です」
手紙が空に消えていくのに、そう時間はかからなかった。

――手紙は、高く、高く舞い上がる。

27　～出発～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

28　～過去～

無事、城下町の外に出たリーナスたちは、王城では見ることのできない、豊かな自然を楽しんでいた。リーナスの故郷であるダングル帝国とは違い、青々しい森がたくさんあり、目に入るものすべてが新鮮だ。ひとえに緑といっても一色ではない。濃い緑。黄色に近い緑。柔らかそうな新緑の色。リーナスの髪の色に近いものもある。この間、任務で外に出たときは夜だったので、すべて見られるこの時間帯に行くことができたのは幸運だったとリーナスは思った。

リーナスたちが歩いている街道には、ぽつぽつと人が歩いている。荷物をしょっている人が圧倒的に多い。城下町から出てくる人は大きな荷物を、城下町に向かう人は小さなバックを持っている。少ない荷物のリーナスたちは、これまでにもう何人もの人々を追い越している。

「ねぇミディア。何でみんな重そうな荷物をしょってるの？」

歩きながらミディアに尋ねた。

「そうですねぇ……。城下町は物も豊富ですし、安いですから、どこかへ売りに行くのでしょう」

「どこだろう？　ここの国の地理は良く分からないんだよね」

「あなたはここ出身でしょう？」

ミディアがいたずらっぽく笑う。

「そうだけど……。よく分からないんだよね。記憶ないから」

頭を掻きながら言うと、ミディアは一瞬だが悲しみを帯びた顔をした。

「……記憶がないとは、悲しいことですか？」

「うん？　どういうこと？」

もう一度尋ねるつもりでミディアを見ると、顔は笑っていたが、目は笑っていなかった。瞳に宿す悲しみを察して、思わず息がつまる。

「文字通りです。例えばですよ、とても辛い思いをしたとします。もう一生忘れられないような。……そのことを忘れて生きた方が良いですか？　それとも、そのことで一生心を悩ませて過ごしますか？　あなたなら、どちらを選びます？」
ミディアの憂いを帯びた顔に、言葉を発することができなかった。
「……あたしは」
少し経ってから、やっと口を開く。
重たい荷物を背負った人を追い越していく。彼らは、一体どこにいくのだろう。
「あたしだったら、知りたいな。そのことも、あたしの大切な思い出だし、そのことを忘れたら、あたしでなくなるような、そんな気がするんだ」
ミディアは何も答えなかった。

「……あなたは、強いですね。イージュ様にも負けないかもしれません」
しばしの静寂の後、ミディアが口を開いた。
「イージュ様にないものを、あなたは持っています。もちろん私にも」
「あ、あたし、今戦ったら絶対イージュに負けるよ？　イージュの魔術、かなりすごいし」
慌ててそう言うと、ミディアは声を立てて笑い出した。
「な、何で笑うの？」
恥ずかしさで思わず強い口調になってしまう。ミディアはそれでも笑い続けていた。
「あなたが魔術や剣術でイージュ様に勝てるなんて、そんなの、夢のまた夢です。私は、精神力のことを言っているのですよ」
「……精神力」
ミディアは力強く頷いた。笑い止んだその瞳は真剣だ。

「イージュ様は、幼い頃、自分の思うとおりに魔術を使うことができませんでした。そのためいつも自分の殻に閉じこもっていたのです」
「ちょ、ちょっと待って。人、いるよ？」
いきなり説明に入ったミディアに慌てて声をかけるも、ミディアはそっと首を横に振った。
「大丈夫です。いなくなりました」
こっそり辺りを見渡すと、先ほどまでいたはずの人々は遥か後ろに消えてしまっていた。
（あたしたち、歩くのこんなに早かったっけ？）
「さぁ、話に戻ります。イージュ様は、自分の感情をコントロールすることができなかった。感情の高ぶりとともに魔術が発動して、物を壊すのも、日常茶飯事だったのです」
ミディアは俯いた。相変わらず、感情は読めない。
「イージュと、かなりの付き合いになるんだね」
「ええ。イージュ様が六歳の頃に契約しました。けれど、私と契約しない方が、イージュ様は幸せだったと思います」
辛いはずなのに、顔を上げて、微かにミディアが微笑む。その痛々しい微笑みを見ることができなくて、リーナスはそっと俯いた。
「私と契約したあと、イージュ様はすぐにあの事件に巻き込まれました」
思わずごくりとつばを飲んだ。
「あの事件のとき、暗殺者は親衛隊が斬り捨てたのではなかったのです。……イージュ様が、殺しました」
「！？」
思わずびくりと顔を上げてしまった。紅の瞳は落ち着き払ってリーナスを見返す。
「その暗殺者は、実はある貴族の男でした。紆余曲折の後、イージュ様はやむなく塔に閉じこめられることになりました。……その計画を発案したのがあなたのお父上、エスライ殿です」

「……父さんが」
思わずつぶやいてしまったリーナスを、ミディアが励ますように肩を叩いた。
「イージュ様はエスライ殿を、本当の意味で憎んではいません。ただ、気持ちが違う方向に向いてしまっているだけです」
ミディアは淡々と言う。
「ね、ねぇ。何も閉じこめること無かったんじゃないの！？」
つっかかても何も変わらないのは、リーナスにだって分かっているはずなのに、声を荒げてしまうのは止められなかった。
「……私はここまでしか言いません。後は自分自身で考えて下さい」
涼しい顔でまとめたミディアは、少し早足になった。
「早くしないと日が暮れますよ」

しばらく無言で歩き続ける二人だったが、途中で休憩所で休憩をとることにした。無人の休憩所である小さな小屋だ。元々は木こりなどが住んでいたのだろう。
「ふぁー。疲れたかも」
入るやいなや、一番先に見えた備え付けてあったベットに、一目さんに潜り込む。
「リーナス。またすぐ行きますよ？　第一、親衛隊がこれくらいで疲れていてどうするんですか？」
遠くからミディアの足音と、お説教の声が聞こえてくる。どうしようもなくまぶたが落ちてくる。
「それはそうだけど、この所色々あったしさ、さっきの話も、歩いてくる間に考えてたから、なんか疲れちゃって。しょうがないよ。少しでいいから寝かせて」
結局、リーナスが納得のいく答えは出なかった。後でカームリとフィリアスに相談しようと決心する。そういえば、リートは朝、中

庭に来てくれなかった。少し、というかかなり期待していたリーナスは小さくため息をつく。
（具合でも、悪くなったのかな？）
あの顔色からみてそれが一番あり得る線だ。
「……あと少ししたら起こしますからね」
（これで了承はとれた……）
そう思った傍から、意識が消えていく。リーナスは、そのまま眠りについた。

笑い声で、目が覚めた。先ほどより軽くなった体を起こすと、ミディアと知らないおじさんが、仲が良さそうに談笑していた。
先ほどは気づかなかったが、ここの小屋は、意外と見た目より大きいことが判明した。ベットは二つ用意されているし、きちんとテーブルと椅子まである。木の香りが、リーナスの鼻をくすぐった。
（それにしてもうるさい……）
「リーナス、起きましたか？　あと少し寝ていても良かったのですけど」
リーナスに気づいたミディアが、困った顔で告げた。
「何で？」
「あの後すぐに、雨が降ってきてしまったんです。雷も鳴っているようですし、ここで雨宿りでも」
今まで笑い声で気づかなかったが、耳を澄ますと雨粒が屋根に叩きつけられる音がとぎれることなく聞こえていた。かなり強い音なので、夕立の一種かも知れない。雨が少ないダングルではあまり体験出来ないことだ。
「そっか……。イージュには連絡とかした？」
「ええ。ばっちりです」
自信満々にうなずくミディア。
「ところで、そちらの方は？」
知らないおじさんに目を向ける。改めて見ると、ラーナリアンで

は珍しく、少し煤けたような色の服を着ている。扉の横にはおじさんの物と思われる大きくふくらんだリュックがあり、雨に濡れてしっとりしている。そしておじさん本人も、茶色の癖毛がぐっしょりと濡れている。

おじさんは、布で頭を拭きながらリーナスに笑いかけた。

「外はすごい雨で、こちらに寄ってみた、通りすがりの者です。お嬢さんたちは大丈夫かい？」

（確かに、こんな細くて力なさそうなメンツだとなぁ……）

心の中でそう思ったが、そこはミディアがなんとか答えていたので、リーナスは口をつぐんだ。

そのまましばらく談笑する三人だったが、そのとき、外から大きな咆吼が聞こえてきた。

「な、何だ！？」

「何事っ！？」

リーナスとおじさんが言ったのは同時だった。そんな中、静かに状況を判断したミディアが言った。

「魔物……ね」

その言葉に、リーナスは鞘に差していた剣を抜く。こんな時、やるべきことはただ一つ。そしてミディアと顔を合わせて頷いた。

「おじさん、ここに残っててね！」

リーナスは、そう叫んで土砂降りの雨の中に、飛び出していった。

28　～過去～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

29　～不審～

そのころ。王城にいるカームリは。

「あ、雨……ですわ」

ベットに寝ころんでいたカームリは、窓を叩く雨音に、重たいまぶたを開いた。代わり映えしない窓から見える空は、自分の意識のようにどんよりと曇っていて、まだまだ晴れる気配はない。ごろごろと雷も鳴り始めている。リーナスは大丈夫だろうかと、ぼんやり考えた。

ある日、いきなりやって来たリーナス。彼女の持つパワーは絶大で、あのダグネスでさえその実力を認めているということを、カームリは知っている。でなければ、イージュの監視などという大任を任されることはない。今日もその任務のために出て行ってしまったリーナス。意外と、おっちょこちょいというか、抜けているところもあるので少し心配だが、きっと彼女なら良くやってくれているだろう。

「……！」

いきなり白い光が目の前にあふれ、次の瞬間には轟音が轟いた。雨音も一層激しさを増し、止むどころか、これからまた強くなっていきそうだ。

雷のおかげですっかり目が覚めてしまったカームリは、よいしょと体を起こした。今日は久しぶりの休みなので少し寝過ぎてしまったかもしれない。

（そろそろ隊長にリーナスの手紙のことを知らせませんと……）

枕元にたたんであった手紙を持ち、ごろごろしていたおかげで、ぐちゃぐちゃになった髪を整える。着ているのは制服ではなく、こ

の前買ったばかりの部屋着だが、まだ新しいので大丈夫だろう。そう思い、鏡をチェックしていたその時。

――トントン。

申し訳なさそうなノックの音が聞こえた。

「誰ですか？」

ドアに向かって声をかける。返答はなく、リーナスは急いで扉を開いた。

そこには、見かけない男の人が立っていた。雨の中を歩いてきたのか、蒼い髪から水がしたたり落ちている。まだ濡れている顔は意外にも整っており、だが血の気が全くなく、青白かった。

着ている服はカームリの着ている物よりもはるかに上等だということが一目で分かる、真新しい良い生地だ。

カームリが戸惑っていると、男の人はふんわりと笑った。今にも消えてしまいそうな顔色をしているのに、その笑顔だけは、なぜか脳裏に残る。

男の人は、カームリを静かに見つめて、口を開いた。

「リーナス、いるかな？」

「え……」

言われたことが理解できずに、カームリは目を瞬いた。

「リーナスに用があるんだけど、どこにいるか分かる？」

重ねて尋ねられ、カームリはようやく口を開いた。

「あ、あの。リーナスは今任務でいませんわ」

やっとそれだけ言うと、男の人は残念といった風に肩をすくめた。

「そっか。じゃあ、また中庭で待っていると、伝えておいてくれないか？」

「は、はい」

男の人のはにかんだような笑顔に、言われるままに頷く。

「ありがとう。じゃあ、よろしくね」

男の人はまた微笑んで、歩み去っていく。角を曲がりそうになったとき、我に返ったカームリは慌てて男の人を追いかけた。
「待ってくださいっ！」
珍しく覇気のある声を出して男の人を追いかける。男の人は、驚いた様子で目を見開きながら振り返った。
「あの、リーナスとどういった関係でしょうか？」
男の人は、カームリのぶしつけな質問にも気を悪くした様子を見せずに、また微笑んだ。
（随分笑う人ですわね……）
笑うだけで、血色の悪い顔でも少し明るく見える。男の人は照れたように頭を掻きながら答えた。
「知り合い……というか、約束してたんだ。リーナスに唄を聞かせて貰うね。結局は僕の都合がつかなくて、行けなかったんだ」
そこで、この間のリーナスの不可解な行動の意味が分かった。あんな所でぼうっとしているから何かあったのかと思ったら、そういうことだったのか。
（まさか、リーナスに……恋とか？）
心の中の野次馬根性がむくむくと首をもたげたリーナスは、男の人に尋ねた。
「お名前は？　わたくし、カームリと申します」
「僕はリート」
男の人は興味がないといったように、そっけなく返す。
「あの、部屋に入りませんか？　具合がよろしくないようですし」
（それに、部屋の中で、いろいろ話を聞き出せますし）
目の前にいる、この人物は怪しいところがありすぎる。高価そうな服といい、親衛隊の部屋を知っていたことといい。
（親衛隊の居場所は、余り多くの人に知られていないはず。ましてやわたくしとリーナスのところだけとは、怪しすぎますわ）
「大丈夫。お気遣いなく」
リートはまた微笑んだが、だんだんと顔色が悪くなっている。

「いえ、治療師の名にかけて譲れません。中に入ってくださいっ！」
半ば強制的に引きずっていこうと伸ばしたカームリの手を、リートは思いがけない大きい力で払いのけた。
「本当に大丈夫だから。心配しないで。じゃ、帰るよ。リーナスに伝えておいて」
「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！」
慌ててもう一度、裾をつかもうとしたが、リートはひらりとそれをかわし、一目散に逃げてしまった。
「……変な人ですわ」

「隊長。リーナスが、任務で城外へ行ったそうです。いつ戻るかは言っていませんでしたが、多分大丈夫でしょう」
カームリは、隊長の部屋でリーナスに関しての報告をしていた。大きな机では、エルが眉間にしわを何本も作りながら書類にはんこを黙々と押していて、当の本人はと言えば、ベットで大きないびきをかいていた。
したがって、カームリのこの報告も、事実上はエルにしているようなものだ。しかし、カームリにとってはもはや当たり前の光景になっているので別段驚きもしない。
ダグネスなんかは、いつ警護をしているのだろうと不安になるが、式典のときは立派な親衛隊長振りを発揮している。要するに、日常生活の警護は部下に任せきっているということだ。それだけ自分たち親衛隊員を信頼している、ということなのだろうが、もう少し仕事をしていても良いはずだ。このままいけば、エルの頭はあと十年で全部禿げてしまう。親衛隊の中ではエルがあと何年で禿げるか賭

けをしている者もいる始末だ。
「了解。俺が後で隊長に報告しておく。リーナスには、きちんと事前に報告するよう言っておいてくれ」
そんな賭けをされているとは、つゆほども知らないエルは、書類から目を離さずに答えた。
「はい。ありがとうございます。……あと、一つ気になることがあるのですが」
「なんだ？」
エルは、手を休めてカームリの方を向いた。
「わたくしとリーナスの部屋を、部外者が知っていたようなのです。リートと名乗る男性で……」
「な、なんだとっ！？」
カームリが言い終わらないうちに、先ほどまで寝ていたはずのダグネスががばっと起き上がった。
「カームリ、リートと名乗るやつはどんな外見だった！？」
強い口調に思わず口ごもる。
「え。蒼い髪の方で、少し弱々しい感じの……」
「あーーー。あいつバカだ。だからあんなこと聞いたのか。バカだ」
ばたんと痛そうな音を立ててベットに倒れ込んだダグネス。エルはというと、笑いをこらえるような顔をしていた。事情がよく分からないカームリがただ突っ立っていると、笑いながらエルが声をかけた。
「あー。カームリ。その方のことは気にしなくていい。それより今日は非番だろう？ゆっくり休め」
エルの言葉に、不思議に思いながらも、渋々カームリは部屋をでた。

途中で中庭を通った。まだまだ、雨が止む気配はない。
「リーナス、今日は変な人に会ってしまいましたわ。……あなたがはやく帰ってくれないと、わたくしは少しつまらないのです」

降りしきる雨が、つぶやいたカームリの声を消し去っていった。

29　～不審～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

３０　～猛獣　前編～（前書き）

遅くなってすみません。

30　～猛獣　前編～

「そんな……」

外に飛び出したリーナスは愕然とした。先ほどまでの威勢の良さはどこに行ってしまったのだろうかと思うほど、声が出ない。いや、出せないのだ。

待ちかまえていたのは、リーナスの背丈の倍ほどはある大きな熊、五体。よく小さい子が持っている、ぬいぐるみの可愛らしさ皆無で、大きな牙をむいてリーナスたちを威嚇している。

リーナスは、この時になってようやく我に返り剣を構えた。剣を構えていないときに攻撃されるなんて、剣士として恥ずべきことだ。そしてゆっくり、敵を良く観察する。熊たちは、鳴り響く雷にも知らん顔で、リーナスとミディアを睨みつけていた。

ふと気づくと、構えた剣先が柄にもなく、小さく震えていた。抑えようとすると余計に震える。そこまで自分はこの熊が怖いのだろうか。それとも、何か違う気配（てき）を感じているのだろうか。

もう一度辺りを見渡すも、こちらに向けられている殺気はこの熊たちが放っているものだけ。ではやはり、自分はこの熊たちを怖がっているのか。

（……それでも、あたしはやるしかない）

覚悟を決めて深呼吸をする。雨の香りを体いっぱいに吸い込み、後ろのミディアを振り向いた。

「ミディア。これからどうする？」

小声でミディアに尋ねる。熊に人間の話がわかる訳ではないのに、声のボリュームは何げなく下がる。ミディアの顔はこんな時でも涼

しげだ。この人は、世界が終わるとしてもこんな顔をしているのか、何てことを考えてしまう。そんなミディアに、張り詰めていた恐怖が少しだけ薄れた。
「倒すしかないですよね。私が一気に片付けるので詠唱の時間だけ作ってください。今の私の最大出力で行きますから」
不敵すぎる笑みを浮かべ、詠唱に入ろうと目を閉じたミディアの腕を、リーナスは泡を食ってつかんだ。
「ちょっと、何してるの！？　そんなことしたら、おじさんまで巻き込まれるよ！？」
荒げた声はひっくり返って甲高い声になり、説得力も何もなくなってしまった。思わず恥ずかしさに頬が紅潮したが、ミディアは笑うことなく、リーナスを無表情で見つめた。
「……私たちが生き残るためには仕方ありません」
何事もなかったように言い放つ。
「なっ……」
思わず絶句した。ミディアが、あのイージュの精霊だということをすっかり忘れていた。何がいけないのかわからない、といった風にただ無表情でリーナスを見つめている。
途端にどっと疲れを感じたリーナスは、諭すように言った。言った所で、到底ミディアには伝わらない、ということは分かりきっているが。
「今はあたしに従って。お願いだから」
細くて折れてしまいそうなミディアの腕を強く、強くつかんだ。そうしないと、ミディアが自分の手の届かない所へ行ってしまいそうだった。今でも十分に自分なんかが一生努力しても届かない力を持っているというのに。この人たちは、何だか放って置けない。
「……わかりました」
今気付いた。しぶしぶ、といったように頷くミディアが、実はイージュよりも怖い存在だったということに。イージュには悪いこと

だという自覚はあるが、ミディアの場合、その自覚がない。歯止めがきかないのでその分、怖さも倍増だ。
「一頭ずつ仕留めていくしかないから、ミディア。あたしが斬りかかったと同時に援護して」
「了解です」
話している間にも、熊たちはじりじりと詰め寄ってくる。ふとリーナスは、その熊たちの目が全て赤いのに気がついた。ミディアのような綺麗な赤ではなく、どす黒い血の色のような赤だ。デヴァ山で見た狼のような赤い瞳。隣のミディアも気づいたようで、首をかしげていた。何かに取り付かれているように見えて気味が悪い。
「それでも、あたしは、やらなきゃいけない。　……業火の元に集いし神よ。我が剣に御身の加護を」
低くつぶやき、身を沈めて一気に懐へ潜り込んだ。そのままの勢いで横に薙ぐ。熊は、咆吼を上げて爪を振り回した。その時、ミディアの魔術が熊の顔に、寸分の狂いもなく着弾する。動揺して大きく振り回した腕の下を、リーナスはくぐり抜けてもう一度斬りつけた。熊の体は傾いだが、それでも懲りずに、またこちらへ向かってくる。
（手ごわい……。息の根を止めるには……）
リーナスは、今度は後ろへ飛んでかわしてもう一度懐へ潜り込み、今度は心臓に向けて、力一杯、剣を突き刺した。熊の胸板は厚く、力一杯突き刺すも、半分までほどしか剣は埋まらない。それでも熊には致命傷だったようだ。
その瞬間、熊の目が一瞬だけ濃い殺意を帯び、次の瞬間には光が消え、熊は地面に倒れ込んだ。リーナスが剣を引き抜くと、あたりには濃い血が飛び散った。未だ止まない雨に血が混じり、そして流れていく。リーナスの雨でぐしょぐしょの体にも、生臭い血が飛び散った。顔にも数滴付いたが、雨に流れるに任せ、リーナスはまた他の敵に向かって走った。
仲間が一頭殺されたことで、熊たちは怒り狂った。その方がリー

ナスにはラッキーだったかもしれない。ミディアの魔術が着弾してよろけた熊を手当たり次第に斬っていく。それでも熊たちは一匹目の時に学習したのか、なかなか致命傷を与えさせてくれない。疲れだけが溜まっていく。

「ミディア！　被害が及ばない程度に威力上げて！」

剣を振るう合間に叫ぶ。

「分かりました！」

それが嬉しいのか、ミディアの声が少し弾んだ。その後、少し経ってから、炎がリーナスの頭すれすれを通って熊に着弾した。その途端、リーナスの目の前の熊から火柱が上がる。そのまま十秒もたたないうちにみるみる灰になった。

「あ、あたしに当たらないようにね！」

もう一度叫んでまた新しい熊へと向かっていく。リーナスは剣を振るうその前に、今度は光の矢が熊の胸を貫いた。

「さっすが！　あと二頭か……」

辺りを見渡すと、熊が二頭とも、小屋の扉をこじ開けようとしていた。かわいそうな扉は表面は爪でぼろぼろになっていたが、それでも何とか持ちこたえている。戦っていたうちに、リーナスもミディアも、扉を守ることをすっかり失念していた。

（くそっ……！）

焦りの感情がとたんに胸の大部分を占める。何も考えぬまま、リーナスは次の瞬間には大声で叫んでいた。

「あんたたちの相手はこのあたし！」

熊たちは即座に振り返り、リーナスに猛ダッシュしてくる。

（上手くいって良かった……）

これで、小屋から注意を逸らさせることはできた。あとは、この熊たちを片付けるだけ。リーナスは、今度は恐怖よりも闘志が燃え上がってくるのを感じていた。今なら何でもやれる。そんな気もしてしまう。

近づいた熊が放った大振りの攻撃を、身をかがめて避け、そのまま機会をうかがう。二頭一気に相手をするのは危険だ。後ろからは、低く呪文を唱える声が聞こえてくる。

「ミディア！　急いで！」

その時だった。

頑丈に閉めたはずの扉が、いきなり開いたのだ。

３０　～猛獣　前編～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6452s/

災いの姫君

2011年9月19日03時22分発行